牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

牛頸小田浦窯跡群

大野城市文化財調査報告書
第35集

1992

大野城市教育委員会

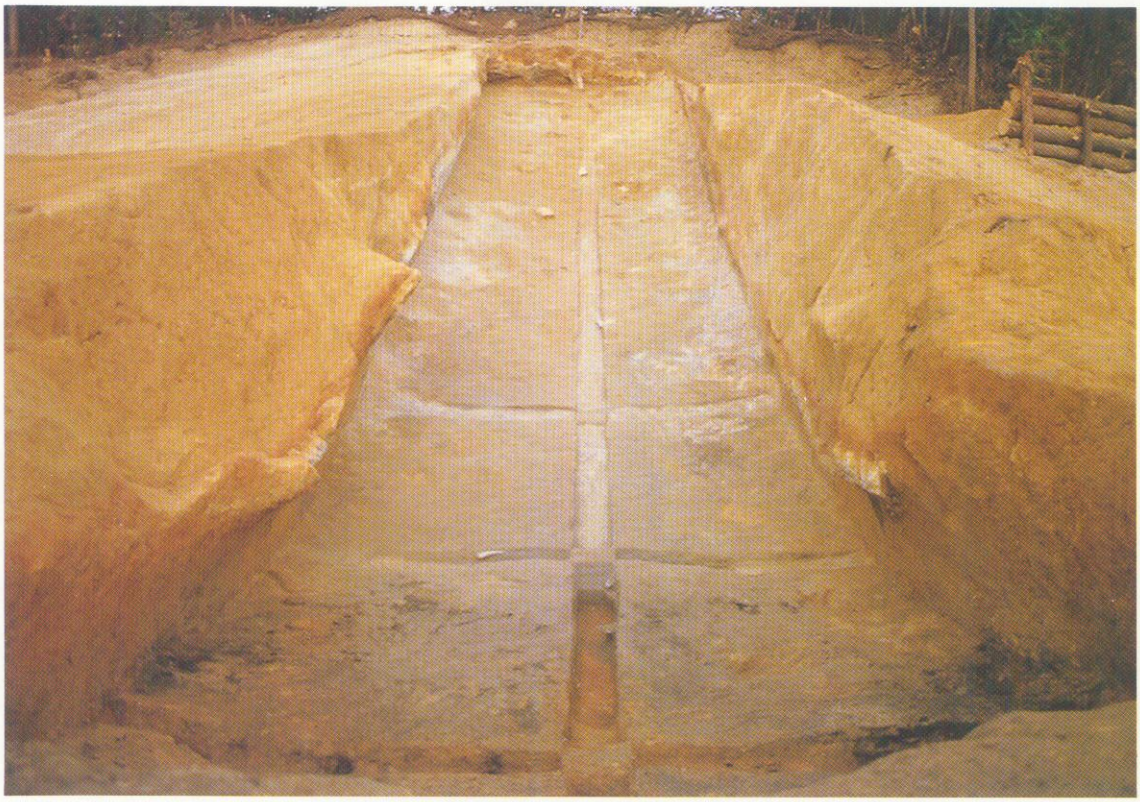
牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

牛頸小田浦窯跡群

大野城市文化財調査報告書
第35集

1992

大野城市教育委員会



33— Ⅰ号窯跡



34— Ⅰ号窯跡



37— I 号窯跡



37— I 号窯跡床断面



37—II号窯跡



37—II号窯跡排水溝



40—Ⅰ号窯跡



40—Ⅱ号窯跡



40—Ⅰ号窯跡遺物出土状態



同　上



50—Ⅰ号窯跡



50—Ⅱ号窯跡

序

牛頸土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第２集を刊行することができました。第１集に引き続いて須恵器窯跡群調査の報告です。今回報告する発掘調査自体は昭和58年～61年に行ったものですが、現地調査優先できたため、報告書の刊行が遅れました。これらの調査では未操業の窯が数基見つかりましたが、比較的珍しいことです。また、最も注目される発見は40－Ｉ号窯跡出土の須恵器です。今までは違う時期の須恵器と考えられていたものが同時に焼成されていたことが判明したからです。

開発によって多くの文化財が消滅しましたが、新たな知見も得られたこともまた事実です。本報告書が多くの方々の文化財に対する関心を高め、また今後の調査・研究に役立つならば本望です。

最後になりますが、調査費の負担を含め、多大のご協力を賜りました牛頸土地区画整理組合、さらに、種々のご協力をいただいた土木・建設会社、地元牛頸区の皆様、地権者、指導・助言をいただいた福岡県教育委員会その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

平成４年３月31日

大野城市教育委員会
教育長　久野英彦

例　　言

1．本書は牛頸土地区画整理組合（理事長　戸渡朋夾）より委託を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。

3．遺物実測は秀嶋和子、竹林りさ、製図は同人と河鍋洋子、拓本は井手美智子、牟田昌子が担当した。

4．遺物観察表は秀嶋が担当した。

5．本書の執筆並びに編集は舟山良一が担当した。

6．本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・『不入道』、20万分の1『福岡』を使用した。

7．概報として刊行した『牛頸地区遺跡群Ⅰ』（1985）で使用した窯跡名を以下のように改める。

小田浦Ｃ－1号窯跡⟶小田浦34－Ⅰ号窯跡

小田浦Ｄ－1号窯跡⟶小田浦33－Ⅰ号窯跡

小田浦Ｆ－1号窯跡⟶小田浦50－Ⅰ号窯跡

小田浦Ｆ－2号窯跡⟶小田浦50－Ⅱ号窯跡

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
(1) 報告に際して……1
(2) 調査の経過……2
Ⅱ．位置と環境……6
Ⅲ．調査の結果……9
(1) はじめに……9
(2) 調査概要……9
(3) 遺構……11
(4) 遺物……30
Ⅳ．まとめ……41

表 目 次

表１．牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表……3
表２．牛頸周辺遺跡地名表……6

巻 頭 カ ラ ー

１．33—Ⅰ号窯跡
34—Ⅰ号窯跡
２．37—Ⅰ号窯跡
37—Ⅰ号窯跡床断面
３．37—Ⅱ号窯跡
37—Ⅱ号窯跡排水溝
４．40—Ⅰ号窯跡
40—Ⅱ号窯跡
５．40—Ⅰ号窯跡遺物出土状態
同上
６．50—Ⅰ号窯跡
50—Ⅱ号窯跡

図　版　目　次

図版 1　(1)　33—Ⅰ号窯跡
　　(2)　33—Ⅰ号窯跡遠景
図版 2　(1)　33—Ⅰ号窯跡最終床面
　　(2)　同上（煙道付近）
図版 3　(1)　33—Ⅰ号窯跡たち割り状況
　　(2)　33—Ⅰ号窯跡煙道付近
図版 4　(1)　33—Ⅰ号窯跡燃焼部左側壁
　　(2)　33—Ⅰ号窯跡灰原断面
図版 5　(1)　34—Ⅰ号窯跡
　　(2)　34—Ⅰ号窯跡遠景
図版 6　(1)　34—Ⅰ号窯跡最終床面
　　(2)　34—Ⅰ号窯跡燃焼部
図版 7　(1)　37—Ⅰ号窯跡
　　(2)　37地点全景
図版 8　(1)　37—Ⅰ号窯跡最終床面
　　(2)　37—Ⅰ号窯跡煙道
図版 9　(1)　37—Ⅰ号窯跡床断面
　　(2)　同上
図版10　(1)　37—Ⅰ号窯跡煙出し・排水溝
　　(2)　37—Ⅰ号窯跡燃焼部周辺
図版11　(1)　37—Ⅰ号窯跡煙道部右側壁
　　(2)　37—Ⅰ号窯跡煙道部左側壁
図版12　(1)　37—Ⅱ号窯跡
　　(2)　37—Ⅱ号窯跡煙出し・排水溝
図版13　(1)　40—Ⅰ号窯跡

(2) 40－Ⅰ号窯跡遠景
図版14 (1) 40－Ⅰ号窯跡床断面
(2) 同上
図版15 (1) 40－Ⅰ号窯跡天井残存状況
(2) 40－Ⅰ号窯跡床断面と遺物出土状態
図版16 (1) 40－Ⅰ号窯跡遺物出土状態
(2) 同上
図版17 (1) 40－Ⅰ号窯跡遺物出土状態
(2) 同上
図版18 (1) 40－Ⅰ号窯跡補修状態
(2) 40－Ⅱ号窯跡
図版19 (1) 50－Ⅰ号窯跡
(2) 50－Ⅰ号窯跡天井残存状況
図版20 (1) 50地点遠景
(2) 50地点窯跡検出状態
図版21 (1) 50－Ⅰ号窯跡最終床面
(2) 同上
図版22 (1) 50－Ⅰ号窯跡床断面
(2) 50－Ⅰ号窯跡灰原断面
図版23 (1) 50－Ⅰ号窯跡床断面
(2) 50－Ⅰ号窯跡煙道部周辺
図版24 (1) 50－Ⅰ号窯跡煙出し・排水溝
(2) 50－Ⅰ号窯跡煙出し部甕片出土状態
図版25 (1) 50地点灰原断面
(2) 同上
図版26 (1) 50－Ⅱ号窯跡
(2) 50－Ⅱ号窯跡埋土断面
図版27 (1) 57－Ⅰ号窯跡

(2)　57地点遠景

図版28　出土遺物（33地点）
図版29　出土遺物（33・37地点）
図版30　出土遺物（37地点）
図版31　出土遺物（37地点）
図版32　出土遺物（37地点）
図版33　出土遺物（37地点）
図版34　出土遺物（40地点）
図版35　出土遺物（40地点）
図版36　出土遺物（40地点）
図版37　出土遺物（40地点）
図版38　出土遺物（40地点）
図版39　出土遺物（40・50地点）
図版40　出土遺物（50地点）
図版41　出土遺物（50地点）
図版42　出土遺物（50地点）
図版43　出土遺物（50地点）
図版44　出土遺物（50地点）
図版45　出土遺物（50地点）

挿　図　目　次

第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（１/１万）……折り込み
第２図　牛頸周辺遺跡分布図（１/2.5万）……折り込み
第３図　福岡平野周辺の窯跡分布図（１/ 20万）……折り込み
第４図　33地点地形測量図（１/ 200）……11
第５図　33－Ⅰ号窯跡実測図（１/ 100）……13
第６図　34地点地形測量図（１/ 200）……15
第７図　34－Ⅰ号窯跡実測図（１/ 40）……15
第８図　37－Ⅰ号窯跡実測図（１/ 100）……折り込み
第９図　37－Ⅰ号窯跡床断面実測図（１/ 40）……17
第10図　37－Ⅱ号窯跡実測図（１/ 100）……19
第11図　37－Ⅱ号窯跡埋土断面実測図（１/ 40）……19
第12図　37地点地形測量図（１/ 200）……20
第13図　40地点地形測量図（１/ 200）……21
第14図　40－Ⅰ号窯跡実測図（１/ 100）……23
第15図　40－Ⅱ号窯跡実測図（１/ 40）……25
第16図　50地点地形測量図（１/ 200）……折り込み
第17図　50－Ⅰ号窯跡実測図（１/ 100）……27
第18図　50－Ⅱ号窯跡実測図（１/ 40）……29
第19図　40－Ⅰ号窯跡窯体内遺物出土状態実測図（１/ 20）……35
第20図　33－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図（１/３）……47
第21図　33－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図①（１/３）……48
第22図　33－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図②（１/６）……49
第23図　37－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（Ⅷ床面：最終床面）（１/３）……50
第24図　37－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（各床面）（１/３）……51
第25図　37－Ⅰ号窯跡・西土坑（53）出土遺物実測図③（１/３）……52

第26図　37－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図④（1/6）……53
第27図　37－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図①（1/3）……54
第28図　37－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図②（1/6）……55
第29図　37－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図③（1/6）……56
第30図　40－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（1/3）……57
第31図　40－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（1/3）……58
第32図　40－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図③（1/3）……59
第33図　40－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図④（1/3）……60
第34図　40－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図⑤（1/6）……60
第35図　40－Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図（1/3）……61
第36図　50－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（1/3）……62
第37図　50－Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（1/3）……63
第38図　50－Ⅰ・Ⅱ号窯跡出土遺物実測図（1/3）……64
第39図　50地点灰原出土遺物実測図①（1/3）……65
第40図　50地点灰原出土遺物実測図②（1/3）……66
第41図　34－Ⅰ号窯跡（1～5）、57－Ⅰ号窯跡（6～11）、32地点（12～16）出土遺物
実測図（1/3）……67

Ⅰ．はじめに

(1) 報告に際して

本書は牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第２集である。第１集は牛頸後田窯跡群の報告をしたが、今回はその東に隣接する牛頸小田浦窯跡群の報告である。いずれも牛頸窯跡群の支群であるが、牛頸窯跡群の支群については学史的に小字名をとって名付けられているので基本的にはそれに従った。

牛頸土地区画整理事業は101.2haに及ぶ大規模な事業で、昭和58年１月27日に組合設立、翌59年10月27日起工式がとり行われた。現在、事業は終盤を迎え、かつて山だった所にモダンな家が建ち並んできている状況である。

この事業に伴う発掘調査は昭和57年（1982年）５月の月ノ浦窯跡を嚆矢とし、平成３年（1991年）３月の胴ノ元古墳まで９年間を要した。今回報告する小田浦窯跡は昭和58年（1983年）～61年（1986年）にかけて発掘調査したものである。

調査に際しては事業主体者である牛頸土地区画整理組合、工事施工者の間・清水ＪＶ、当時地元在住で須恵器窯跡の位置を教えていただいた前田軍治氏、大野城市区画整理課その他地元牛頸区の皆様に多大なご協力を得た。また、遺物整理に関しては福岡大学教授小田富士雄先生を始めとして多くの方々の指導・助言を得た。厚く感謝の意を表したい。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下のとおりである。

教育長	二宮親卯
	久野英彦
教育部長	後藤幹生
	村上信幸
	池田嘉門
	助村浩靖
社会教育課長	井原信一
	船越美直
	岡部弥之助
	關　隆昭
社会教育課長補佐・係長	赤星健彦
	安恒巧高
	青木克正

	白水岩人
庶務担当主査・主事	後藤秀規
	高橋裕司
	浦山敏弘
調査担当技師	舟山良一
	向直也
	徳本洋一
同　嘱託	横大路俊明
	下村精一
	秀嶋和子

(2)　調査の経過

各年度の調査経緯は以下のとおりである。

○昭和57年度（1982年度）の調査

1．月ノ浦Ⅰ号窯跡（27地点）　5～6月

2．分布調査　10～11月

3．後田古墳群（2～4号）（42・43地点）　11～翌年2月

○昭和58年度（1983年度）の調査

1．小田浦窯跡群（31～34地点）　11～翌年2月

○昭和59年度（1984年度）の調査

1．下ノ原遺跡（20・24・25地点）　8月

2．小田浦窯跡群（50・51地点）　11～翌年2月

○昭和60年度（1985年度）の調査

1．小田浦窯跡群（37・40・57地点）　10～翌年2月

2．後田窯跡群（59・60・63地点）　2～3月

○昭和61年度（1986年度）の調査

1．後田窯跡群（61・65・66・45・46地点）　4～10月

2．小田浦窯跡群（28地点）　10月

3．後田古墳群（44・42・43・53地点）　10～2月

4．小田浦古墳群（37地点）　2～3月

○昭和62年度（1987年度）の調査

1．塚原遺跡群（13地点）　4～翌年3月



第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（１/１万）

2．畑ヶ坂遺跡（14地点）　6月

○昭和63年度（1988年度）の調査

1．塚原遺跡群（13地点）　4～5月、8月

2．畑ヶ坂遺跡（14地点）　5～8月

3．日ノ浦遺跡（16地点）　9～翌年2月

4．日ノ浦II遺跡（22地点）　11月、翌年3月

5．塚原遺跡（12地点）　2月

○平成元年度（1989年度）の調査

1．塚原遺跡（12地点）　4月

2．日ノ浦II遺跡（22地点）　5～6月

3．日ノ浦遺跡（16地点）　6～翌年3月

○平成2年度（1990年度）

1．塚原遺跡群（13地点）　7～12月

2．胴ノ元古墳（1地点）　翌年1～3月

表1　牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表　（S：昭和、H：平成）

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
1	胴ノ元古墳	1990(H.2)	円墳1基(横穴式石室)　(古)	
2	胴ノ元窯跡群		須恵器窯跡1基以上、未確認　(古)	
3	胴ノ元遺跡		散布地、未確認　(縄)	
4	正楽寺遺跡	1990(H.2)	試掘調査で確認できず	
5		1988(S.63)	〃	
6		1988(S.63)	〃	
7		1988(S.63)	〃	
8		1988(S.63)	〃	
9	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず　(奈)	
10	〃		〃　(奈)	
11		1988(S.63)	試掘調査で確認できず	
12	塚原遺跡	1988･89(S.63･H.1)	集落跡　(平～鎌)	
13	塚原遺跡	1987･88(S.62･63)	集落跡(住居跡26軒)古墳(20基)　(古～奈)	
14	畑ヶ坂遺跡	1988(S.63)	集落跡　(古～奈)	

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
15	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず　(奈)	
16	日ノ浦遺跡	1988･89(S.63･H.1)	集落跡(住居跡22軒)　(古～奈)	
17	畑ヶ坂遺跡	1987(S.62)	集落跡	
18	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡確認できず	
19	日ノ浦遺跡			
20	下ノ原遺跡	1984(S.59)	試掘調査で確認できず	
21	日ノ浦II遺跡	1986	〃	
22	〃	1988･89(S.63･H.1)	甕棺墓、土坑墓、古墳　(弥～古)	
23	〃		流れ込みの土器多数出土　(平)	
24	下ノ原遺跡	1984(S.59)	試掘調査で確認できず	
25	〃	〃	〃	
26	月ノ浦古墳		円墳1基(横穴式石室)1979(S.54)調査　(古)	『牛頸中通遺跡群II』所収
27	月ノ浦窯跡	1982(S.57)	窯体削平、灰原から須恵器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾　(古)	
28	後田窯跡	1986(S.61)	灰原のみ、須恵器、瓦	
29	柳ヶ原古墳群	1983(S.58)	確認できず、尾根の凹凸の見誤りと思われる	
30	後田窯跡群			
31		1983(S.58)	試掘調査で確認できず	
32		〃	〃　弥生土器散布	
33	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡1　(古)	
34	〃	〃	〃　1、(窯体ほとんど流失)　(古)	
35	柳ヶ原古墳群	1983(S.58)	確認できず	
36	〃	〃	〃	
37	小田浦古墳群・窯跡群	1985･86(S.60、61)	円墳3基(横穴式石室)、須恵器窯跡2基　(古)	
38	小田浦窯跡群		須恵器窯跡2基、1976(S.51)立正大学調査(古)	
39	〃		〃　〃　(古～奈)	
40	〃	1986(S.61)	須恵器窯跡2基、1基は未操業　(古)	
41	小田浦窯跡群	1986(S.61)	試掘調査で確認できず	

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
42	後田古墳群	1982(S.57)		
43	〃	1986(S.61)	円墳10基(横穴式石室7、小石室3)　(古)	
44	〃	〃		
45	後田窯跡群	1986(S.61)	須恵器窯跡2基　(古～奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
46	〃	1986(S.61)	〃　1基(灰原のみ)　(古)	〃
47		1985(S.60)		
48		〃	試掘調査で確認できず、窯体と見えたのは炭焼窯らしきもの	
49		〃		
50	小田浦窯跡群	1984(S.59)	須恵器窯跡2基　(古)	
51	〃	1984(S.59)	窯体流失か	
52		1986(S.61)	試掘調査で確認できず	
53	後田古墳群	〃	円墳1基(横穴式石室)	
54		〃	試掘調査で確認できず	
55		〃	〃	
56		〃	〃	
57	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡1基(ほとんど流失)　(奈)	
58		〃	試掘調査で確認できず	
59	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡3基　(奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
60	〃	〃	〃　1基　(古)	〃
61	〃	1987(S.62)	〃　5基　(古～奈)	〃
62		1986(S.61)	試掘調査で確認できず	
63	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡2基　(古～奈)	〃
64		〃	試掘調査で確認できず	
65	後田窯跡群	1987(S.62)	須恵器窯跡1基　(古)	〃
66	〃	〃	〃　(奈)	〃
67		1986(S.61)	試掘調査で確認できず	

(縄)：縄文時代、(弥)：弥生時代、(古)：古墳時代、(奈)：奈良時代、(鎌)：鎌倉時代

II. 位置と環境

小田浦窯跡群は九州最大規模を有する牛頸窯跡群の一支群である。牛頸窯跡群は大野城市大字牛頸・上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西4km、南北4.6kmの範囲にある大窯跡群で、総数300基以上の窯跡があると考えられている。既に調査された窯跡だけでも200基を越えている。地形的には、標高477.9mの牛頸山を最高所にして、北へのびる丘陵と牛頸川、平野川、平田川などが造り出した狭長な低地が複雑に入り組んだ地形をなしている。このため数多くの小谷が造り出され、窯を築くに適している。また、大宰府政庁まで4kmの位置にあり、奈良時代に属する窯跡の多さの起因の1つに政治的背景があったことを推測させる。牛頸窯跡群が形成されだすのは6世紀中頃（小田富士雄氏編年のIIIA期）で、8世紀後半まで須恵器が焼かれ続けた。

牛頸土地区画整理事業に伴う発掘調査によって、窯跡群形成以前の歴史が少し判明してきた。まず、塚原遺跡（第1図、13）で縄文時代晩期に属する竪穴住居跡が検出された。他に同時期の土器が遺跡内で散発的に出土していることから、古墳時代～奈良時代にかけて破壊された集落のあった可能性がある。また、日ノ浦遺跡（第1図、22）では小壺を副葬した弥生時代前期の甕棺墓が検出された。さらに塚原遺跡（第1図、13）では水田下から5世紀末～6世紀初めに属する竪穴系横口式石室を持つ円墳が20基以上検出され、小字名の妥当性に驚かされた。以上のように、須恵器生産の開始に伴って牛頸が開発されたと考えていた我々の考え方に変更をせまる発見があった。これらの成果については現在整理中なので、後日報告したい。

表2　牛頸周辺遺跡地名表

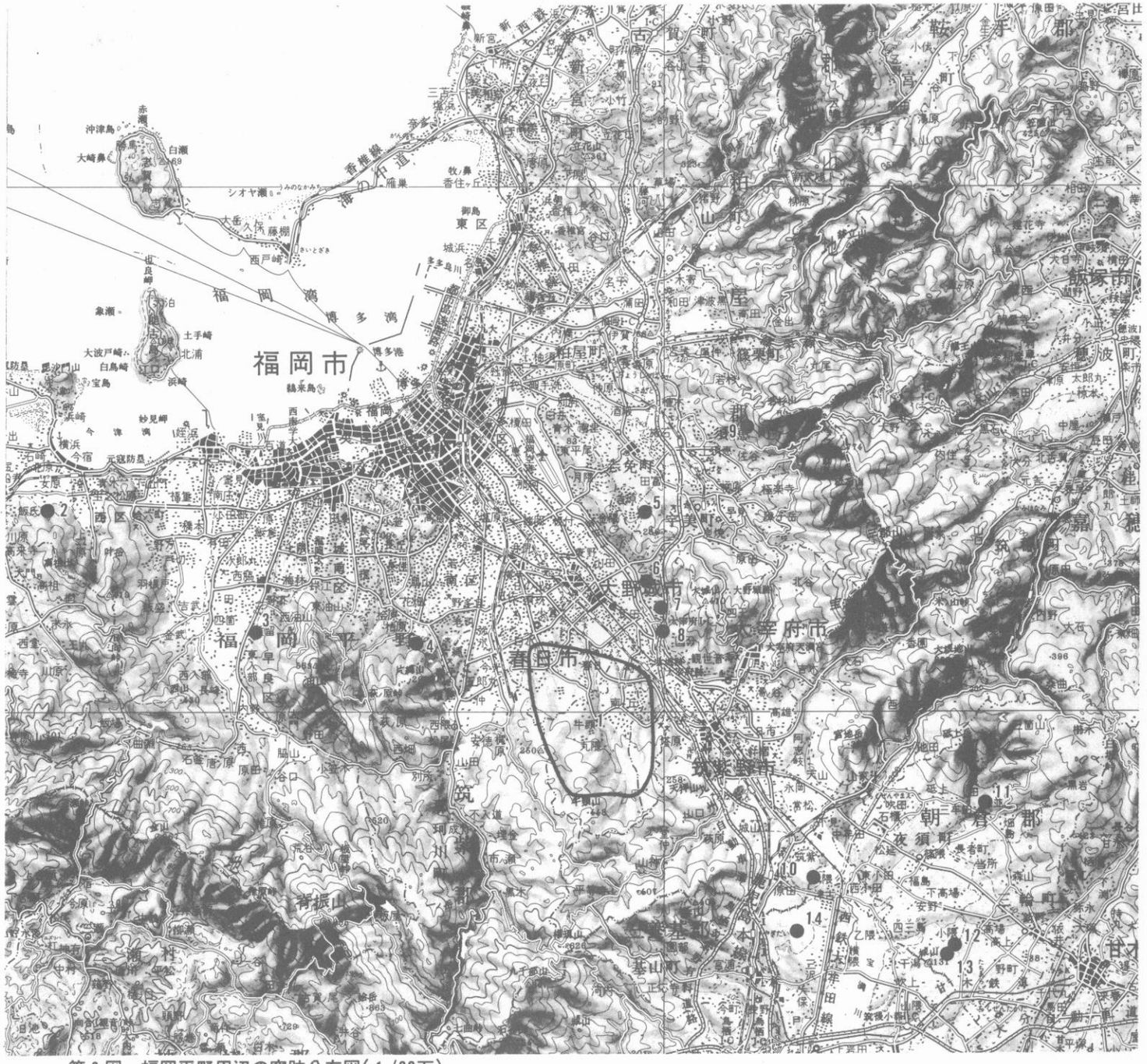
1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山水城	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
3	大土居水城跡	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
4	ウトグチ窯跡群	〃　〃	窯跡2基以上	1987春日市教委調査(2基)
5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳、円墳100基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	〃　大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	〃　〃	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査(9基)
9	惣利遺跡群	〃　〃	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査　縄文～中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代　住居跡	1979～82春日市教委調査

11	春日平田窯跡群	〃　〃	窯跡21基	1982～85春日市教委調査(21基)
12	九州大学筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
14	上園遺跡	〃　〃	散布地	1985～大野城市教委調査
15	出口窯跡	〃　〃	窯跡1基	
16	唐土遺跡	〃　下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
18	水城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
19	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基	1978太宰府市教委調査(2基)
20	篠振窯跡	〃　〃	窯跡2基	1974・85太宰府市教委調査(2基)
21	尊田窯跡	〃　〃	窯跡	
22	長浦窯跡	〃　大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査(1基)
23	向佐野窯跡群	〃　〃	窯跡3基	同上　(3基)
24	宮ノ本窯跡群	〃　大字向佐野	窯跡8基	1979・84太宰府市教委調査(8基)
25	谷蟹窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
26	野添窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査(2基)1986大野城市教委調査(3基)
27	大浦窯跡群	〃　大字牛頸	窯跡5基	1968福岡県教委調査(2基)
28	平田窯跡群	〃　〃	窯跡9基	1972立正大学調査(4基)1979～81大野城市教委調査(4基)
29	東浦窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1968国士館大学調査(3基)
30	上平田窯跡群	〃　〃	窯跡4基	1972福岡県教委調査(4基)
31	中通窯跡群	〃　〃	窯跡12以上	1979・80県教委・大野城市教委調査(6基)
32	中通古墳群	〃　〃	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査(13基) 1975県教委調査(1基) 1979・80県教委・大野城市教委調査(5基)
33	原窯跡群	〃　〃	窯跡3基	土取りで灰原の一部を残すのみ
34	ハセムシ窯跡	〃　〃	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市教委調査(15基)
35	井手窯跡群	〃　〃	窯跡39基以上	1982～86県教委調査(31基)1988大野城市教委調査(3基)
36	道ノ下窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1982～86県教委調査(10基)
37	足洗川窯跡群	〃　〃	窯跡5基以上	1982～86県教委調査(4基)
38	笹原窯跡群	〃　〃	窯跡4基以上	同上　(4基)
39	長者ヶ原窯跡群	〃　〃	窯跡16基	同上　(16基)

40	野口窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基以上	
41	円入遺跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
42	惣利古墳	〃　〃	円墳1基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
43	春日平田遺跡群	〃　〃	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
44	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	消滅
45	華無尾遺跡	〃　〃	散布地	旧石器～縄文（ナイフ形石器石鏃等出土)
46	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か？
47	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	散布地	縄文～中世
48	畑ヶ坂窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1基消滅
49	畑ヶ坂古墳	〃　〃	円墳1基	
50	塚原遺跡群	〃　〃	円墳10基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987大野城市教委調査
51	胴ノ元古墳	〃　〃	円墳1基	
52	胴ノ元窯跡群	〃　〃	窯跡2基	
53	城ノ山窯跡	〃　〃	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
54	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生(中期)
55	大堤古墳群	〃　大字白水	円墳3基	(満水時水没)
56	イケ谷古墳群	〃　大字上白水	円墳3基以上	(春日原ゴルフ場内)
57	浦ノ原窯跡群	〃　大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査(8基)
58	浦ノ原遺跡	〃　〃	散布地	土師・須恵器
59	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査(16基)
60	後田古墳群	〃　〃	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
61	小田浦窯跡群	〃　〃	窯跡13基以上	1976立正大学調査(4基)1982～86大野城市教委調査(9基)
62	小田浦古墳群	〃　〃	円墳3基	1976立正大学調査(1基)1987大野城市教委調査(2基)
63	月ノ浦窯跡群	〃　〃	窯跡2基	1982大野城市教委調査(1基)
64	月ノ浦古墳	〃　〃	円墳1基	消滅(横穴式石室)
65	大谷窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1971国士館大学調査(4基)
66	石坂窯跡群	〃　〃	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査(7基)
67	足洗川遺跡	〃　〃	散布地	旧石器(石刃出土)
68	上大利水城	〃　上大利	土塁	(国指定特別史跡)
69	出口遺跡	〃　下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査、『出口遺跡』



第２図　牛頸周辺遺跡分布図(１/2.5万)



1．牛頸窯跡群
2．新開窯跡
3．重留窯跡
4．四十塚窯跡群
5．岩長浦窯跡群
6．乙金窯跡群
7．雉子ヶ尾窯跡群
8．裏ノ田窯跡群
9．須恵窯跡群
10．隈西小田窯跡群
11．八並窯跡群
12．小隈窯跡群
13．山隈窯跡群
14．三ッ枝窯跡

第3図　福岡平野周辺の窯跡分布図(1/20万)

III. 調査の結果

(1) はじめに

今回報告する窯跡群は第1集で報告した後田窯跡群の東に隣接する小田浦窯跡群である。第1図の地図上で言えば33、34、37、40、50、57地点の窯跡である。38、39地点は1976年（昭和51年）立正大学教授坂詰秀一氏を団長とする小田浦窯跡発掘調査団によって調査されている。各地点ごとの窯跡の基数並びに調査年次は以下のとおりである。

33地点－1基　1983年11月～1984年2月
34地点－1基　1984年2月
37地点－2基　1985年11月～同年12月
40地点－2基　1986年1月～同年2月
50地点－2基　1984年11月～1985年2月
57地点－1基　1986年1月

合計6地点9基である。報告は地点番号の若い方からとし、年代順ではない。

(2) 調査概要

33地点では窯跡1基が検出された。ほとんど幅が一定の大型の窯跡で、多孔式の煙道を持つ。焼成部下位では3面の床が数えられたが、上位では2面である。灰原の残存状態は余り良くない。出土遺物量は整理箱で31箱分である。

34地点でも1基の窯跡が検出された。本来が小型の窯であるのに加え、残存状況も良くなかったために全長で1.66m検出されただけである。床の重なりはない。灰原は下方に広がるが全面は調査できなかった。

37地点は尾根をはさんで34地点の反対側の斜面に位置する。頂上付近で窯跡2基がほとんど平行して検出された。向かって右から37－I号、II号窯跡とした。I号窯跡は多孔式の煙道を持つ大型のものであったが、特に幅については約2.5mあり、牛頸窯跡群の中でも広い部類に属する。燃焼部での灰層の厚みが約1.35mあり、焼成回数の多かったことがわかるが、床面は8面まで数えられた。床のかさ上げにつれて、焚口が奥へ移動している。窯尻近くで、左右両壁面に貫通する小穴が複数個見られたが、用途はどのようなものだろうか。燃焼部の灰層の厚さに比べ灰原はあまり広くなかったのは流失のためと思われる。出土遺物量は整理箱で40箱分である。

II号窯跡はI号窯に隣接しており、その間は約5mしか離れていない。I号窯跡よりやや小

さいが、やはり大型の部類に属する窯跡である。しかし、II号窯跡の場合、床面、壁面ともに通常の窯跡に見られる還元化された固い灰白色の面や、熱のため赤変した部分が見当たらなく、灰原も形成されていない。ただ、燃焼部から焼成部下位にかけての床面に薄い灰層が見られるだけである。これらのことから、II号窯跡については窯として掘り抜いた後の空焚きの段階で崩壊したものと考えられた。従って、出土遺物もなかった。I・II号窯跡については、I号窯跡が古いと考えられる。既ち、まずI号窯を造り、それが失敗したため隣接してII号窯を造って操業したものと思われる。

40地点は37地点の西南約270mに位置し、2基の窯跡が検出された。I号窯跡は道路築造の際に一部が破壊されていたが、大型の部類に属する窯跡である。天井が一部残っていたが、写真撮影後安全のために落とした。床面は3面数えられた。通常の場合、床面間は下に厚く、上に行くほど薄くなるが、ここの場合それが反対で上位の方が厚かった。上位部の天井は残っていなかったが、天井を高く掘り直さないといけないことになり、作業も困難になると思うが、傾斜角を大きくする必要があったためだろう。I号窯跡の場合に注目すべきことは遺物の出土状態である。既ち、燃焼部と焼成部の境付近の最終床面にまるで取り忘れられたような状況で須恵器蓋杯がセットで多数出土した。蓋杯は編年上IV期とされるものとV期に属すると考えられるものが混在していた。前者について更に良く見るとヘラケズリされているものといないものがあった。後に詳述するが、須恵器編年上問題を提起するものとなろう。

II号窯跡は小型の部分に属するものであるが、床面、壁面ともに熱のための土色の変化が認められず、灰原も形成されていない。従って、37－II号窯跡と同様築造に失敗して廃棄されたものと考えられる。

40地点の出土遺物はすべてI号窯跡に属すと判断されるが、その量は整理箱で15箱分である。前述したように道路工事の際に失われたことも影響しているであろう。

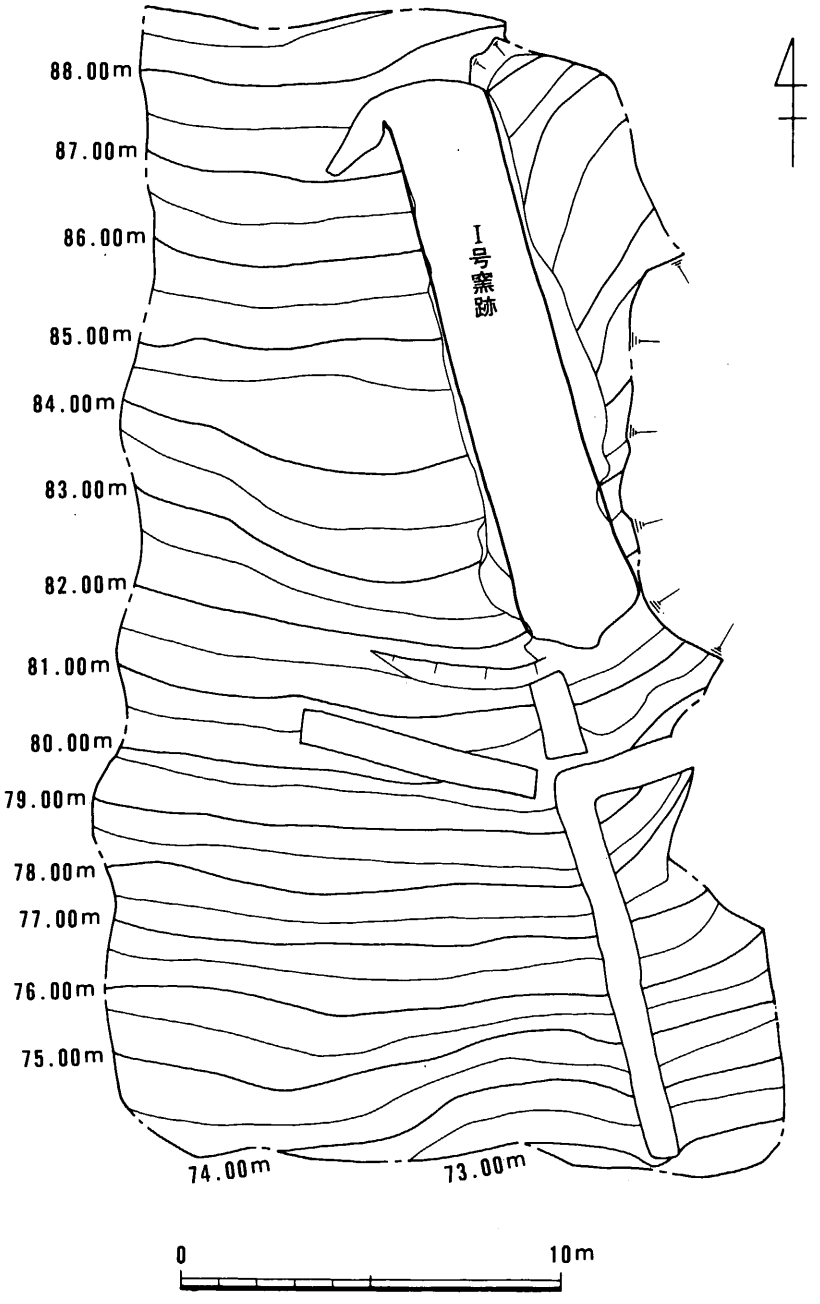
50地点は40地点の北西150mに位置し、2基の窯跡が検出された。I号窯跡は多孔式の煙道を持つ大型の窯跡である。幅が最大で1.75mなのは長さの割合に狭い。天井の残りはかなり良かった。他の窯跡の場合、側壁、天井にも工具痕が観察される場合があるが、ここではザラザラであった。多孔式の煙道の外側に大甕片があったが、還元状態を作り出す際に孔をふさいだものではなかろうか。

II号窯跡はI号窯跡の右2mにあり、小型の窯跡であった。残存状態は良くなかったが、床の重なりはないことが観察された。II号窯跡に属する遺物がI号窯跡に一部流れこんでいた。50地点の出土遺物は整理箱で24箱分である。

57地点は40地点の西270mに位置するが、窯はほとんど流出し、灰原のみを調査した。

以下、各窯跡について表と図で説明したい。表と図はなるべく見開きのページに収まるようにした。そのため、地形図その他の図や説明の順序が必ずしも統一されていない。

(3) 遺　　構

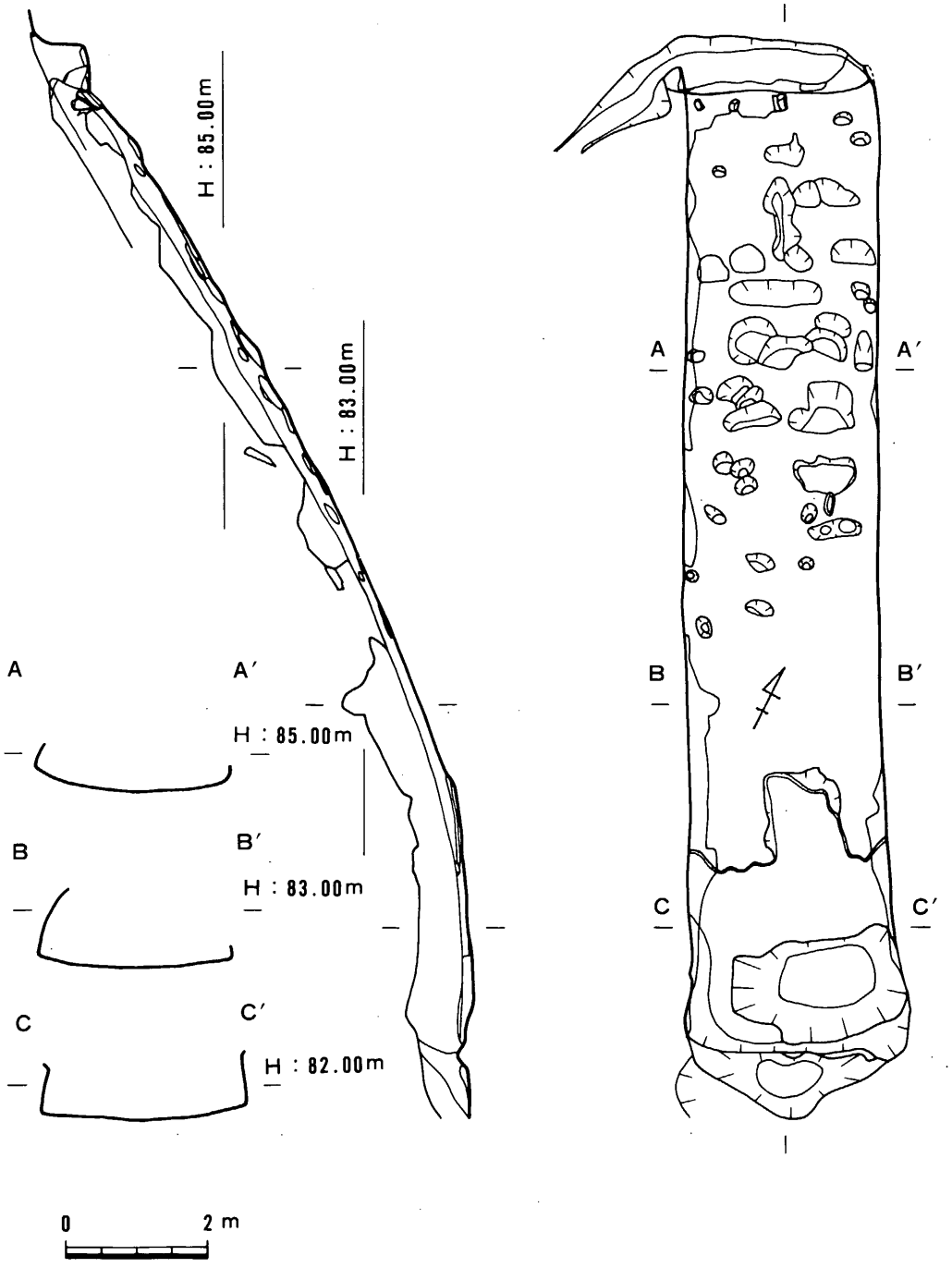


第4図　33地点地形測量図（1/200）

33地点

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>33—Ⅰ号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1983. 12～84. 1 (昭58年度)</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">尾根付近 (81.5m)</td><td>主軸方位</td><td>N—28°30′—W</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">12.35m(前庭部含めると13.75m)</td><td>最大幅</td><td>2.9m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>1.4m</td><td colspan="2" rowspan="2">前庭部側が広く、焼成部側が狭い。床面はゆるやかな傾斜をなす。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>2.9m</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焼成部</td><td>長さ</td><td>10.6m</td><td colspan="2" rowspan="2">燃焼部側がやや広いが、ほとんど一定の幅である。床面はわずかに弓なり状に登る。中央部付近での傾斜角は約30°。上位には製品を安定させるための</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>2.85m</td></tr>
<tr><td colspan="3">凹みが多い。3面の床がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">煙出し部</td><td>長さ</td><td>1.2m</td><td colspan="2" rowspan="2">多孔式（5孔と推定）の煙道で、そのまま排水溝へ続く。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">長さ1.4m、幅3.2m。浅い土坑状を呈する。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">窯体下方にあるが、薄い。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">整理箱31
蓋杯、椀、高杯、提瓶、平瓶、𤭯、甕</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他</td></tr>
</table>

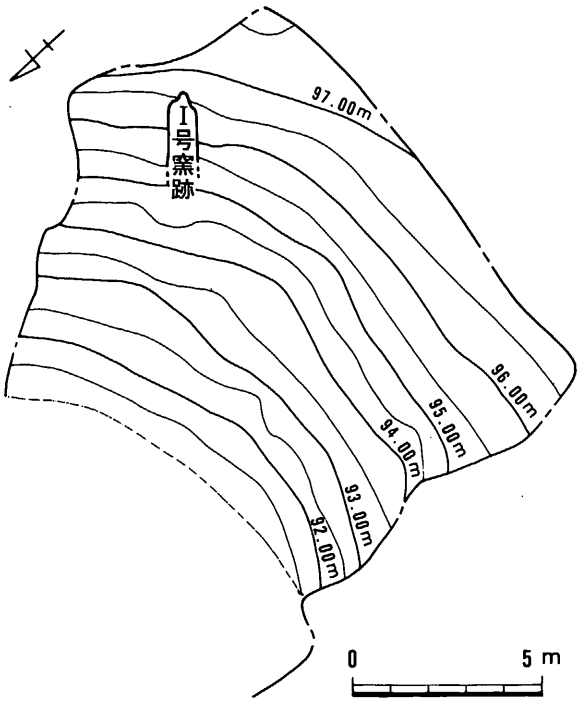
※「位置」の標高は燃焼部のレベル



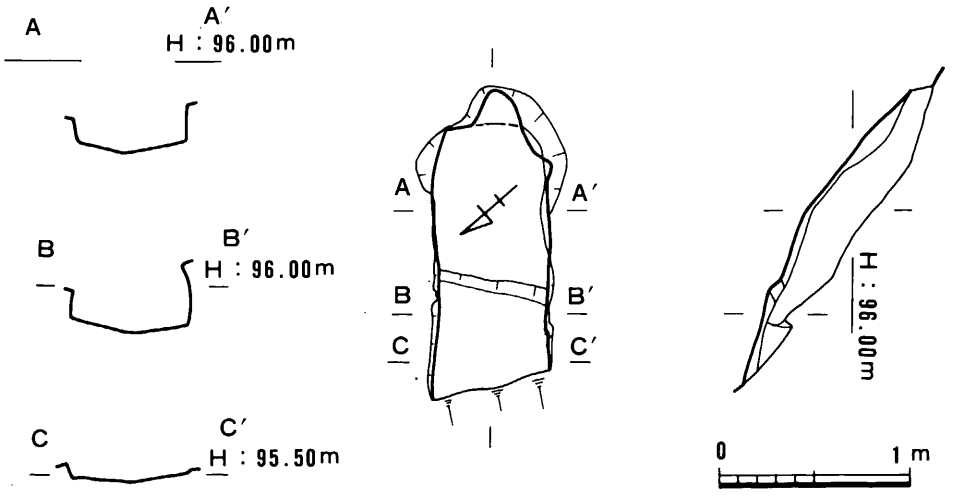
第5図　33—Ⅰ号窯跡実測図（1/100）

34地点

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>34－Ⅰ号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1984．2（昭58年度）</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">尾根近く（95.4m）</td><td>主軸方位</td><td>N－136°－E</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">1.66m以上</td><td>最大幅</td><td>0.6m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>0.63m以上</td><td colspan="2" rowspan="2">平坦面は見られないが、1段下がった部分に灰層があったため、この段から先を燃焼部と考えた。しかし、完全には残存していない。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>0.56～0.6m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焼成部</td><td>長さ</td><td>1.03m</td><td colspan="2" rowspan="2">平面的には燃焼部の境ですぼまり、その後やや胴張りとなる。床面はやや弓なり状に登る。中央付近での傾斜角は約30°である。床面の重なりはない。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>0.4～0.6m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">煙出し部</td><td>長さ</td><td></td><td colspan="2" rowspan="2">原形は失われている。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">流出</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">窯体の約9m下から始まり、4m以上は続く。灰層の厚さは20～30cmと浅い。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">整理箱2
蓋杯、その他</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　相当流失が激しく形状がだいぶそこなわれている。このため構造把握も難しい。平面的に見ると一旦すぼむようであるが、断面では燃焼部によく見られる平坦面が見られない。しかし、小さな段から先に灰がたまっている状況だったのでこの部分を燃焼部と考えた。極めて小型の窯跡である。</td></tr>
</table>



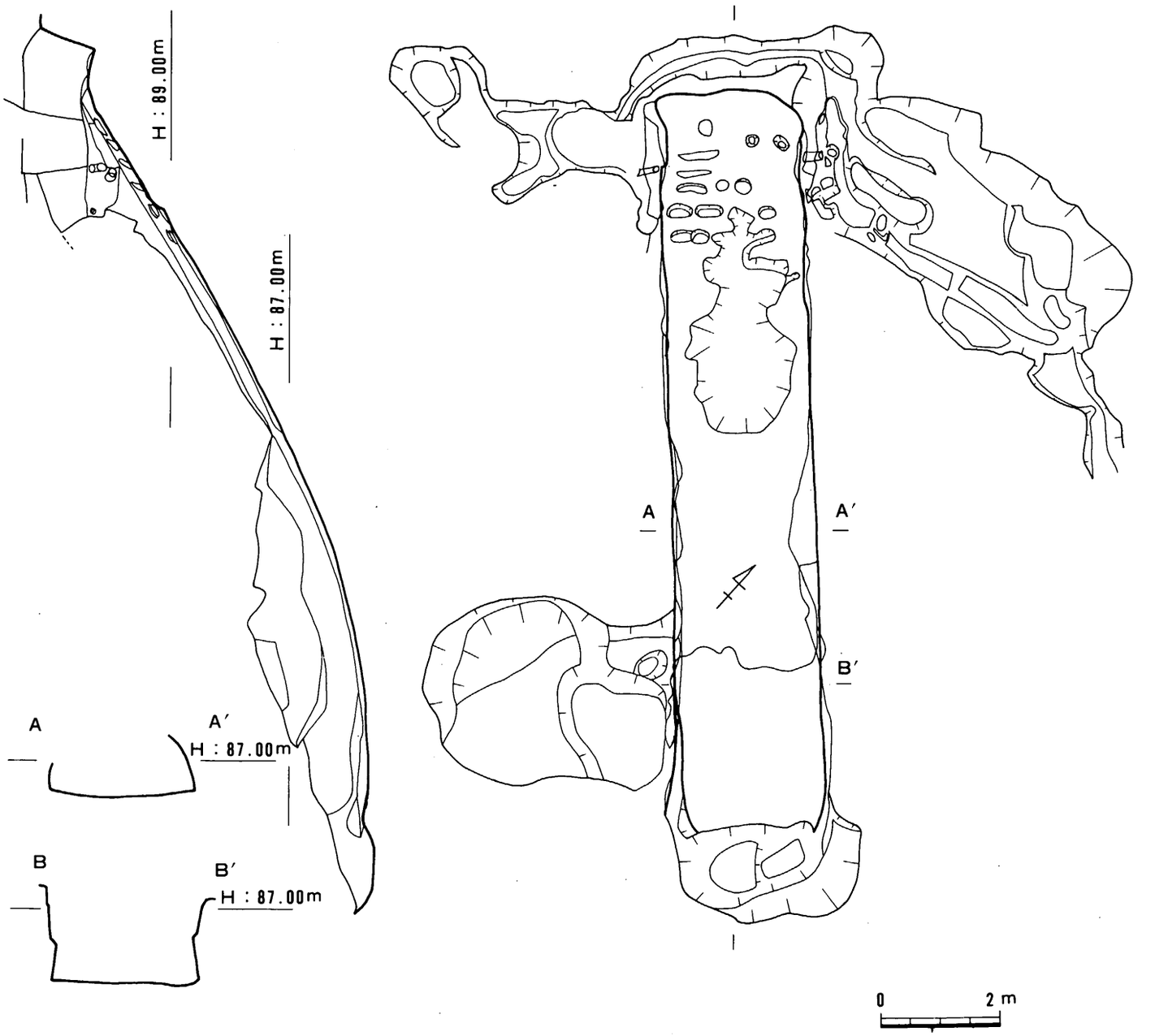
第6図　34地点地形測量図（1/200）



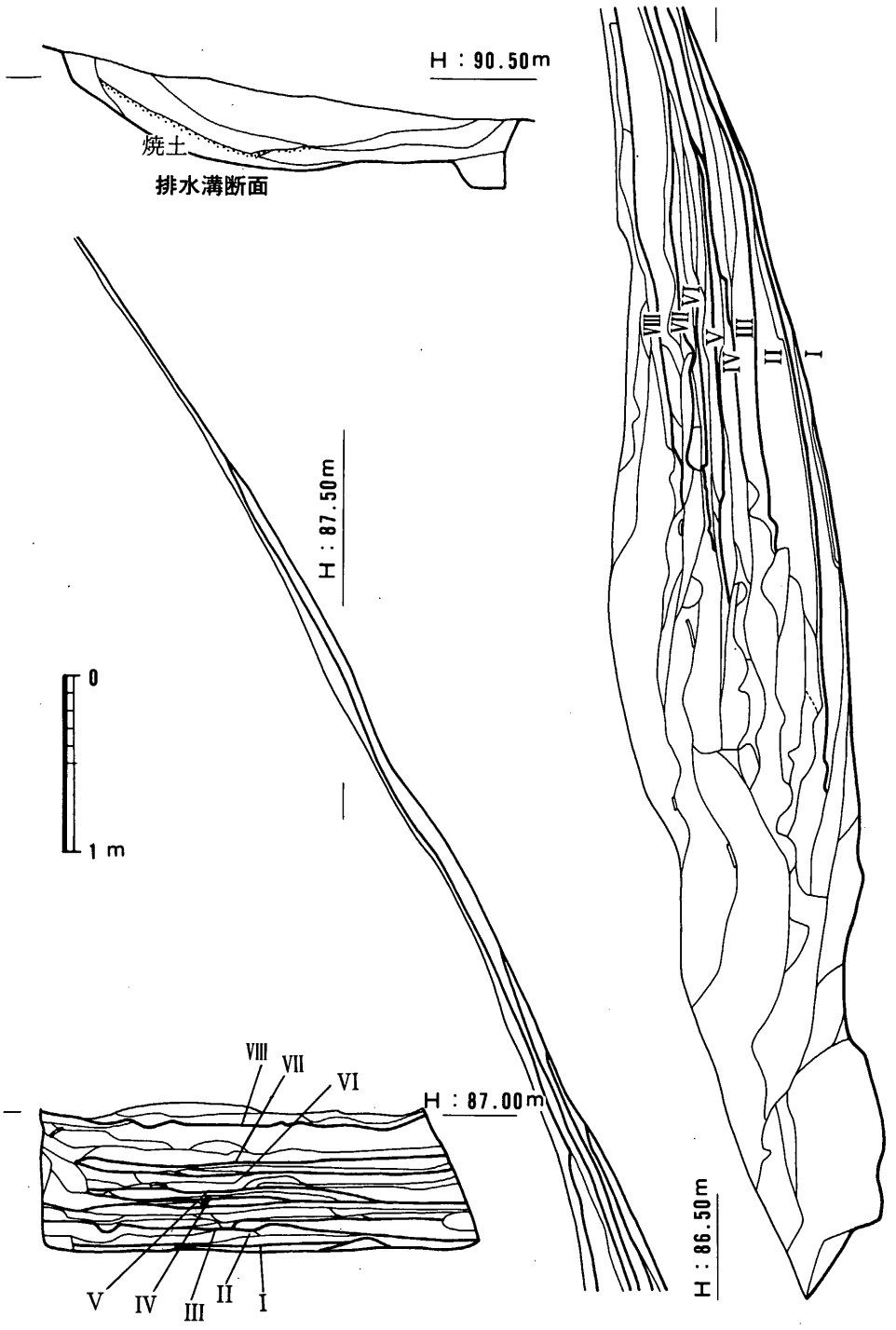
第7図　34—Ⅰ号窯跡実測図（1/40）

37地点

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>37－Ⅰ号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1985．10～12（昭60年度）</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">尾根近く（85.60m）</td><td>主軸方位</td><td>N－44°30′－E</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">13.44m</td><td>最大幅</td><td>2.5m</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>2.1m</td><td colspan="2" rowspan="2">幅は灰原側でややすぼまる。他はほぼ一定で、床面も平坦に近い。床面は赤変しているが、灰原側がその度合いが少ない。側壁は固く直立しているが、</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>2.45m</td></tr>
<tr><td colspan="4">焚口の移動に伴うものと思われる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焼成部</td><td>長さ</td><td>9.54m</td><td colspan="2" rowspan="2">床の傾斜変換点から上方で、煙道（最終的には崩壊）までの部分である。床面は比較的直線に近い弓なり状に登る。床側壁ともに還元されて灰色を</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>2.5m</td></tr>
<tr><td colspan="4">呈し、固い。上方に製品を安定させるための小凹みを多く造る。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">煙出し部</td><td>長さ</td><td>1.8m</td><td colspan="2" rowspan="2">多孔式（3孔）の煙道部分は焼成部と同じ傾斜角を持つが、平坦な排水溝といっしょになる。煙道部左右に小孔があって横に通じているが、異例で</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">ある。</td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">主軸方向の長さが最大で1.7m、幅3mの浅くくぼんだ部分が相当すると考えられる。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">焼成回数が多かったにもかかわらず、下方には10mは続くが、左右の広がりは4mほどしか認められない。流失したものと思われる。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">整理箱40箱
蓋杯、高杯、短頸壺、𤭯、椀、平瓶（？）、壺、手捏土器、甕</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　幅がほとんど同じ窯跡であるが、牛頸窯跡群中でも幅が広い方に属する。床面は8面まで数えられ、燃焼部での灰層は1.35mに達していて焼成回数の多かったことを示している。床のかさ上げにつれて、焚口が奥へと移動している。左側壁に新たに切り込んだ床面の痕跡があってそれがわかる。従って、燃焼部、焼成部等の部位は焼成初期の状態で判断している。</td></tr>
</table>

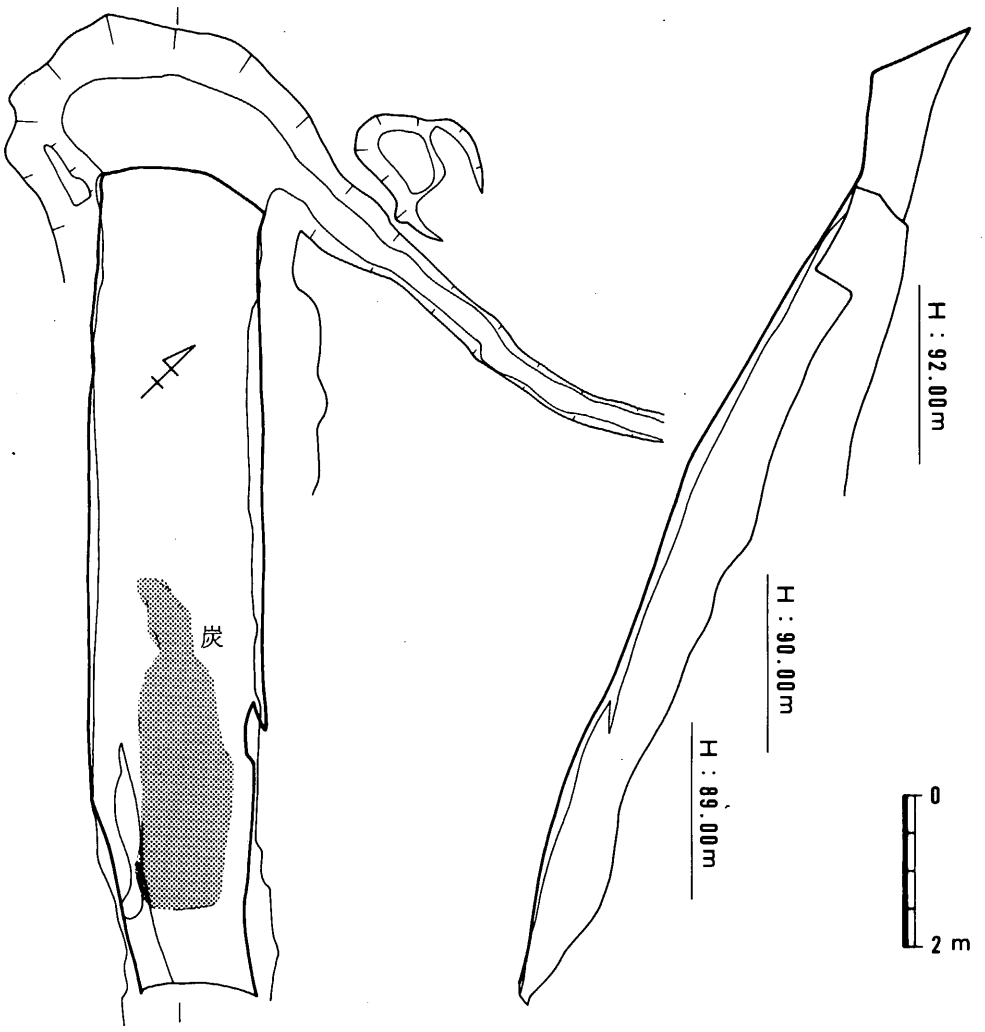


第8図　37—Ⅰ号窯跡実測図（1/100）

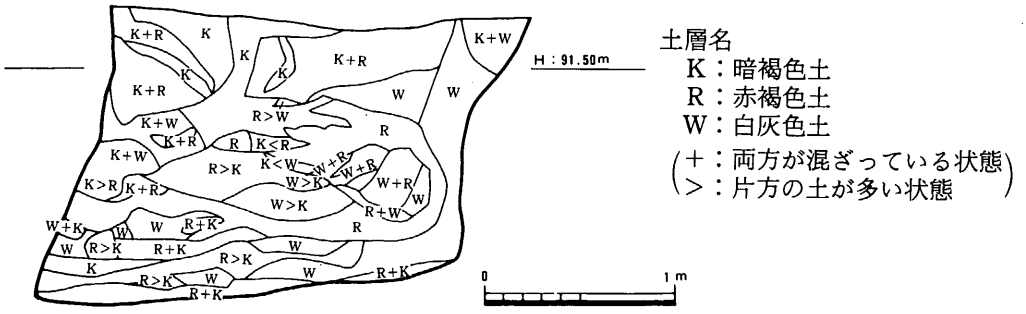


第 9 図　37—Ⅰ号窯跡床断面実測図（1/40）

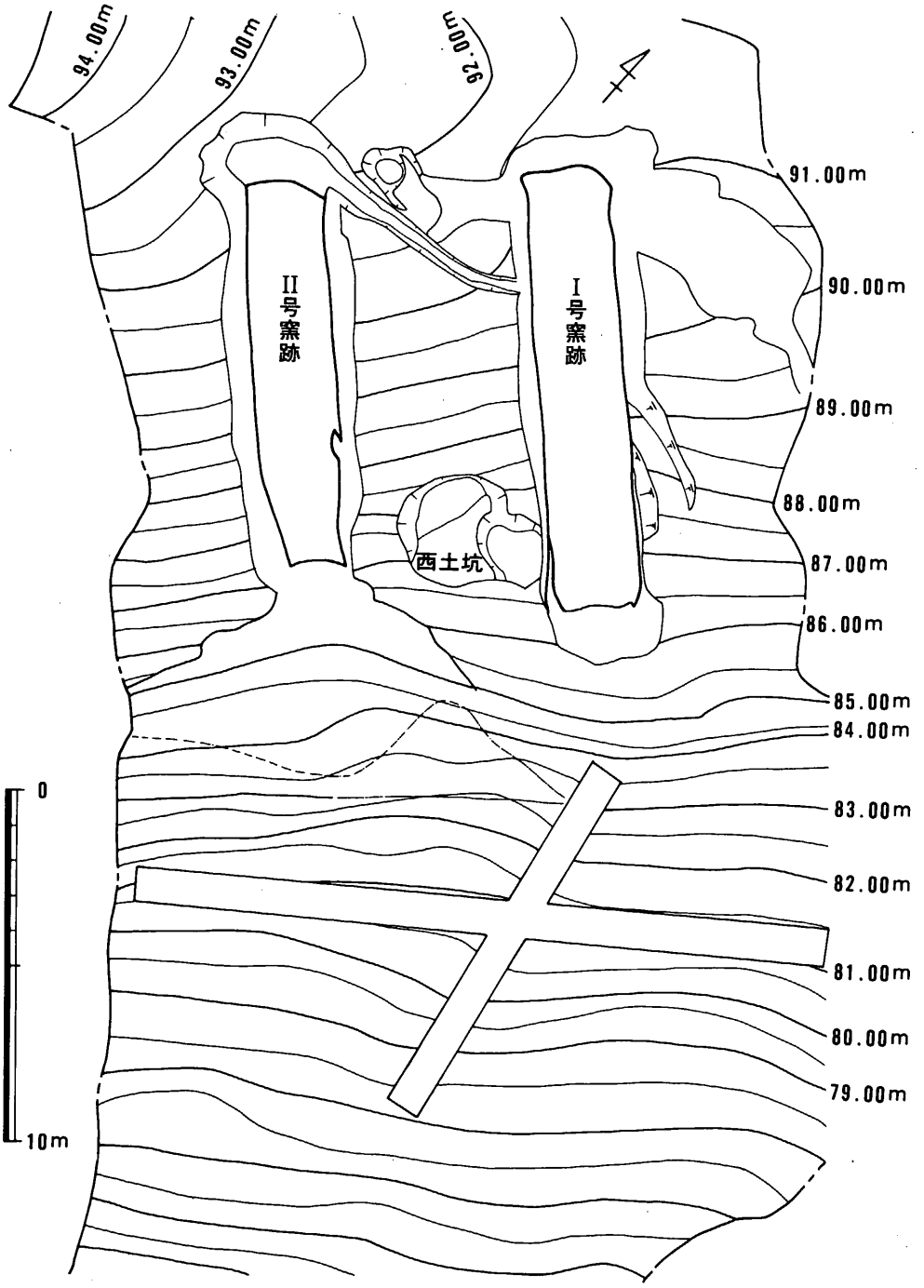
<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>37—II号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1985. 10～12（昭60年度）</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">尾根近く（86.7m）</td><td>主軸方位</td><td>N—45°—W</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">11.4m以上</td><td>最大幅</td><td>2.3m</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>1.6m</td><td colspan="2" rowspan="2">焚口は既に崩壊していると思われる。床面はあまり平坦ではないが傾斜の変わる地点から下方を燃焼部と考えた。左側壁下部から床面にかけて高まりがある。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.4～1.6m</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">焼成部</td><td>長さ</td><td>9.35m</td><td colspan="2" rowspan="2">傾斜変換点から上方で、煙道までであるが、本来多孔式であったと考えられる煙道はなかったので、仮に排水溝の平坦面になるまでとしておく。床面はゆるやかな弓なり状の断面をなす。床、壁ともにあまり焼けていない。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.4～2.3m</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">煙出し部</td><td>長さ</td><td>2.05m</td><td colspan="2" rowspan="2">他の例から考えて多孔式の煙道を付設していたものであろうが、調査時にはなかった。排水溝は右下方（北西から北東へ）にのびる。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">流失したと思われる。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　本窯は1度も須恵器を焼成しなかったものである。図示したように下方床面に炭化物のうすい層が見られた。壁、床面ともに通常の窯跡に見られる還元化された灰白色の固い面が認められない。灰原、出土遺物もなかった。これらのことより窯を掘り抜いた後に行う空焚きの段階で崩壊したものと考えられる。37—Ⅰ・II号窯跡の先後関係についてはII号窯跡排水溝とⅠ号窯跡に切り合い関係があるが、遺構検出時には判断できなかった。しかし、排水溝を窯のある方に伸ばすことは考えにくく、おそらくはII号窯を築くのに失敗してⅠ号窯を造ったものと思われる（第12図）。</td></tr>
</table>



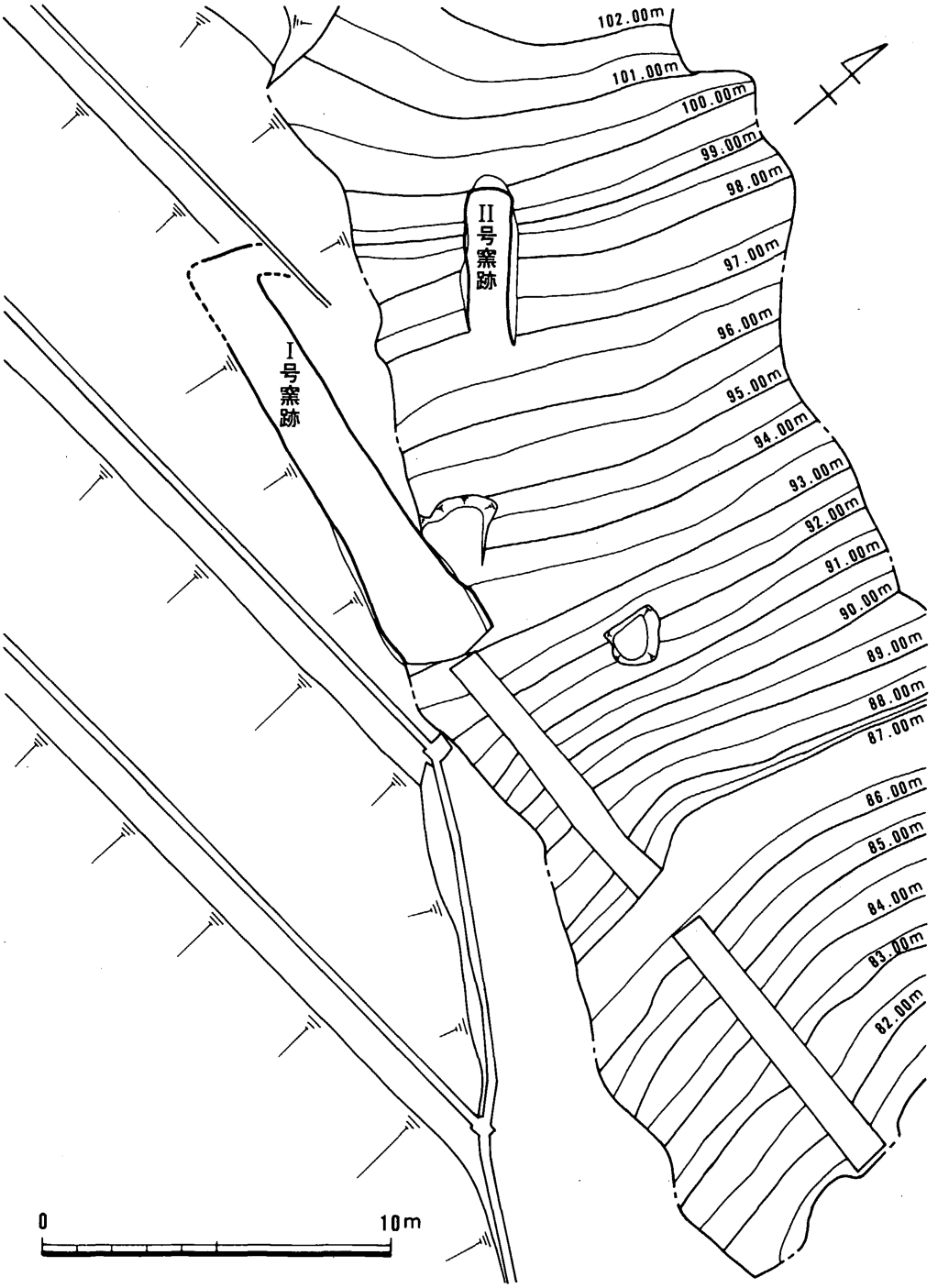
第10図　37—II号窯跡実測図（1/100）



第11図　37—II号窯跡埋土断面実測図（1/40）



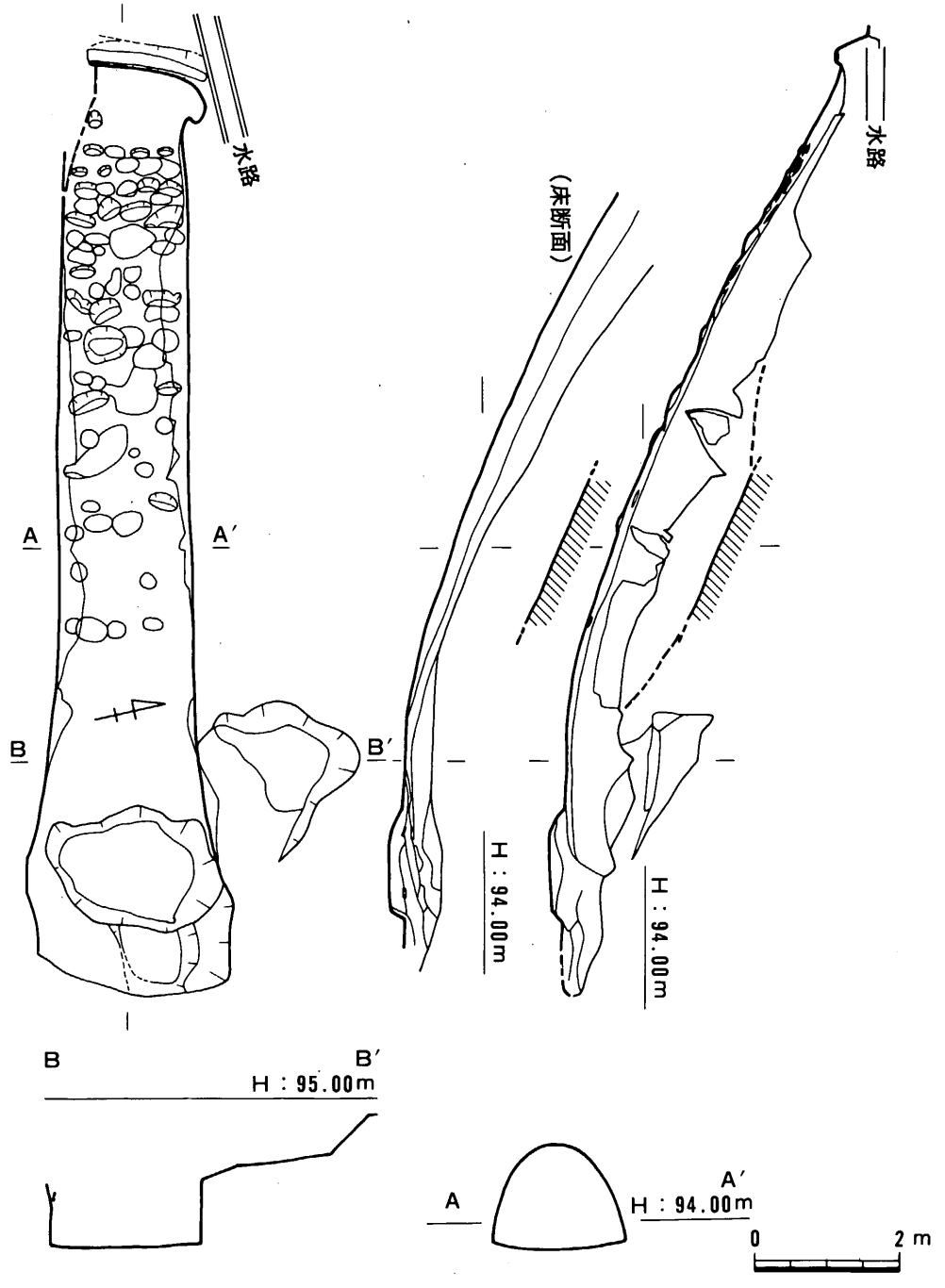
第12図　37地点地形測量図（1/200）



第13図　40地点地形測量図（1/200）

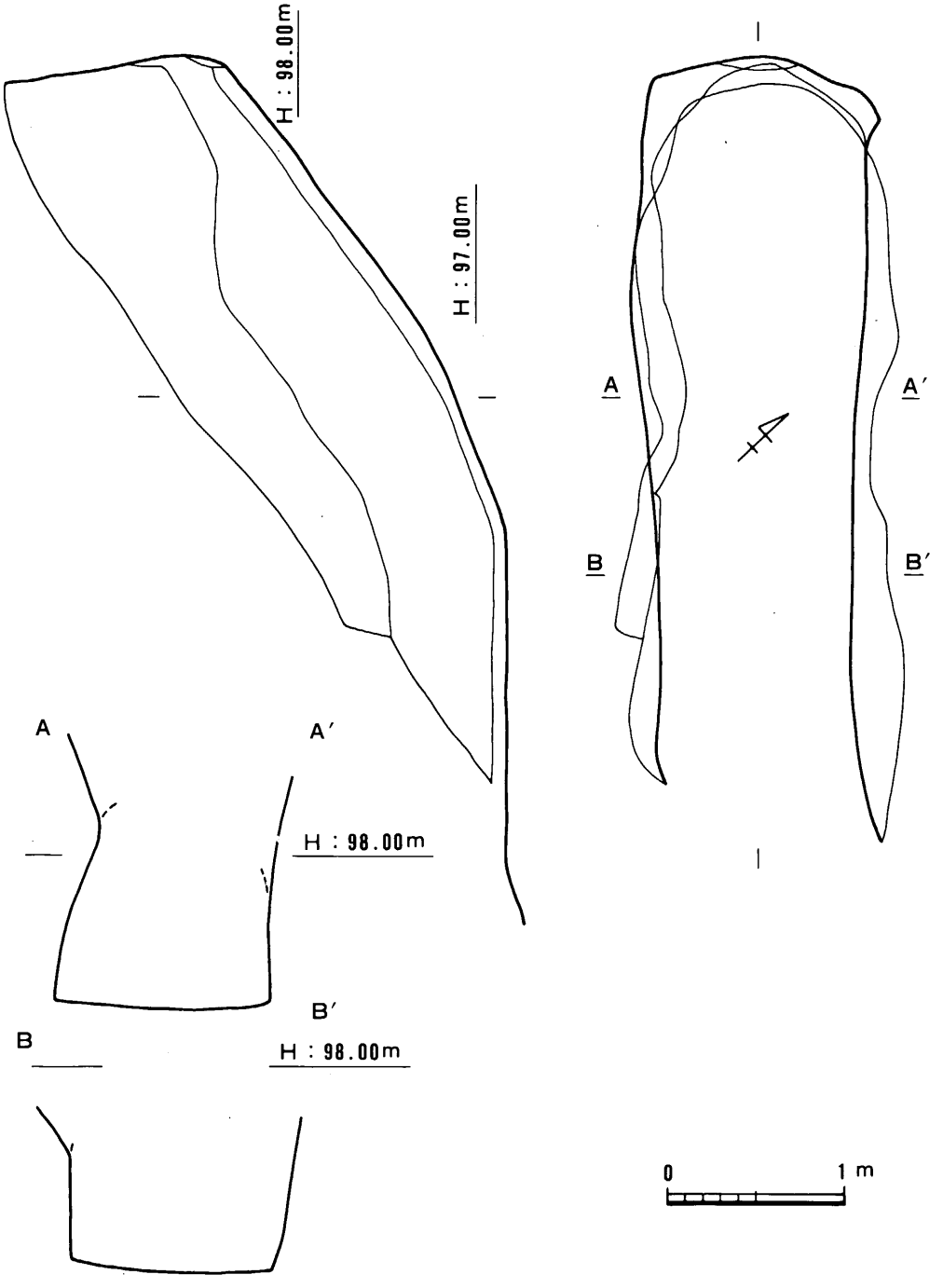
40地点

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>40－Ⅰ号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1985．12～1986．2（昭60年度）</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">斜面上位（92.80m）</td><td>主軸方位</td><td>N－78°－W</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">11.5m（前庭部含めると13.4m）</td><td>最大幅</td><td>2.6m</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>1.9m</td><td colspan="2" rowspan="2">窯体下方にある浅い土坑状のくぼみの中央付近から、床面が比較的平坦な部分と考えられる。側壁は良く焼けて固く灰白色を呈する。床面はそれほ</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.9～2.6m</td></tr>
<tr><td colspan="3">どでないが、奥側は赤変している。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焼成部</td><td>長さ</td><td>8.2m</td><td colspan="2" rowspan="2">傾斜変換点から上方で、床面にある小ピットがなくなるまでの間と考えられる。傾斜は比較的ゆるやかで20°～28°ぐらいである。幅はほとんど一定</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.7～1.9m</td></tr>
<tr><td colspan="3">で床に多くの小ピットがある。天井が一部残存しているが、高さは約1.4～1.55mである。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">煙出し部</td><td>長さ</td><td>1.45m</td><td colspan="2" rowspan="2">残っていないが、排水溝に接する床面部分には小ピットが見つからない。おそらくこの部分に多孔式の煙道があって、そのまま排水溝につながっていたものと考えられる。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">いたものと考えられる。</td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">燃焼部につながる浅い土坑状のくぼみを含む長さ1.9mの部分と考えられる。一旦埋まったくぼみはその後掘り直されてはいない。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">あまり顕著ではなかった。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">整理箱15箱
蓋杯、高杯、椀、壺、平瓶、甕</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　本窯跡は発掘調査に先立つ1979年（昭和54年）道路工事によって削られた崖面に一部露出していたものである。そのため、窯尻から排水溝にかけての一部が消失していた。
床面は3面数えられるが、かさ上げ状況は普通の窯跡とは反対で、上に行くほど厚くなっていた。また、燃焼部と焼成部の境付近の最終床面上に須恵器蓋杯のセットが取り残されていた。遺物の項で詳述する。</td></tr>
</table>



第14図　40—Ⅰ号窯跡実測図（1/100）

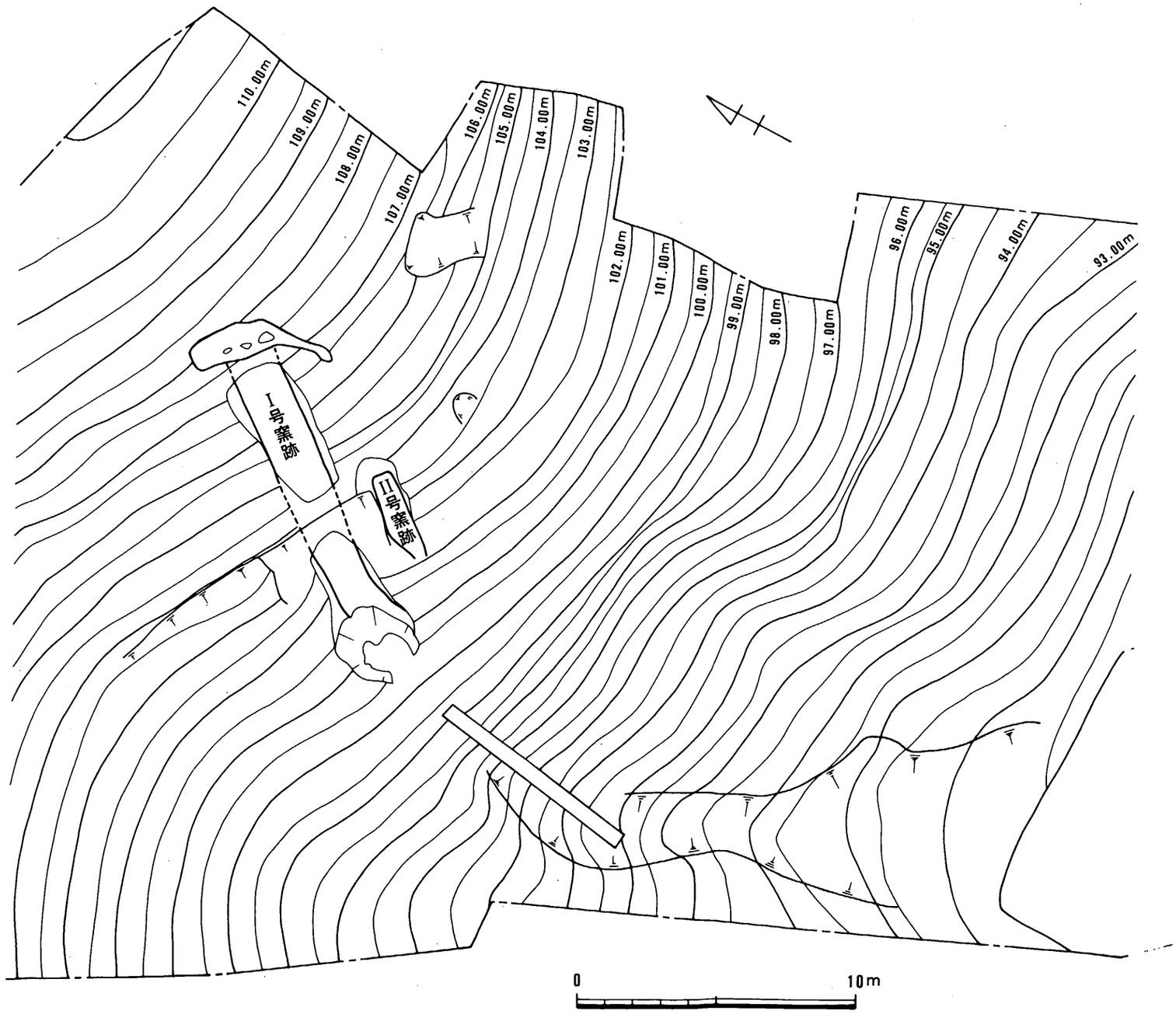
<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>40—II号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1986. 1～2 (昭60年度)</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">斜面上位 (96.80m)</td><td>主軸方位</td><td>N—47°—W</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">4.35m</td><td>最大幅</td><td>1.35m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>1.75m</td><td colspan="2" rowspan="2">床面が平坦な部分と考えられる。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.05～1.1m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焼成部</td><td>長さ</td><td>2.6m</td><td colspan="2" rowspan="2">傾斜変換点から窯尻までと考えられる。床面はわずかに弓なり状に登り、中央付近で傾斜角32°を測る。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.35m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">煙出し部</td><td>長さ</td><td></td><td colspan="2" rowspan="2">消失しているため、確実なことは言えないが、この程度の規模の窯の場合、円筒状の煙道を1本持つのが通例である。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">燃焼部の先に約20cm平坦部がある。この部分が前庭部の一部と考えられる。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　床面、側壁ともに焼けてなく、灰原も形成されていない。従って、未使用の窯跡と考えられる。40—I号窯跡とは最も近い所で4mしか離れていない。</td></tr>
</table>



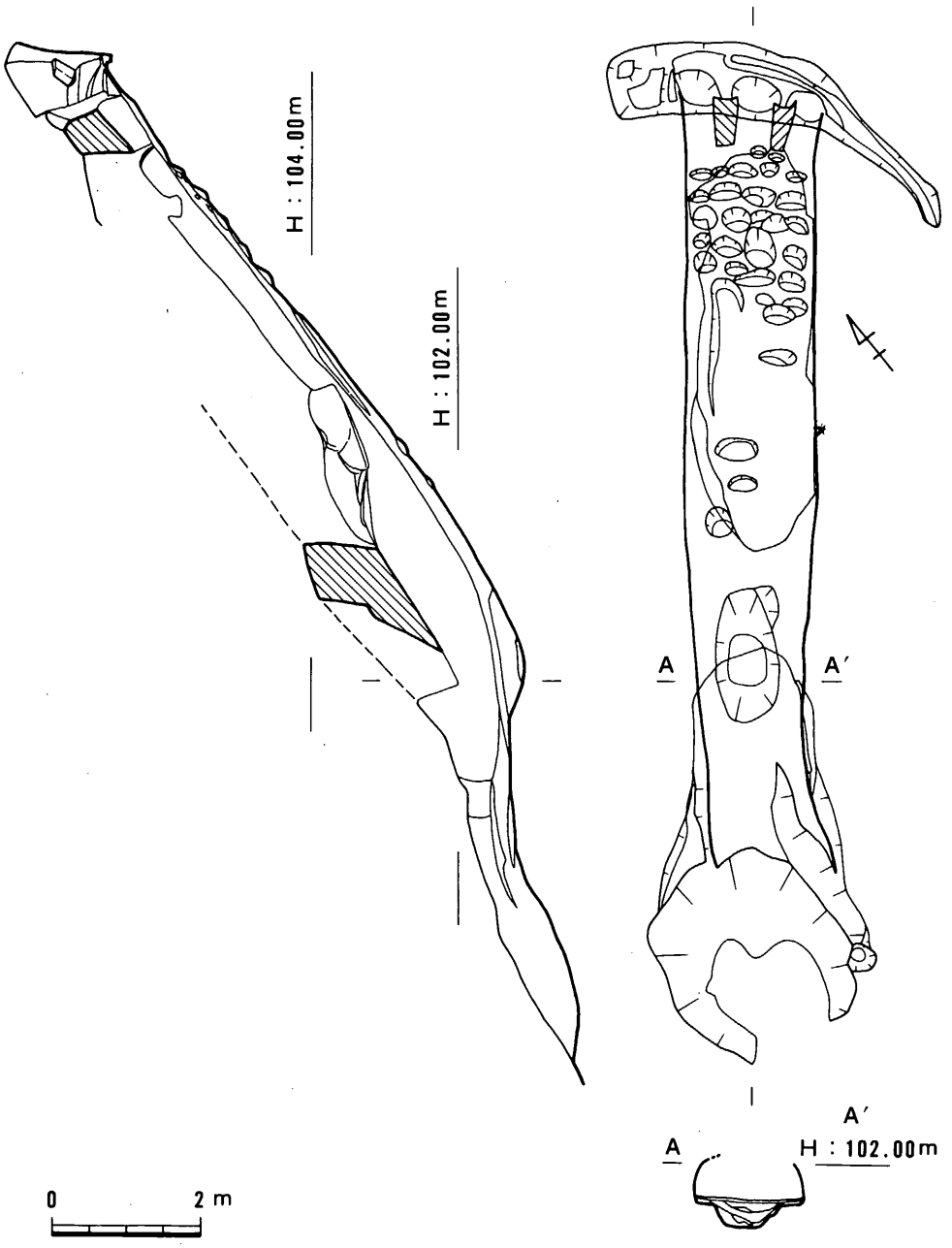
第15図　40—II号窯跡実測図（1/40）

50地点

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>50－Ⅰ号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1984. 11～1985. 2（昭59年度）</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">斜面上位（101.3m）</td><td>主軸方位</td><td>N－38°－E</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">10.1m</td><td>最大幅</td><td>1.75m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>1.9m</td><td colspan="2" rowspan="2">床はあまり焼けていないが、側壁が白色に還元されている。床面はほぼ平坦であるが、焼成部との境に1.85×0.85mのピットがある。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.35～1.5m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">焼成部</td><td>長さ</td><td>6.7m</td><td colspan="2" rowspan="2">上記ピットの奥側で床面の傾斜が変わるのでそこから上と考えた。床面はわずかに弓なり状に登り、その角度は37°～40°である。一部天井が残るが高さ1.1～1.2mである。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>1.75m</td></tr>
<tr><td rowspan="2">煙出し部</td><td>長さ</td><td>1.5m</td><td colspan="2" rowspan="2">3孔を持つ多孔式の煙道で、そのまま排水溝へつながる。排水溝の西側の端は階段上になっている。煙道付近で大甕片が出土した。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">床面が平坦であるが、壁面が熱による大きな変化を受けてない部分を考えた。平坦面が約1.1m続き、そのあと土坑状に掘り込まれている。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">ほとんど流失していたが、谷筋に添って一部が細長く続いている。厚さも約40cmと浅い。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">整理箱24箱
蓋杯、蓋、壺（平瓶？、短頸壺、甕）</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　煙道付近で須恵器大甕片が出土したが、これは多孔式になっている孔の蓋として火かげん調節用に使用したものではないだろうか。
床面は3面数えられるが、あと2面可能性がある。しかし、かさ上げはせいぜい40cmぐらいである。</td></tr>
</table>

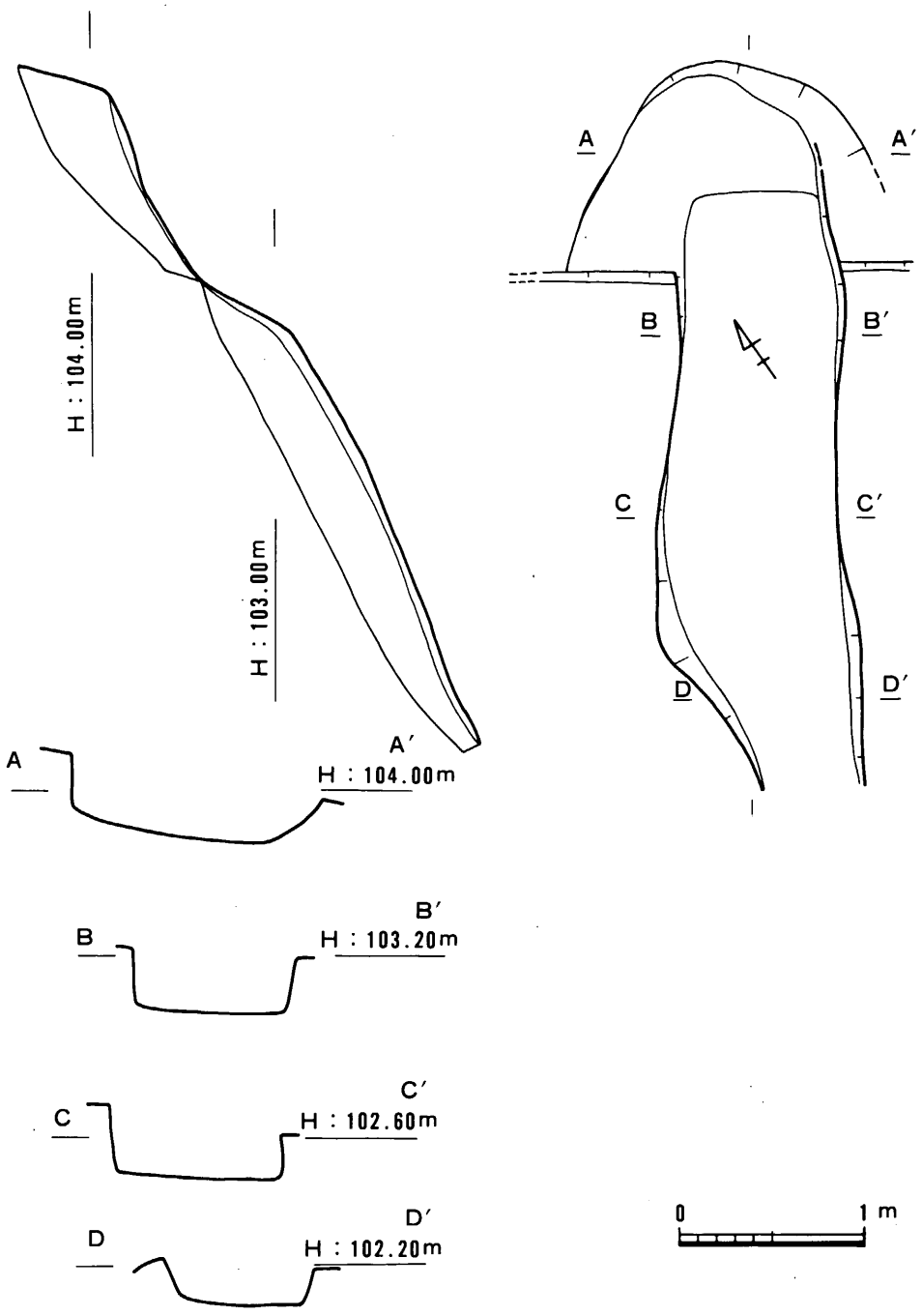


第16図　50地点地形測量図（1/200）



第17図　50—Ⅰ号窯跡実測図（1/100）

<table>
<tr><td>窯跡名</td><td colspan="2">小田浦窯跡群</td><td>遺構名</td><td>50—II号窯跡</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>調査年月日</td><td>1985. 2 (昭59年度)</td></tr>
<tr><td>位置</td><td colspan="2">斜面上位 (101.90m)</td><td>主軸方位</td><td>N—35°—E</td></tr>
<tr><td>全長</td><td colspan="2">4.0m</td><td>最大幅</td><td>0.95m</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焚口
燃焼部</td><td>長さ</td><td>0.85m</td><td colspan="2" rowspan="2">焚口部が残存しているか疑問であるが、急激にせばまる部分から先を燃焼部と考えた。この部分に灰を含んだ土が推積していたからである。床面は</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>0.5～0.85m</td></tr>
<tr><td colspan="3">平坦ではない。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">焼成部</td><td>長さ</td><td>2.45m</td><td colspan="2" rowspan="2">燃焼部の上でかつ床面が熱のため赤変している部分と考えた。床面は弓なり状に登り、傾斜角度は30°～45°である。あまり固くはない。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td>0.7～0.95m</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="3">煙出し部</td><td>長さ</td><td>(0.7m)</td><td colspan="2" rowspan="2">失われており、多孔式のものか、通常の円筒形のものかは判断できない。平坦な排水溝部分へ続く。</td></tr>
<tr><td>幅</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>前庭部</td><td colspan="4">消失したものと思われる。</td></tr>
<tr><td>灰原</td><td colspan="4">ほとんどない。</td></tr>
<tr><td>遺物</td><td colspan="4">少量
蓋杯、鉢、平瓶、(長頸壺)</td></tr>
<tr><td colspan="5">その他　窯体の状況からあまり操業はしていない窯と思われる。その上、崩壊しやすい土壌のため、各部位について明確になし得なかった。また、遺物はI号窯へだいぶ流れ込んでいる。</td></tr>
</table>



第18図　50—II号窯跡実測図（1/40）

(4) 遺　物

個々の遺物については巻末の観察表を参照していただきたい。ここでは出土状態と各器種についての概要を記す。

33—Ⅰ号窯跡出土遺物（第20～22図、図版28～29）

出土遺物は蓋杯、椀、高杯、提瓶、平瓶、甕、甕である。

(1) 出土状態

床面は燃焼部で3面、焼成部で2面数えられたが、実測可能で明確に各床面上にあると判断できるのは最終床面上のものだけである。杯蓋、杯身、椀、高杯である。あとの窯体内出土遺物は最終床面上の埋土中ならびに燃焼部（焚口付近）の灰層からの出土である。燃焼部灰層からの出土遺物については所属する床面を明らかにすることはできなかった。灰原については薄く、各床面ごとに分類することは不可能であった。

(2) 遺物

杯蓋（1～12、26～35）

口径は12cm台が多く、天井部はすべてヘラケズリを行う。形態的には、1)．1～3のように全体に丸味を持つもの、2)．6のように天井部がやや平坦になるもの、3)．8・27のようにヘラケズリを行った部分の直下でやや窪むもの、4）29のように口縁部がほぼ垂直になるものが見られる。

杯身（13～16、36～39）

受部径は13.3～14.6cmで、底部外面はヘラケズリ、その他は回転ナデ、ナデを行う。形態的には、丸い体部と平坦気味の底部を持ち、ほとんど同じであるが、立ち上がりの形態に、39のように基部が太く先端で細くなるものと、14のように基部から先端までほとんど同じ厚さのものがある。

椀（17～19、43）

17・19のように全体に丸味があって体部と底部の区別のつきにくいものと18のようにややはっきりしているものがある。体部に1～2条の沈線を持ち、19はカキ目を施す。

高杯（20～22、40～42）

出土したのは無蓋高杯のみであるが、破片の場合は杯身と区別がつかないので断言はできない。脚部は41のように短脚のものと22のように長脚のものがある。更に前者には21のように屈曲するものとそうでないものがある。

提瓶（23）

やや小型のもので左右に把手がつく。

鉢（24）

口縁部のみであるが、外面にカキ目を施すものである。

平瓶（44）

口縁部のみで、全体を回転ナデで仕上げる。わずかに残った胴部にはカキ目が残っている。

甕（25、45～52）

全容を知り得るのは50だけであるが、口径から小型（11.3cm、45）、中型（20cm前後、25・46・47・50・51）、大型（40cm以上、48・49・52）がある。大型の甕の頸部外面にはヘラで付けたと思われる「連続斜線文」がある。

34—Ⅰ号窯跡出土遺物（第41図１～５）

出土したものは蓋杯、器種名を何とすべきか迷う杯状のものである。

(1) 出土状態

小型の窯跡で床面は１面しかなかった。窯体に伴う遺物としては燃焼部灰層から出土した杯蓋１個を数えるのみである。他は灰原からの出土である。

(2) 遺物

杯蓋（１～３）

最大径が16cm前後のもので、すべてかえりを持つ。また、欠損のため確実ではないが、すべてつまみを持つと考えられる。天井部外面にはヘラケズリを施す。

杯身（４）

高台が欠損しているが、痕跡からそれの付くことがわかる。体部はやや丸味を持ちながらも斜め上方に直線的に伸び、そのまま丸い端部で終わる。

杯状のもの（５）

全体を回転ナデで仕上げるもので、外面中部付近に粘土を張り付けた跡がある。

37—Ⅰ号窯跡出土遺物（第23～29図、図版29～33）

出土遺物は蓋杯、高杯、短頸壺、鉢、椀、平瓶（？）、蓋、甕、手捏土器（土師器）である。

(1) 出土状態

牛頸土地区画整理事業地内にあった窯跡の中では最も多く須恵器を焼いたと考えられ、床面の数が８面数えられた。燃焼部の床のかさ上げ並びに灰層の厚さは最高1.35mに達していた。このため主軸を決定した後、まず右側を層位ごとに下げ抜き、その後断面図を作成して左側を下げた。左側の遺物は各床面を意識はしたが、必ずしも所属する床面を明らかにしながら取り上げられたわけではない。しかし、かなりの量を層位ごとに取り上げたので、後で断面図と照合し、床面の明らかなものはその通りに、その他は床面間の遺物として図示した（第23～24

図)。最初の床面をⅠ床面とし、最終の床面をⅧ床面とした。主軸右側の遺物は最終床面(Ⅷ床面) 出土遺物以外に、層を明確に分けた左側の遺物と同列にはできなかったので別に図示した(第25～26図)。第25～26図には主軸の左側から出土しても、層を明確になし得なかったものも含む。灰原は薄く、遺物は一括して取り上げた。

(2) 遺物

杯蓋 (1～6、20、21、23～25、33～35、36～46、58～65)

法量的には12.0～14.8cmまであるが、13.4cm、13.0cm、12.5cm付近に集中する傾向がある。

最終床面(Ⅷ面)またはⅦ～Ⅷ面間出土の中に13.4cmぐらいのものが多く含まれ、操業開始期に近いⅠ～Ⅱ面出土のものが12.0cm台である。一般的な認識とは逆の現象である。天井部外面にはすべてヘラケズリを行う。形態的には33—Ⅰ号窯跡出土杯蓋に見られた1)～3)の諸形態が見られる。ただ、39のように口縁部の折れ方が激しく、内側に入り込むものもある。20の口縁部外面には細かい刻み目がある。

杯身 (7～9、22、26、27、31、47、48、66～74)

法量的には受部径が13.0～15.4cmまであるが、13.9cm前後にピークがある。底部外面はすべてヘラケズリしている。形態的には7～9のように底部が丸く深味のあるもの、26のように底部が平で浅めのものがある。また、立ち上がりは基部が太く先端が細くなるものと基部から先端までほとんど同じ厚さのものがある。しかし、全体の形態と立ち上がりの違いに相関関係はないようだ。

高杯 (14～19、51～53)

有蓋高杯(14・53)と無蓋高杯(15・16・18・19・51・52)がある。前者の杯部は底部外面にヘラケズリを行い、立ち上がりは基部が太く先端の細いもので、脚部は上段が貫通しないが二段透しを持つ大型のものである。無蓋高杯も長脚のみであるが、透しのあるものとないものがある。透しのあるものは杯部がやや角張る傾向があるのに対し、透しのないものは体部から底部にかけて丸味を持つ傾向が強い。また、後者にはカキ目を施すものが多い。

短頸壺 (29、30)

扁球形の胴部に直立またはそれに近い短い口縁部を持つ。底部は平坦または上げ底気味になっている。器形に大小があり、胴部は最大径を中位に持つもの(29)と、上位に持って肩の張るもの(30)がある。30は肩部にカキ目を施す。

壺 (76)

扁球形の胴部、平坦に近い底部を持ち、口頸部は外反し、端部は平坦面を作って終わる。胴部中位から頸部にかけてはカキ目を施し、胴下半部はヘラケズリを行う。

甑 (32、77)

口頸部のみの破片である。段を持つが、かなり不明瞭となっており、特に32は段というより

沈線とでも言った方が良いようなものである。

椀（49、50）

大きさには違いがあるが、形態もかなり違う。49は平坦な底部とやや内傾する体部を持つ。50は丸底気味で体部との境も不明瞭である。50は体部に2本の沈線を持つ。

平瓶（？）（13、28）

口頸部のみであるため詳細は不詳であるが、28は1条の沈線を持つもので、13はカキ目を施すものである。

蓋（10～12、75）

10・11は浅めで口縁端部が極端に外反するもので、回転ナデ、ナデで仕上げる。壺類特に短頸壺の蓋であれば整合すると考えられる。12は形態が違うがやはり壺の蓋と思われる。天井部外面をヘラケズリする。75はつまみを持ち、かえりを有するものである。やはり壺蓋と考えられるが、整合するような壺は今回見つかっていない。

手捏土器（80）（土師器）

淡褐色を呈するもので、不整形である。外面を部分的にナデたような跡がある。内面は比較的平滑である。

甕（54～57、78、79、81～87）

33—Ⅰ号窯跡出土の甕と同様、口径から中型（20cm前後、54・78・79・82・83）と大型（38cm以上、55～57・81・84～87）に分けられる。やはり大型甕の口頸部にヘラによる「連続斜線文」が付けられている。

37—Ⅱ号窯跡出土遺物

未操業の窯跡で出土遺物はなかった。

40—Ⅰ号窯跡出土遺物（第30～35図、図版34～39）

出土遺物は蓋杯、高杯、椀、壺、平瓶、甕である。

(1) 出土状態（第19図、図版15～17）

大型の窯跡ではあるが、床面は3面しか数えられなかった。図示できて、床面を明確になし得るのは最終床面上の遺物だけである。中でも焼成部から燃焼部にかけての部分で出土した一群の須恵器は蓋杯がセットとなったまま重なりあっており、焼成時とそう変わらないのではないかと思える状態で見つかった（第19図、図版16・17）。蓋と身が完全にかぶさったものが17セット、かぶさってはいないが出土状態から見てセットと考えていいものが2セット、合計19セットが出土した。丸味のある蓋と立ち上がりを持つ身のセットが12、つまみのあるなしの違いはあるが、見受け(注1)のかえりを持った蓋と立ち上がりのない身のセットが7である。これらが同

時に焼成されていたことを示す、極めて注目される発見であった。灰原は薄く、層位ごとの取り上げは不可能であった。

(2) 遺物

蓋杯（1～38）

セットで出土したのは前述したように19である。丸味のある蓋と立ち上がりのある身のセット（これをAタイプとする）が12、かえりのある蓋と蓋受けのない身のセット（これをBタイプとする）が7で、Bタイプは更に蓋につまみの付くもの（B_1タイプとする）が5、つまみのないもの（B_2タイプとする）が2の2タイプに分かれる。Aタイプのうち1～12の6セットは杯蓋、杯身ともにヘラケズリを行っているが、13～24の6セットについては13がわずかに手持ちのヘラケズリを行っている他はヘラケズリしていない。Aタイプの杯蓋の形態については、天井部が丸いか平坦に近いかを見るのではなく、口縁が折れ曲がっているか曲がっていないかを見た方が合理的なようだ。即ち、1・7は全体に丸味を持っていて口縁部が折れ曲がっていない。それに対してその他は程度の差はあれ折れ曲がっている。更に、後者の場合天井部が厚く中ほどで薄くなって再び口縁部が肥厚するもの（15・17・19・23）がある。これはヘラケズリしないものに多い。また、口径について見ればヘラケズリしているものは平均12.8cm、していないものは平均12.5cm〈註2〉でやや違いが見られる。Aタイプの杯身については底部の丸いもの（2・4・6・8・10・12・18）とやや平たいもの（14・16・20・22・24）があって、ヘラケズリをしているものがすべて前者に入り、後者はヘラケズリしていないものの大部分を占めることとなる。立ち上がりについては他の窯跡出土遺物同様、基部が太く先端の細いもの（8・16・20）と基部から先端まで厚味のかわらないものがある。しかし、これはヘラケズリの有無とは無関係のようである。

Bタイプの蓋杯について見れば、つまみの付くB_1タイプの杯蓋はすべて天井部外面にカキ目を施すのに対し、つまみのないB_2タイプの杯蓋は切り離し後粗くナデるだけである。つまみの形態でも宝殊形を呈するもの（26）と乳頭状のものがある。また、かえりはすべて口縁部より外に出て高い。法量的にはB_1、B_2ともに違いは見られず、平均口径が8.8cm、平均受部径が10.6cm〈註3〉である。杯身について見れば丸味を持って作られておりそれほど違いはない。ただ、体部に沈線を持つものと持たないもの（36）があり、持つものでも2条の場合と3条の場合がある。技法的にはB_1タイプのものが底部外面を回転ヘラケズリしているのに対し、B_2タイプのうち36が手持ちヘラケズリ、38がヘラケズリしないという違いがある。従って38の底部は他に比べて分厚い。

Aタイプのものは法量的に見ればⅣA期に入るものと考えられるが、技法的に見ればヘラケズリしていないものが半数あって、ⅣA期では不適当である。一方、Bタイプの蓋杯はⅤ期に含まれると考えたいが、杯身の形態が丸く、より角張った典型的なⅤ期のものとは違っている。

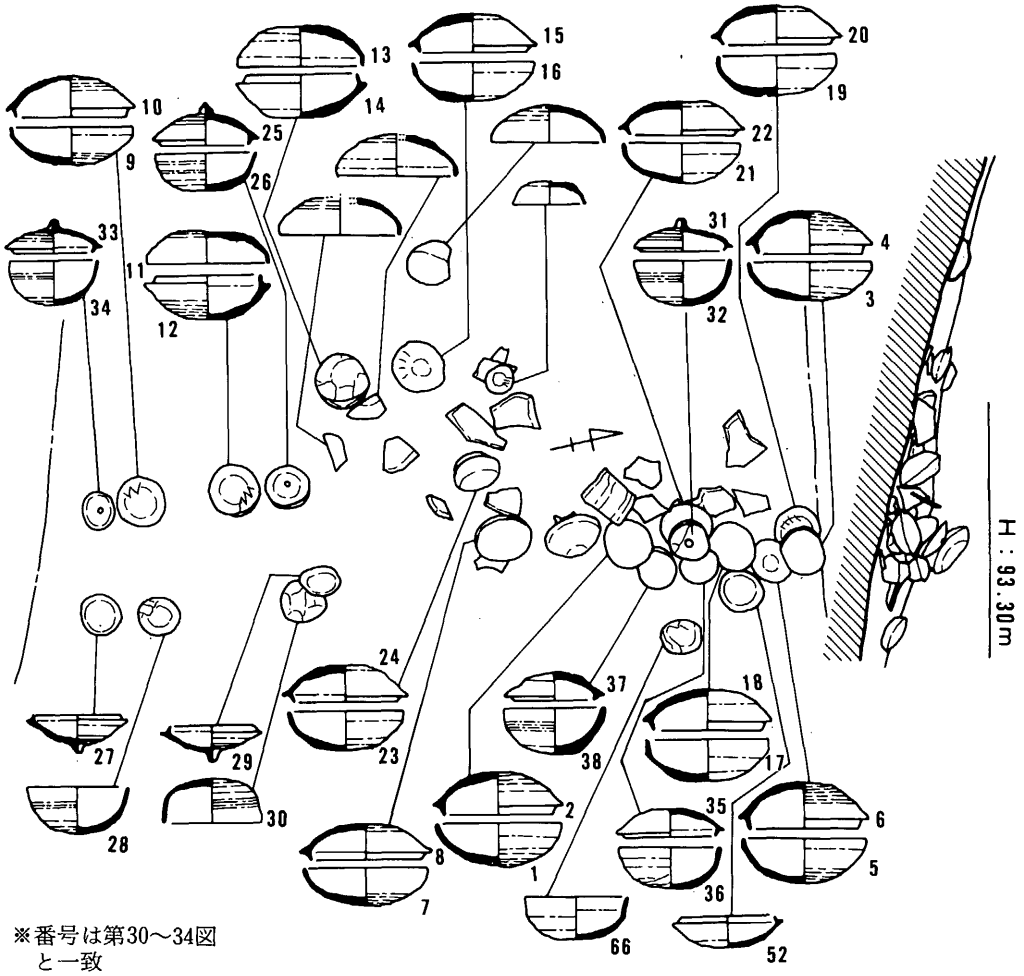
従って、同時焼成されたことが明らかなこれら一群の須恵器の編年的位置付けをどうするかが問題となる。これについての他の窯跡出土須恵器とからめてV章で考えを述べたい。次に1～38のセットを除いた遺物について記す。

杯蓋（39～47、75～78）

やはりAタイプとBタイプがあるが、Aタイプのものはすべて天井部をヘラケズリしている。Bタイプのものはつまみを持つB_1タイプのもので、天井部にカキ目を施している。

杯身（48～57、66、79～81）

Aタイプのものは52を除いてすべて底部をヘラケズリしている。形態的には50のように平底状を呈するものと51のように丸底状のものがある。また、立ち上がりの形態は基部が太く先端



第19図　40—Ⅰ号窯跡窯体内遺物出土状態実測図（1/20、遺物1/8）

の細いものと基部から先端まで太さの変わらないものがあるが、前者にも79のようにゆるやかに細くなるものと80のように急激に細くなるものがある。Bタイプのもの（53～57）は55がヘラケズリしない以外は底部をヘラケズリしている。セットで出土したものに比べ形態にバラエティーがある。丸底のもの（53･57)、比較的平底気味のもの（54～56）に分かれるが、体部の形状、沈線の有無によって更に小区分できる。66はこれらの杯身と違い、底部と体部の境が丸味を持つものの、全体に角張るものである。

高杯（58、59、82～85）

無蓋高杯のみであるが、屈曲する短脚のもの（59・83）と沈線を持つ長脚のもの（58・82・84・85)がある。後者には大型（84・85）とやや小さいもの（58・82）がある。

蓋（60～65）

口径が6.8～8.8cmのもので、天井部をすべてヘラケズリしている。形態的には口縁部が外反するもの（60～63）とほとんどまっすぐのもの（64、65）がある。前者には口縁端部が丸く終わるものと平坦面を造り出すもの（61）の二者が見られる。壺（特に短頸壺か）の蓋であろう。

椀（67、68）

形態、大きさに違いがあるが椀とした。68は鉢とした方が良いかもしれない。

壺（69）

広口の壺である。底部は切り離しの後でナデている。

平瓶（70）

胴部は上半部カキ目、下半部をヘラケズリする。胴部の大きさに比べ口縁部が大きい。

甕（71～74、86～89）

口径13.8cmの小型のもの（86・87)、20cm前後の中型（88・89)、40cm以上の大型（71・72)がある。他の窯跡出土大型甕の頸部にはヘラによる「連続斜線文」があったが、72には沈線があるだけでそれがない。71・73の口縁端部と71の頸部には円板を貼り付けている。

50—Ⅰ号窯跡出土遺物（第36～38図、図版39～43）

出土遺物は蓋杯、蓋、壺である。

(1) 出土状態

確実に数えられた床面は3面である。所属する床面が明らかな遺物は最終床面上のものと最初の床面のものである。最初の床面出土遺物は第36図7の杯蓋、第38図62の蓋だけで、最終床面上出土遺物の方が多い。その他は窯体埋土や床面の明らかでないものである。灰原は谷にそってかなり流れ出ている状態で、床面ごとに対応するような分層は不可能で一括してとり上げた。

(2) 遺物

杯蓋（1～31）

40—Ⅰ号窯跡出土蓋杯で使用したA・Bタイプ名をそのまま使用したい。従って、21～31がB_1タイプ、1～20がB_2タイプとなる。ただB_1タイプはつまみが付くために蓋とすることに異論はないと思うが、B_2タイプは蓋か身か迷うものである。つまみの付かない蓋もあるため、ここでは「かえり」のあるものをすべて蓋としたものである。B_1タイプの杯蓋は受部径が8.8～10.9cmである。つまみは宝珠形のものと乳頭状のものがある。天井部をヘラケズリしている。そのためか、天井部と体部の境に稜を持つものが多い。かえりはだいぶ退化してきており、完全に見えなくなっているもの(26)もある。B_2タイプの杯蓋は受部径9.8～11.6cmで、B_1タイプのものよりやや大きい傾向がある。天井部にヘラケズリは行わない。従って、B_1タイプのものに比べ丸味がある。かえりはB_1タイプに比べ高くしっかりしている傾向が強く、身とすべきか迷う原因にもなっている。

杯身（32～60）

52～60がB_1タイプ、その他がB_2タイプに分けられる。B_1タイプの杯身は底部と体部の境こそ不明瞭ではあるが、底部はだいぶ平坦に、体部もかなり直線的になって、40—Ⅰ号窯跡からセットで出土した丸味をおびた杯身とはかなり異なっている。ヘラケズリは行わない。口径8.5～9.5cmを測る。B_2タイプの杯身は一見すると蓋のようにも見え迷うものであるが、ここではすべて身として扱ったものである。ヘラケズリは行わず、切り離し後軽くナデるだけである。形態的には口縁部の近くで折り曲げるものが多いが、46のように丸味を持ったままのものも少量ある。口径は9.4～11.8cmで、B_1タイプのものよりやや大きい。

蓋（61、62）

大小あるが、壺の蓋であろう。ヘラ切り後軽くナデるだけである。

壺（63）

内外面とも明褐色を呈し硬質である。口径8.6cm、器高9.5cmを測る。胎土には粗砂粒を多く含み、それほど精良ではない。胴部の穿孔は焼成後行っている。明瞭でないが沈線を3条持つ。沈線もそうであるが、ナデも回転を利用して行っているが、その後所々に不定方向のナデを加えられている。底部はヘラ切り後粗いナデを行っている。穿孔部斜め上部に黒斑らしい部分がある。このように土師器か須恵器か迷うものである。全く同じ形のものは須恵器にも土師器にもないと思われる。胎土は粗く、器壁は厚くシャープさに欠ける。しかし、回転ナデが見えるところからロクロを使用したのはまちがいない。穿孔は瑯を意識したものとするなら、焼成後に行っているのはおかしい。一応「擬土師須恵器」としておく。〈註4〉

50—II号窯跡出土遺物（第38図64～74、図版43～44）

後述のように50—I号窯跡出土遺物と区別できない面もあるが、第38図の64以下に示したものをII号窯跡出土遺物と考えた。蓋杯、鉢、平瓶である。

(1) 出土状態

小型の窯跡で床面の重なりは認められなかった。床、壁面ともにあまり熱の影響を受けた形跡がなく操業も少なかったと見え、出土遺物も少ない。窯体からは遺物は出土していない。すぐ隣りにあるI号窯の燃焼部から灰原にかけての部分に流れ込んだ状態で少量出土しただけである。

(2) 遺物

杯蓋（67～71）

全体に浅くてかえりを持つものである。つまみの付くものと付かないものがある。かえりは退化して体部から外に出ない。つまみは宝珠形を呈する。つまみのないものはヘラ切り後ナデるだけなのに対し、つまみの付くものは天井部をヘラケズリする。

杯身（72～74）

高台の付くものと付かないものがある。ヘラケズリは行わない。体部には明瞭でないながらも稜がある。高台は高く外へふんばる。

鉢（64、66）

64はいわゆる鉄鉢型の先行形態をなすものである。まだ平底気味である。口縁端部がやや外反気味である。口径13.8cm、器高8.8cmである。66は器形が不詳だが平底の大型のものとなろう。

平瓶（65）

口頸部、胴部上半を回転ナデ、胴下半部をヘラケズリするものである。

50地点灰原出土遺物（第39、40図、図版44、45）

蓋杯、高杯、平瓶などの口頸部、短頸壺、長頸壺、甕その他がある。

(1) 出土状態

前述したように各窯跡ごとに分層し得るような状態ではなかったので一括してとり上げた。

(2) 遺物

杯蓋（75～86）

B_1タイプ（82～86）とB_2タイプ（75～81）がある。やはりB_1タイプの天井部はヘラケズリを行い、B_2タイプは行わない。

杯身（87～96）

94～96がB_1タイプ、87～93がB_2タイプとなる。杯蓋のB_2タイプと杯身のB_2タイプがセットに

なるものであろうが、どちらが蓋でどちらが身か迷うものである。

高杯（97～104）

すべて小型の高杯であるが、脚部が屈曲するもの(103、104)とそうでないものがある。屈曲しないものは非常に小型で脚端部等に作りの雑さが目立つ。

口頸部（105～107）

105は平瓶の口頸部と考えられるが、106と107については平瓶または提瓶、壺類の口頸部とも考えられるものである。

器種不明品（108）

脚が付くものとして椀、壺類が考えられるが決めがたいものである。底部内面を除いて全体を回転ナデで仕上げる。脚端部の形状が特徴的である。

短頸壺（109）

口径8.5cmを測り、あまり肩の張らないものである。

長頸壺（110）

２条の沈線を持つもので、全体を回転ナデで仕上げるものである。

甕（111～116）

他窯跡出土甕の分類に従えば111と112が小型甕に、113と114が中型甕に当たる。115と116は小破片で口径を推定できないが、おそらく116は口径40cm以上の大型の甕になるであろう。116だけが頸部外面にヘラによる「連続斜線文」を持つ。口縁部の形状にはかなり差異がある。111は内傾する平坦面を持ち、112と113は外側に張り出し、114は丸い。

57—Ⅰ号窯跡出土遺物（第41図６～11）

出土したのは蓋杯、盤である。

(1) 出土状態

窯体はほとんど流失しており、灰原が一部残存していただけである。遺物は一括して取り上げた。

(2) 遺物

杯蓋（６～８）

つまみの付くものとつかないものがある。内面のかえりはない。両者とも天井部外面をヘラケズリする。つまみは扁平で実用的とは言えない。

杯身（９、10）

高台の付くものである。体部は比較的直線的で、高台は比較的高く外方へふんばり気味に付けられる。

盤（11）

高台外径22cmを測るもので、底部外面と体部下半をヘラケズリしている。高台は直に近いがやや外開き気味である。

32地点出土遺物（第41図12～16）

出土したのは須恵器片と弥生式土器であるが図示できたのは後者だけである。

(1) 出土状態

トレンチ調査で灰原らしい黒色土と須恵器片が見つかったため、その上部を重機で剝いだところ遺構は検出できなかったが、土器が数片出土した。これらが図示した弥生式土器片である。

(2) 遺物

壺（12）

袋状口縁が稜を持つものに変わったもので、外面下半にハケ目の痕跡が見える以外はナデている。

底部（13～16）

壺か甕か決めがたいので一括して底部として扱った。磨滅のため調整がわかりにくいが、外面には痕跡的にハケ目の残るものがある。内面の調整がわかるものはナデである。

〈註１〉 舟山良一「須恵器の編年　九州」「古墳時代の研究６土師器と須恵器」では蓋と身が完全にかぶさった17セットだけを取り上げた。

〈註２〉 これも註１文献では12.2cmとしていたのを訂正したい。

〈註３〉 註１文献で口径10.6cmととられる書き方をしたが、本文のとおり受部径である。

〈註４〉 川述昭人「２、北部九州におけるいわゆる「赤焼土器」について」『野間窯跡群』福岡県教育委員会　1982

Ⅳ まとめ

小田浦窯跡群6地点9基の窯跡の発掘調査成果は既述した通りである。以下にそれらの時期を含めた簡単なまとめと問題点を指摘したい。

(1) 各窯跡の操業時期

33地点

1基の大型窯跡が検出されたが、床のかさ上げはあまりなく、3面の床面が数えられただけである。

Ⅰ号窯跡出土須恵器は蓋杯の形態、ヘラケズリの範囲、器種の組み合わせ等から、小田冨士雄氏編年のⅣ期に当たるもので、実年代としては6世紀末～7世紀初め頃の年代が考えられるものである。

34地点

小型の窯跡が1基検出されたが、元々小型の上に流失度合も激しく、正確な規模等は明らかにし得なかったものである。床面は1面しかなかった。出土遺物も少なかったが、蓋杯を見ると、やや扁平になった宝珠型つまみと身受けのかえりを持った杯蓋と高台を持った杯身がセットになるものである。杯蓋の天井部はヘラケズリしている。以上の特徴から7世紀後半頃のものと考えられる。

37地点

2基の大型の窯跡が検出された。Ⅰ号窯跡は長さもあるが幅が特に広い部類に属する。焼成回数も多かったと見えて、燃焼部の灰層は1.35mに達しており、床面も8面数えられた。遺物のうち所属する床面あるいはどの床面と床面の間から出土したか明らかなものは第23・24図に示したとおりである。杯蓋について見れば、口径12.0cm～13.8cmのものがあるが、先に焼かれたものの方が大きいとは言えない。最小のものが最初の床面近くから出土し、最大のものが最終床面上から出土している。高杯はすべて大型で有蓋のものと無蓋のものがある。蓋杯の口径からだけ考えるとⅢB期に入れても良さそうなものもあるが、杯蓋はだいぶ浅くなっていることや杯身の立ち上がりの高さなどから考えてⅣ期に属すると考えたい。従って6世紀末～7世紀初め頃の年代が考えられる。

Ⅱ号窯跡については、報告した通り、須恵器焼成前に崩壊したもので出土遺物はなかった。

しかし、排水溝の先端とⅠ号窯跡の関係から見て、Ⅰ号窯跡に先行して造られたものと考えられる。即ち、Ⅱ号窯の築造に失敗してⅠ号窯を築いたものと思われる。従って、実年代としてはⅠ号窯と同時期と考えたい。

40地点

大型のⅠ号窯跡と小型のⅡ号窯跡の2基が検出された。Ⅰ号窯跡は3面の床面が数えられたが、かさ上げ状況は通常の窯跡の場合は焚口に近い方が厚く、上へ行くほど薄くなるが、ここの場合は逆で上位の方が厚かった。時期としては、Ⅳ期即ち6世紀末～7世紀初めが考えられる。次項で問題点を指摘する。

Ⅱ号窯跡は報告した通り床面、側壁ともに熱による変化を受けておらず、灰原も形成されていない。37—Ⅱ号窯が窯を築造し、空焚きの段階で崩壊したと推定されたのに対し、ここの場合は空焚きの痕跡も認められないことから、築造途中で崩壊したものと考えられる。そうであれば当然近くに造り直した窯があると考えられるが、それは見つからなかった。あるいは、Ⅰ号窯跡の南側の削られた部分にあったかもしれない。

50地点

40地点と同様、大型のⅠ号窯跡と小型のⅡ号窯跡の2基が検出された。Ⅰ号窯跡はかなり残りが良く、焼成部下の天井が残っていた。天井が残存している場合、工具の痕跡の見られることが多々あるが、Ⅰ号窯跡の場合はそれが見られず、かなり「ガサガサ」の状態であった。また、多孔式になっている煙道部外側に須恵器の大甕片があったが、孔の蓋として火かげん調節用、あるいは密閉して窯体内を還元状態にする際に使用したものではないかと推測できる。牛頸窯跡群内では福岡県教育委員会の手によって調査された井手窯跡群33・43・44号窯跡の煙道部上面を大甕胴部片で覆っていた例が知られている。(註1)ただし、これらの例はすべて8世紀代のもので、小型の窯で円筒状になった煙道部を覆うものである。また、煙道部上面付近で杯蓋等が出土する場合があるが、道の下窯跡群14号窯跡の場合は焼のあまい杯蓋が7枚並べられていた。(註2)何らかの祭祀に伴うものと解釈できるが、中島恒次郎氏のようにこれらも閉塞に使用した可能性を含めて再検討すべきだとする意見もある。(註3)

床面については確実に数えられるのは3面で、40cmほどのかさ上げが認められただけである。

出土遺物は整理箱にして24箱分あるが、蓋杯が多かった。蓋にするか身にするか迷うものであるが、小田氏編年のⅤ期に属するものと考えられる。従って、実年代としては7世紀前半が考えられる。

Ⅱ号窯跡はⅠ号窯跡に隣接して検出された。全長4mの小型の窯跡で残りのあまり良くないものであった。床面の重なりはなく、かつ側壁の熱の影響もそれほど強く受けてはいないもの

と観察された。大変崩れやすいマサ土を掘り込んで造られており、極めて短期間の操業で崩壊したものではないかと考えられた。もろい土質のため、調査においても次々と崩壊する状況で煙道部等細部を明らかにすることはできなかった。

出土遺物は少なかった。かつ、隣接するⅠ号窯跡の燃焼部付近に流れ込んだような状況で検出された。従って、Ⅰ号窯跡出土遺物と完全に分離できたわけではない。特徴から見てⅥ期に属するものと考えられる。従って実年代としては7世紀後半が考えられる。

57地点

わずかに1基窯体の痕跡が検出されただけで、遺物は残存していた灰原からの出土である。蓋杯の特徴から見て8世紀前半に属するものと考えられる。

32地点

33—Ⅰ号窯跡調査に伴って周辺の確認調査の際見つかった地点である。当初、灰原らしい黒色土と須恵器片が検出されたため、窯跡があるものと考え、斜面上位を重機で剝いだところ、遺構は検出できずに、弥生土器が数点出土したものである。底部破片が多かったが、1点出土した壺の口縁部は弥生時代後期のものである。立地的に見ると、現在でもかなり山の奥の尾根付近に当たり、集落等は考えにくい。また、墓地としても山奥過ぎる。遺跡としてどのようなものか想定しにくい場所である。

〈註1〉『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県教育委員会1989
〈註2〉『牛頸窯跡群Ⅰ』福岡県教育委員会1988
〈註3〉『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ』太宰府市教育委員会1991

(2) 出土須恵器について

——Ⅳ、Ⅴ期の須恵器編年について——

牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書のⅠ、Ⅱで報告した窯跡は合わせて14地点25基となった。未報告の分は2地点である。年代的には既述したように6世紀末～8世紀後半が考えられるものである。検討しなければならないことは多岐にわたるが、小田浦40—Ⅰ号窯跡出土蓋杯の一群は極めて興味深いものと考えられるので、紙幅の都合もあってこれらを中心にして須恵器編年上の問題点を検討してみたい。指標とするのは、タイプの組み合わせ、技法、法量である。

須恵器編年は言うまでもなく1953年に樋口隆康氏が『対馬』の中で4期に分けた編年案を示

されたことから始まった。これは全国的に影響を及ぼしたが、北部九州では小田富士雄氏らが精力的に研究を進められた。天観寺山窯跡群を中心とした豊前、八女窯跡群を中心とした筑後、そして牛頸窯跡群を中心にした筑前の編年案が発表されている。牛頸窯跡群の場合は『野添・大浦窯跡群』(福岡県教育委員会1970)中でIII～V期の編年案が示され、現在までの業績が受け継がれている。しかし、大きく見れば良く整理された編年案ではあるが、既に20年が経過し、調査された窯跡数も当時とは比べものにならない。このため、ある部分においては再検討を要する所も表われてきている。より良い編年案作成のための検討を試みたい。

さて、我々が、III期以降の蓋杯を見る場合に特に判定に困るのはIIIB～IVA、IVA～IVBである。それらに比べてIIIA期は杯蓋に残る段の痕跡や沈線、口唇部の段等によって区別できるし、V期やVI期はそれまでと全く違う蓋杯によって判別しやすい。従って、IIIA期、V、VI期を「期」としないで型式とだけ把え、それがそのまま時間差を表わすなら問題は簡単であるが、型式的には違っても、同時に焼成あるいは使用されている場合があって問題を複雑にしている。小田浦40—I号窯跡出土の一群の蓋杯はその例である。即ち普通IV期と考える蓋杯とV期と考えられる蓋杯が同時焼成されていたことが確認された。報告文では前者に属する蓋杯をAタイプ、後者に属する蓋杯をBタイプとした(P34)。Aタイプは丸味のある蓋と立ちあがりのある身のセットで、Bタイプはかえりのある蓋と蓋受けのない身のセットである。Bタイプは更に蓋につまみの付くB_1タイプと、つまみの付かないB_2タイプに分けた。この窯跡からはAタイプが12セット、B_1タイプが5セット、B_2タイプが2セット同時焼成状態で出土した。Aタイプの場合へラケズリするものとしないものが約半数ずつある。口径的にはへラケズリするものが平均12.8cm、しないものが12.5cmである。IV期をA、B2小期に分けるのは、法量の違い(大が古く、小が新しい)と技法の粗略化(へラケズリの有無等)と言われているため、ここでのAタイプの蓋杯をIVA期とするかIVB期とするかには問題がある。一方、Bタイプの杯蓋は蓋はまだしも身はずいぶん丸味を持っていて典型的なV期の身に比べて違いも目立つ。

さて、ここでA、B両タイプの組み合わせに注目して他の窯跡出土須恵器を見てみたい。今回同時に報告した小田浦50—I号窯跡の場合(第36～40図)は、蓋か身か迷うものが多かったが、すべてBタイプの蓋杯と考えた。仮りに蓋と身が考えたものと逆であっても、小田浦40—I号窯跡出土のAタイプのように口径が13cm以上もあってへラケズリをしているものはない。Bタイプの蓋杯は新しく出現したものであるから、Aタイプの含まれていない50—I号窯跡出土須恵器群は40—I号窯跡出土須恵器群より後出するものと考えられる。前回報告した後田窯跡群中の60—I号窯跡出土須恵器群(『後田窯跡群』P62第51図)も同様と考えられる。

その一方、小田浦33—I号窯跡出土須恵器群(第20～22図)にはBタイプの蓋杯は含まれない。また杯蓋を見ると、第20図1だけ特別大きいので除いて第20図2—～12の平均口径は12.6cmとなり、40—I号窯跡出土Aタイプのものとあまり変わらない。しかし、33—I号窯跡出土

蓋杯の場合はすべてヘラケズリしている。このことから、小田浦33－Ⅰ号窯跡出土須恵器群は40－Ⅰ号窯跡出土須恵器群より古い一群とすることができる。

以上をまとめれば

①小田浦33－Ⅰ号窯跡出土須恵器群→②小田浦40－Ⅰ号窯跡出土須恵器群→③小田浦50－Ⅰ号窯跡出土須恵器群

とすることができる。『野添、大浦窯跡跡群』中でもⅣ期の後半に「身にかえりをもたない新しい系統の杯が製作される。」とあるが、40－Ⅰ号窯跡出土須恵器群はそのことを再確認させたと言うことができる。(註1)従って、編年表にも明示することが必要になると思われる。

さて、以上のことは主にA、B両タイプのあり方を中心に考えたが、技法と法量との関係はどうなるであろうか。

技法、特にヘラケズリを行うか行わないかを見ると、上記の①はすべて行い、②はAタイプは約半数行い、B_1タイプは行うかカキ目を施し、B_2タイプは行わない。③はB_1タイプは行い、B_2タイプは行わないことが観察され、粗略化の流れに添っている。

次に法量を見ると、Aタイプの見られる①、②の場合、大きい違いは見られない。②、③のBタイプどうしの比較でも同様である。しかし、A、Bタイプを比べて見ればAタイプの方が大きく、Bタイプが小さいのは明白である。

こうして見ると、タイプの組み合わせと技法は流れに合致し、法量は大きく見れば合致するが、細かく見ればやや違っていると言うことができる。そこで問題になるのが径11cm前後の蓋杯の存在である。Aタイプのみの組み合わせでヘラケズリを行う蓋杯は牛頸でも中通A－Ⅰ号窯跡等で知られており、(註2)これらがⅣB期と把えられていた一群と考えられる。しかしながら、小田浦40－Ⅰ号窯跡出土須恵器群はそれらより法量が大きいにもかかわらず、Bタイプと共伴し、ヘラケズリを行うものと行わないものがある。従って、タイプの組み合わせ、技法、法量すべての要素が変化の流れと同一ではないことが再確認できる。上記①、②はⅣ期、③はⅤ期と考えられるが、Ⅳ期については法量の点でまだ検討しなければならない。

以上述べたことを簡単にまとめれば、

1．Ⅳ期の中でBタイプの蓋杯が出現するのが再確認されたこと

2．A、B両タイプの組み合わせとヘラケズリの有無の流れは一致すること

3．法量は必ずしも変化の流れと一致しないこと

である。

牛頸窯跡群では調査された窯跡が200基を超えた。それらの成果を取り入れた須恵器編年案の提示は大野城市で調査を担当する者の任務と考えている。上記の問題点を踏まえて、近い将来その任を果たしたい。

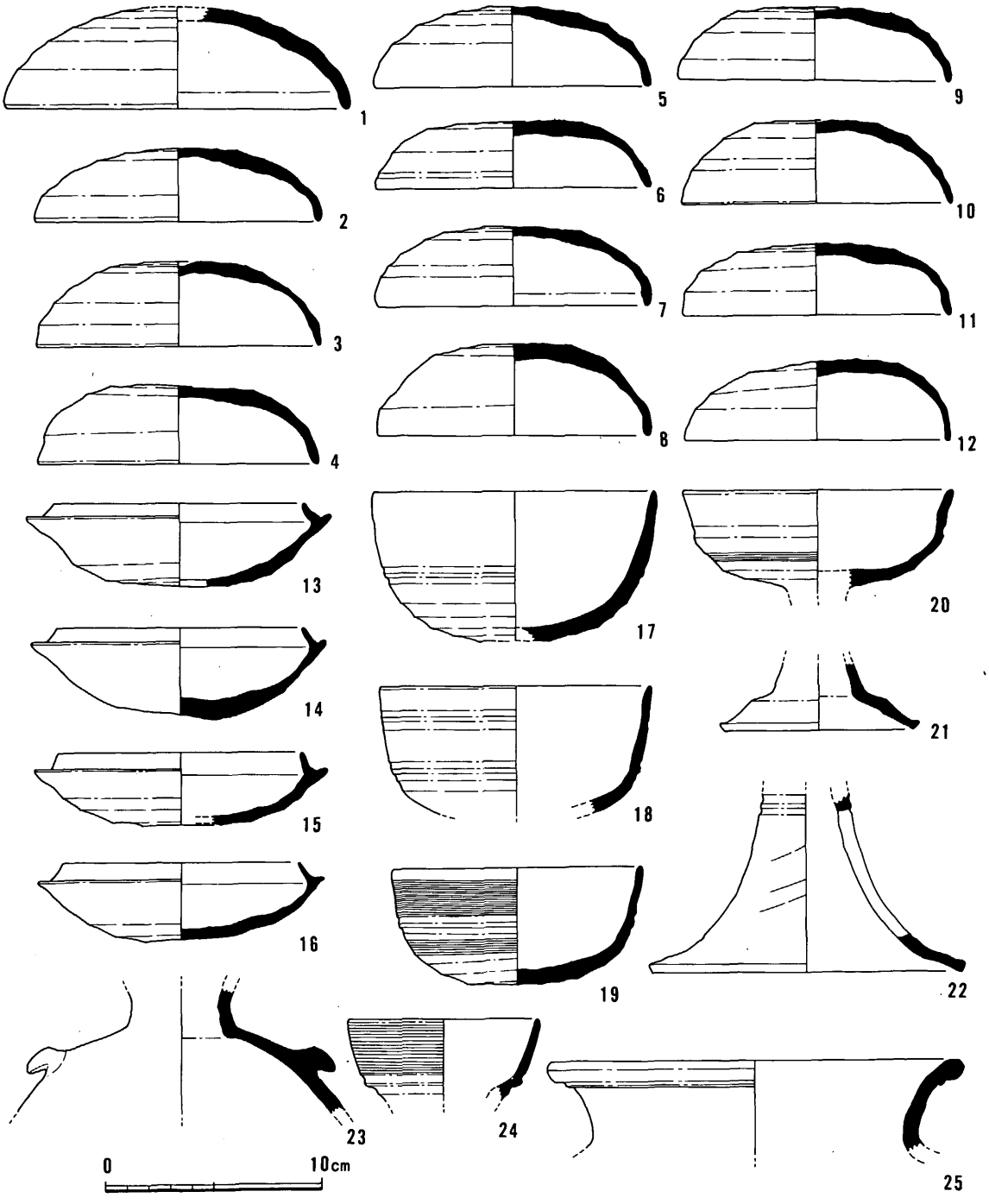
最後になるが、調査成果にまとめるに当たり、立正大学教授坂詰秀一先生、大分県教育委員会小林昭彦氏には種々ご教示を得た。心から感謝の意を表したい。

〈註1〉『野添・大浦窯跡群』福岡県教育委員会　1970　P43
〈註2〉『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会　1980

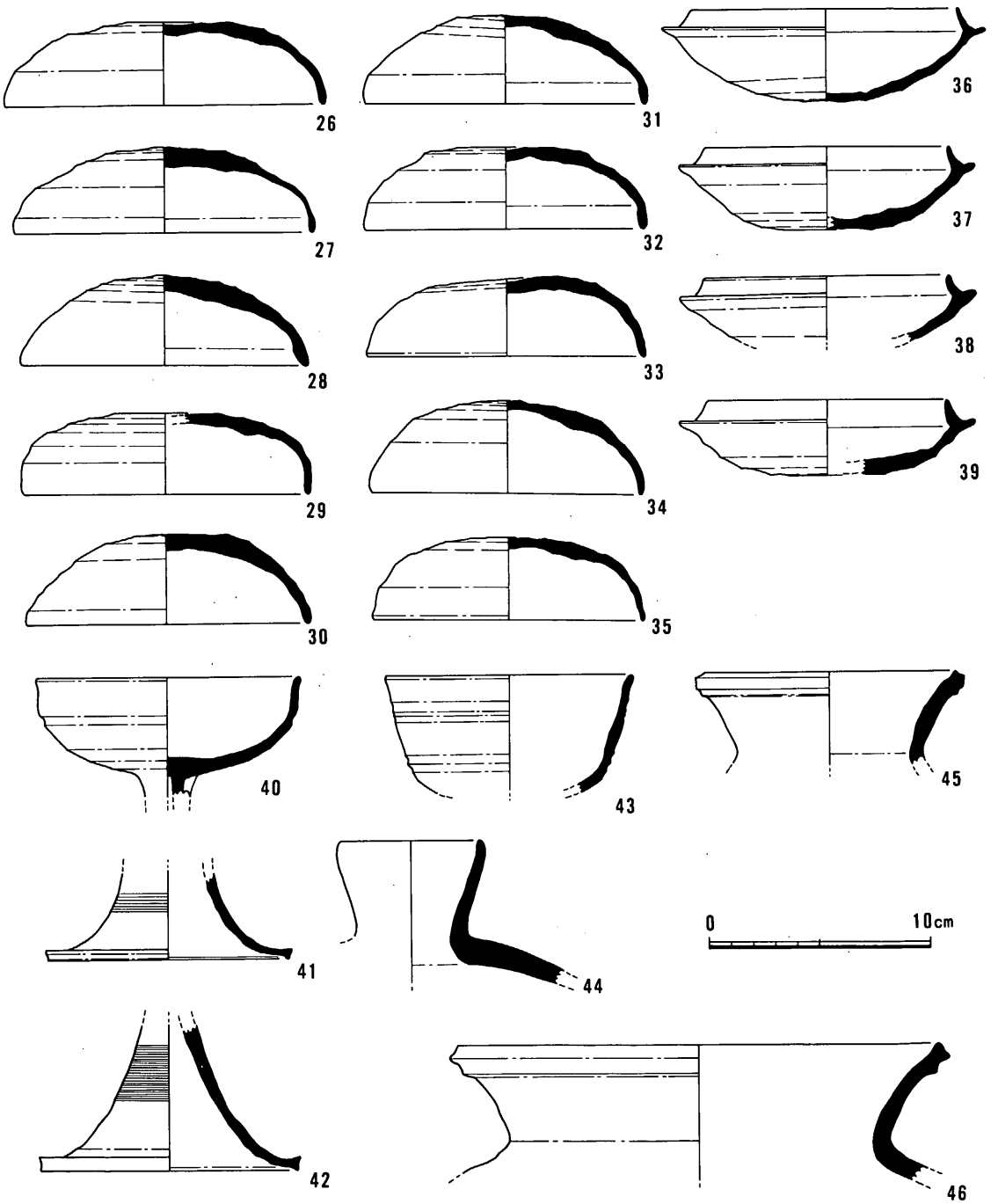
なお、調査に従事していただいた方々のお名前を記して、その労をねぎらいたい。
横川浩
赤星年子、浅川郷子、石橋初二、伊藤和子、岡本正枝、梶原三治、梶原チヨノ、川原美津子、倉重丑之助、篠原東美子、高木冴子、高野輝代、田島幸子、田中フミ子、田中八重子、中垣親、中島和子、中村淳子、原田敬子、福永志津子、松村次郎、宮崎美智子、森山美代子、山口慶子、山崎三枝子、湯川玲子、吉嗣波津子、吉原満義、吉原京子
町井裕子、松岡邦子、松岡信子、山本恒子

遺物実測図

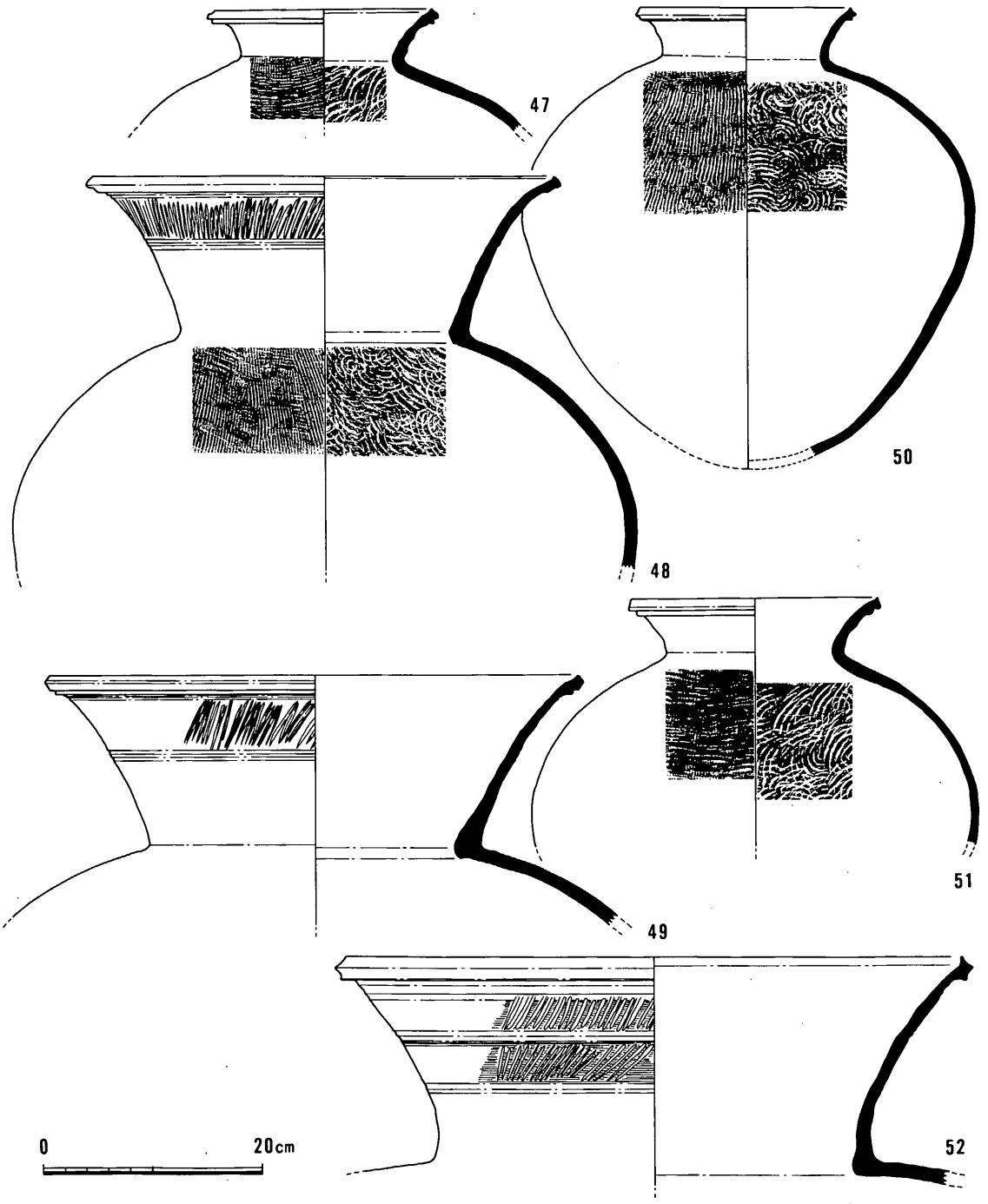
ページ
33地点……47
37地点……50
40地点……57
50地点……62
34地点……67
57地点……67
32地点……67



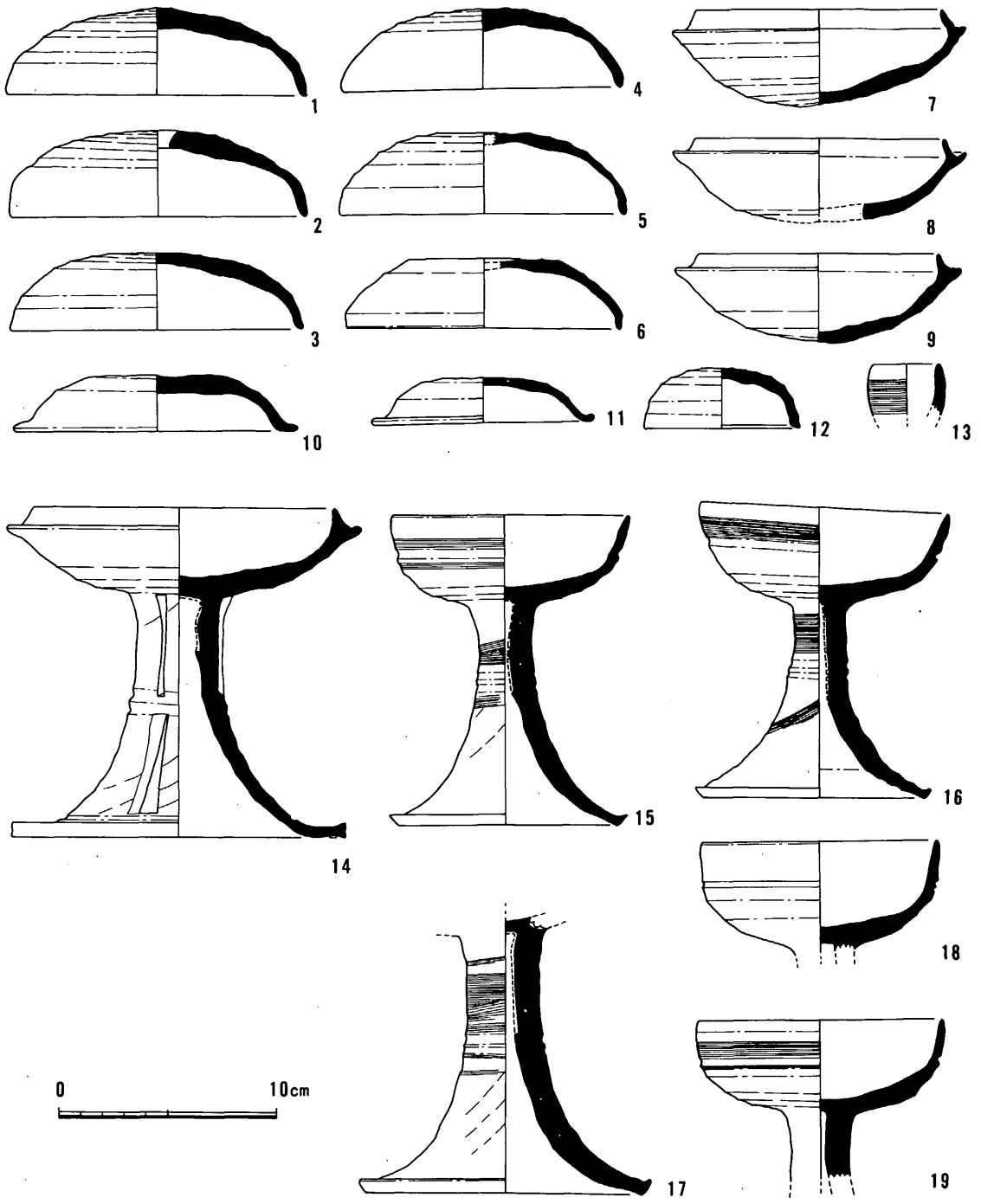
第20図　33—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図（１/３）



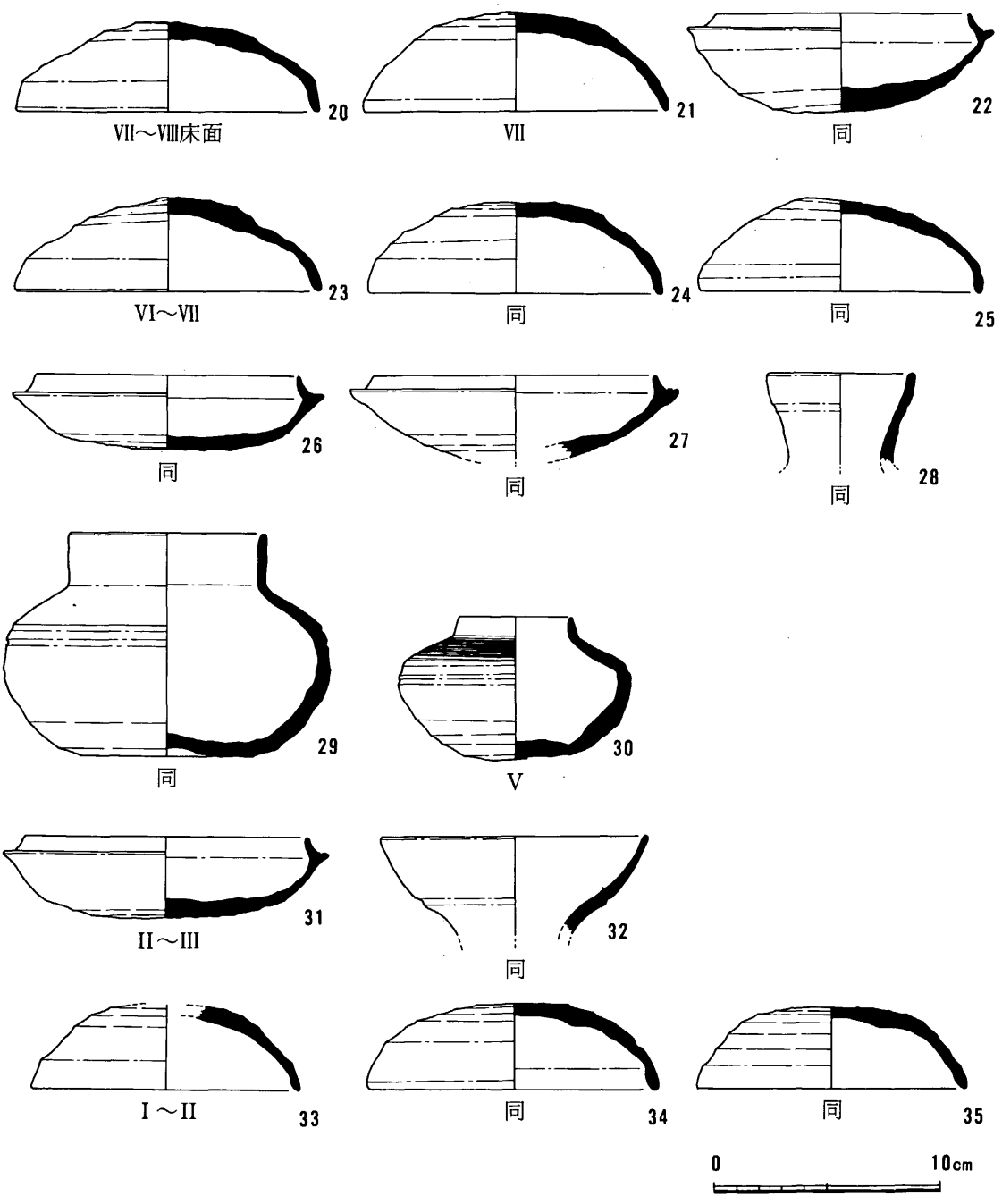
第21図　33—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図①（1／3）



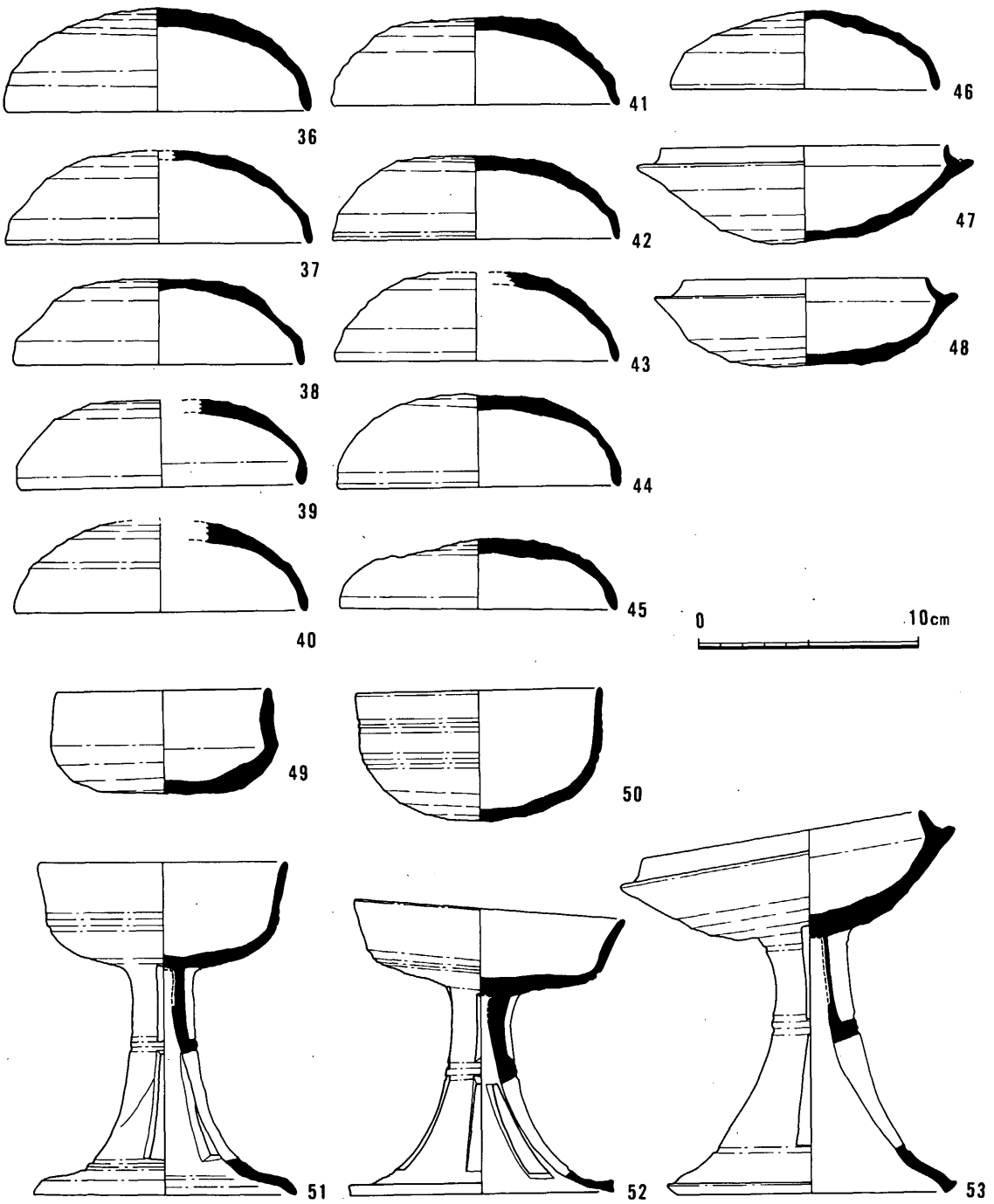
第22図　33—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図②（1／6）



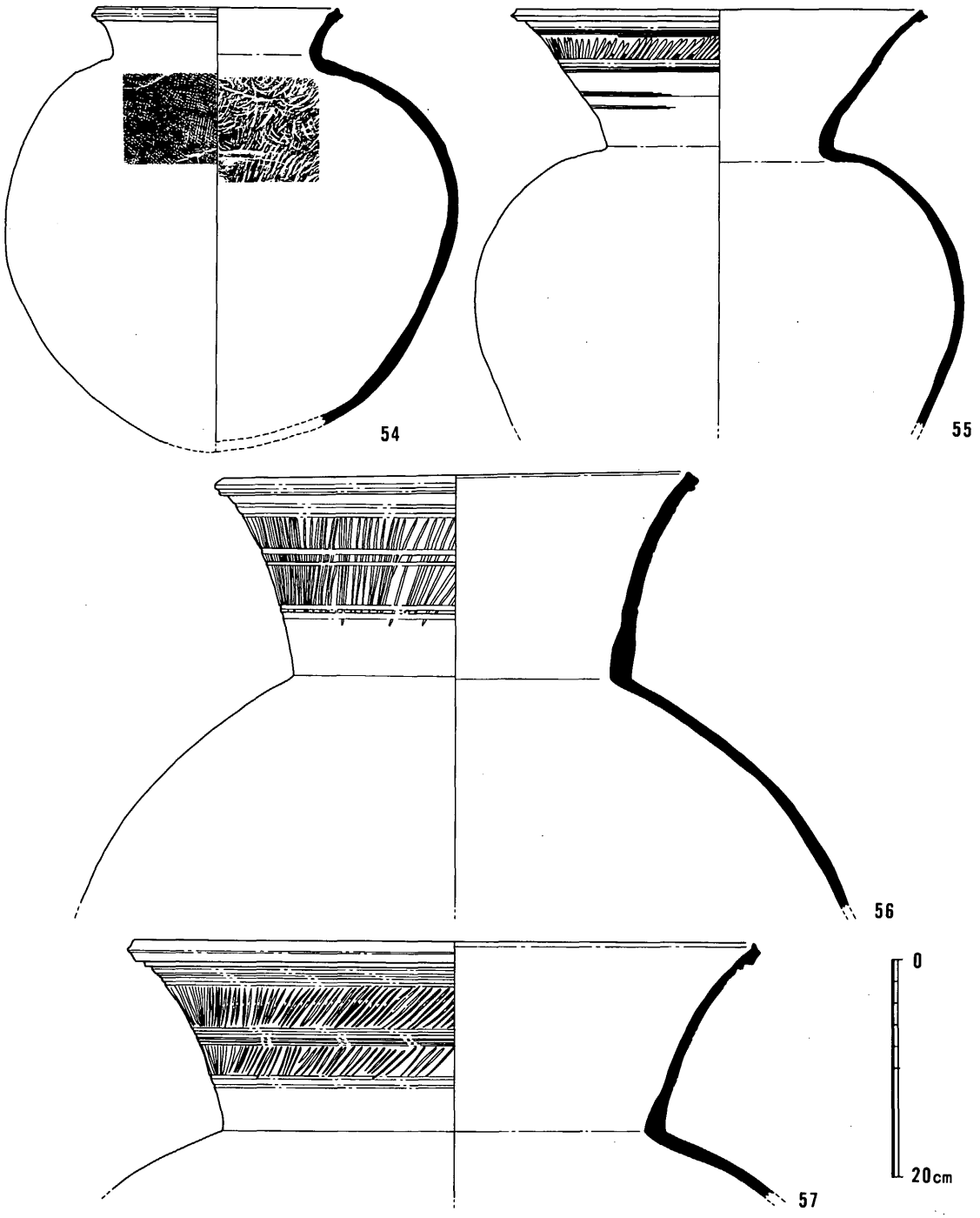
第23図　37—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（Ⅷ床面：最終床面）（1／3）



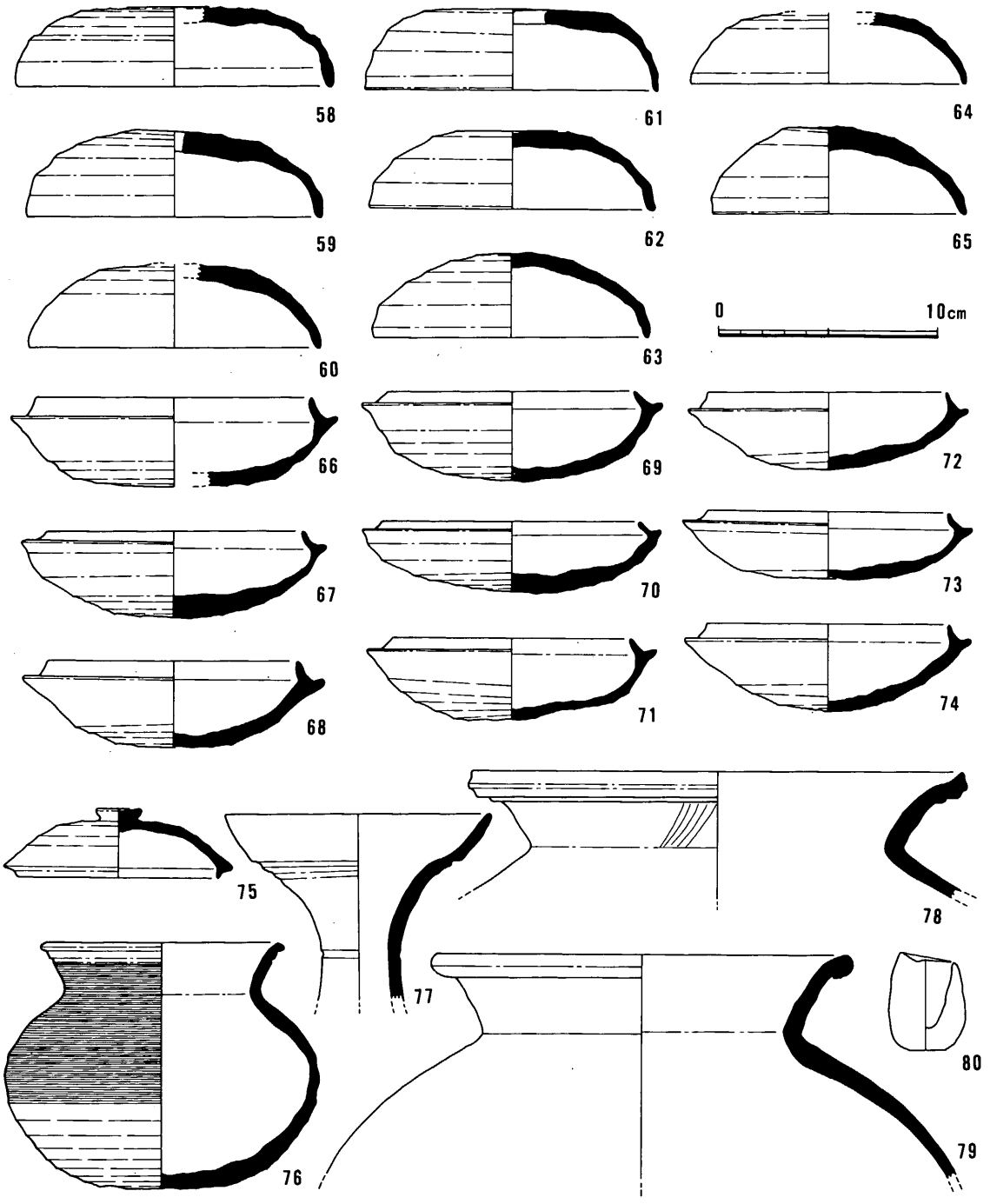
第24図　37—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（各床面）（1／3）



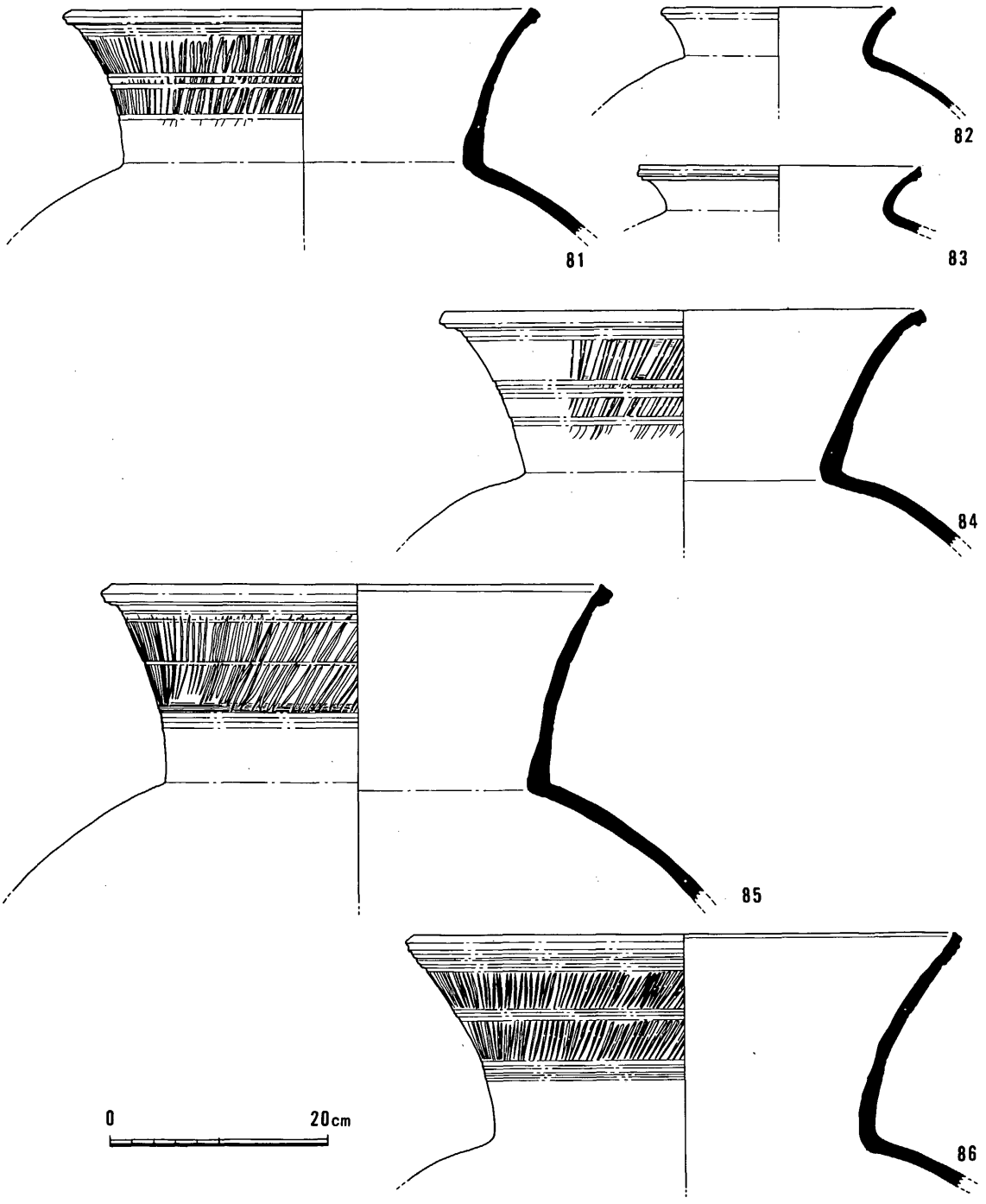
第25図　37—Ⅰ号窯跡・西土坑(53)出土遺物実測図③（1／3）



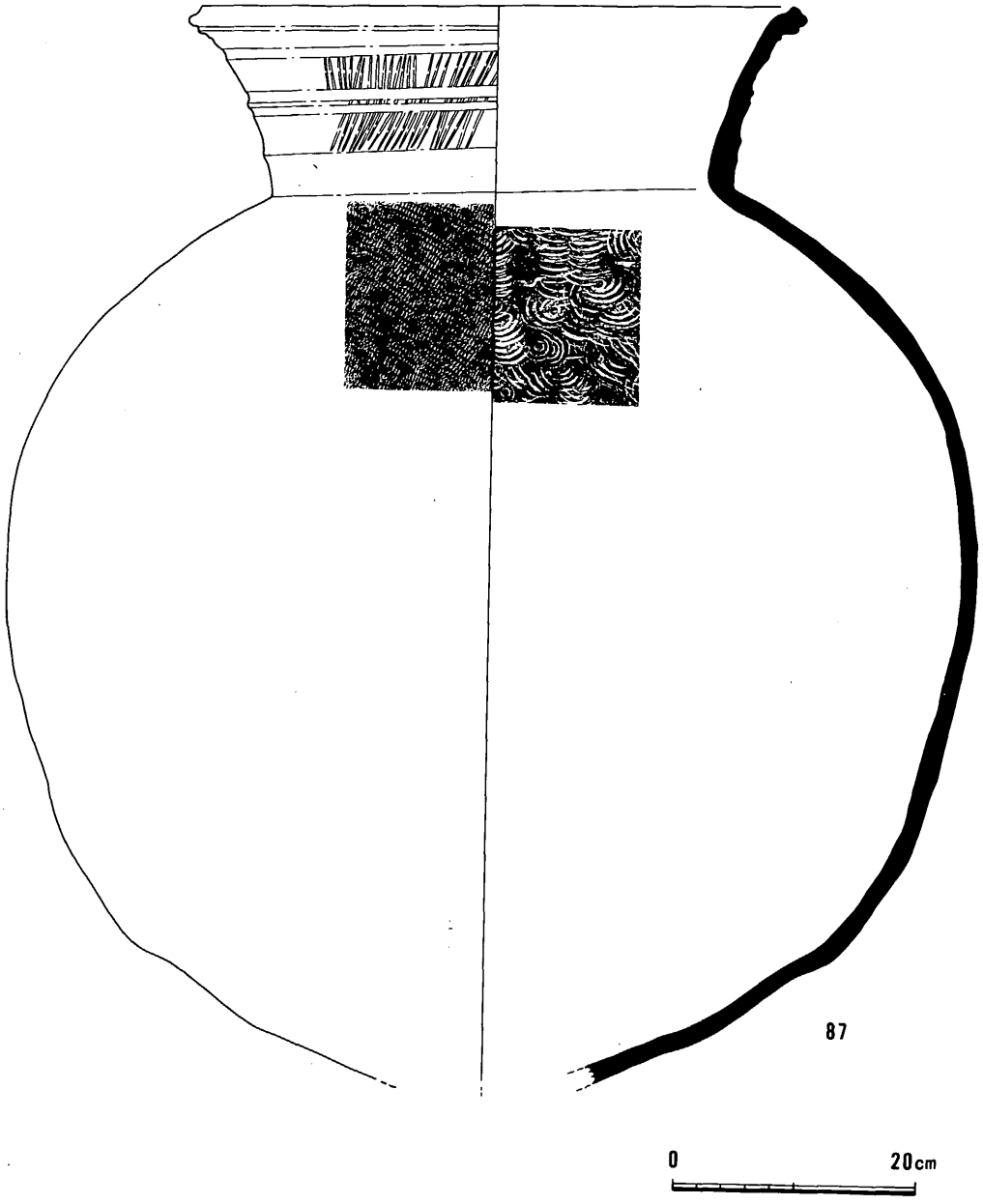
第26図　37—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図④（1/6）



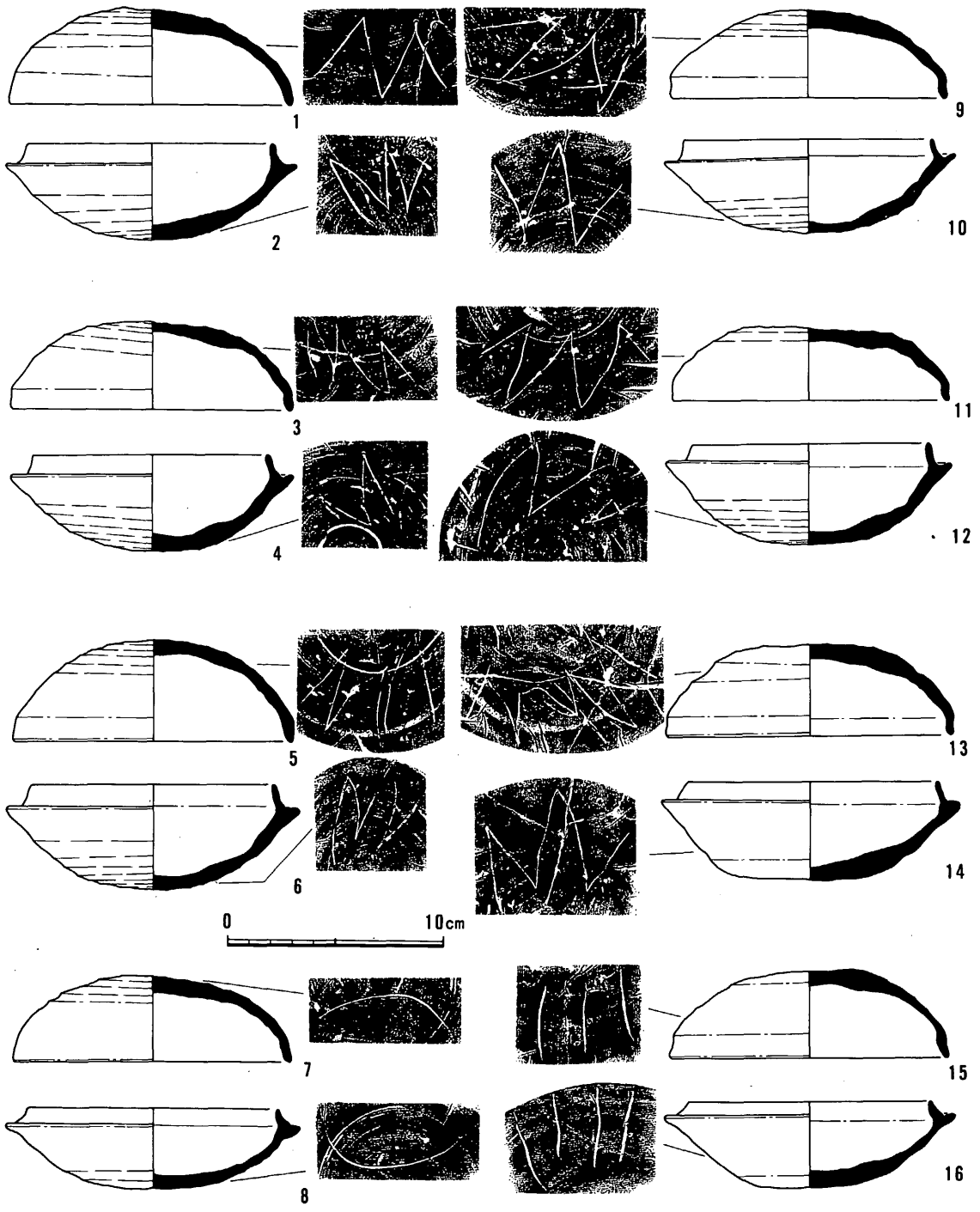
第27図　37—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図①（1／3）



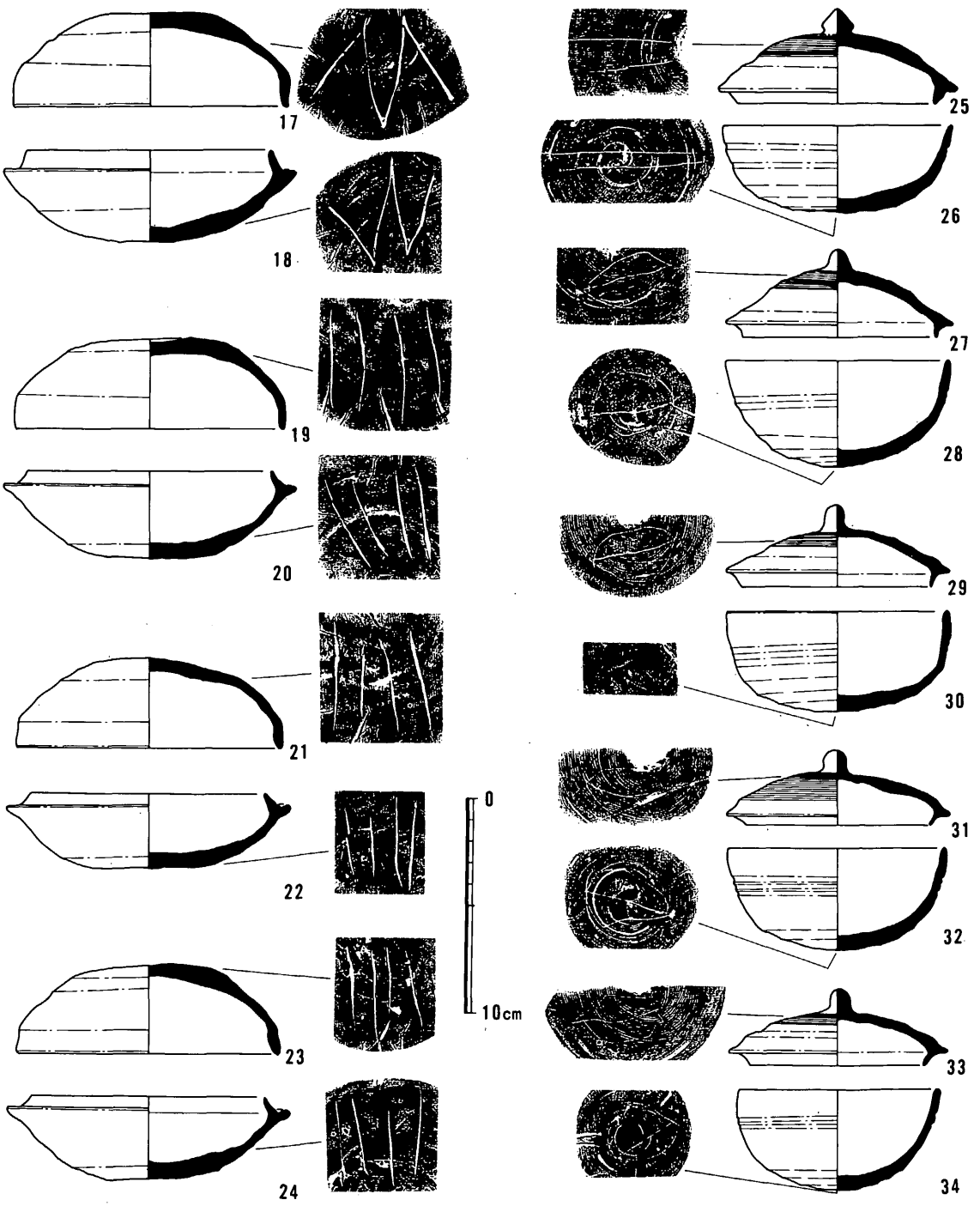
第28図　37—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図②（1/6）



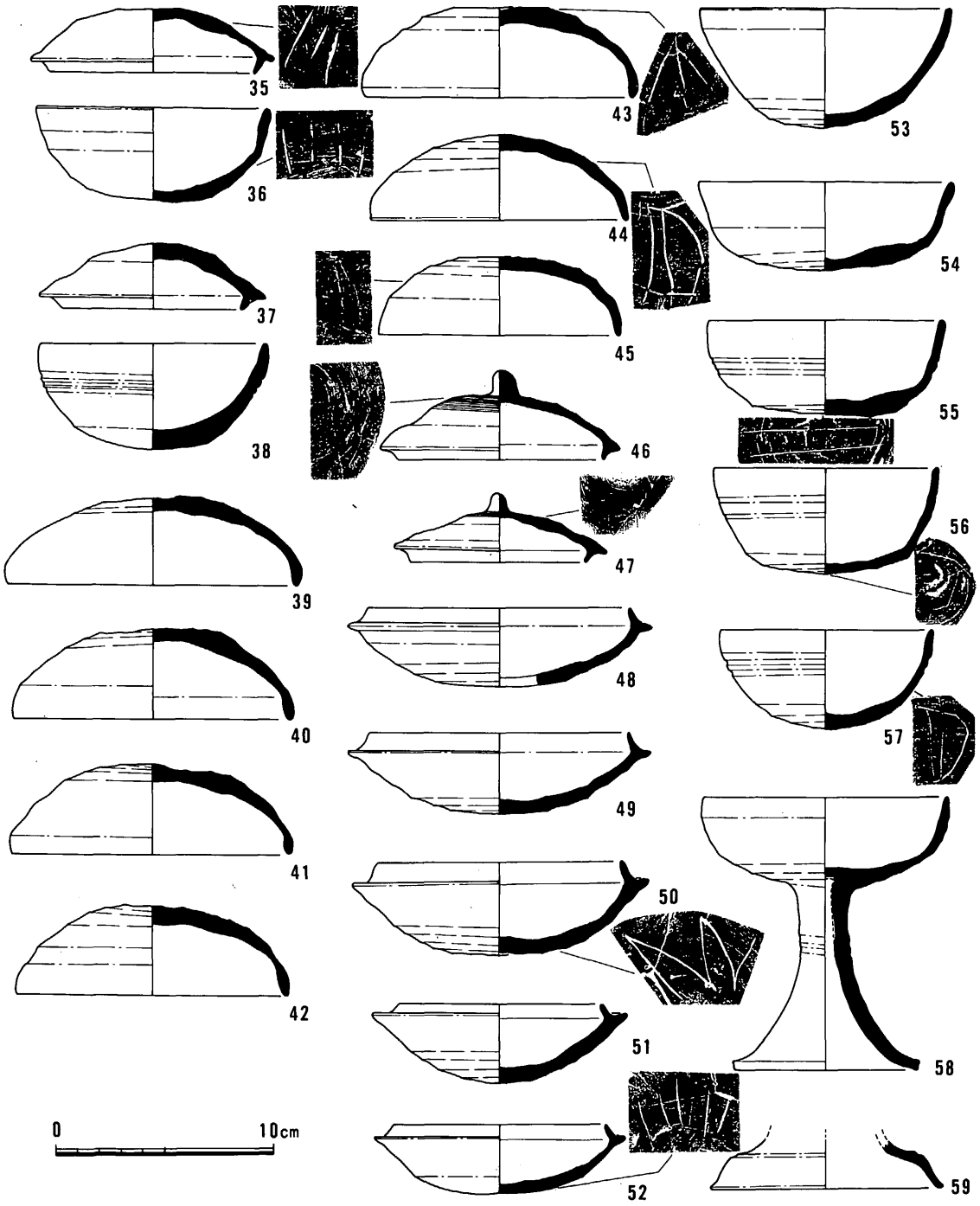
第29図　37—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図③（1/6）



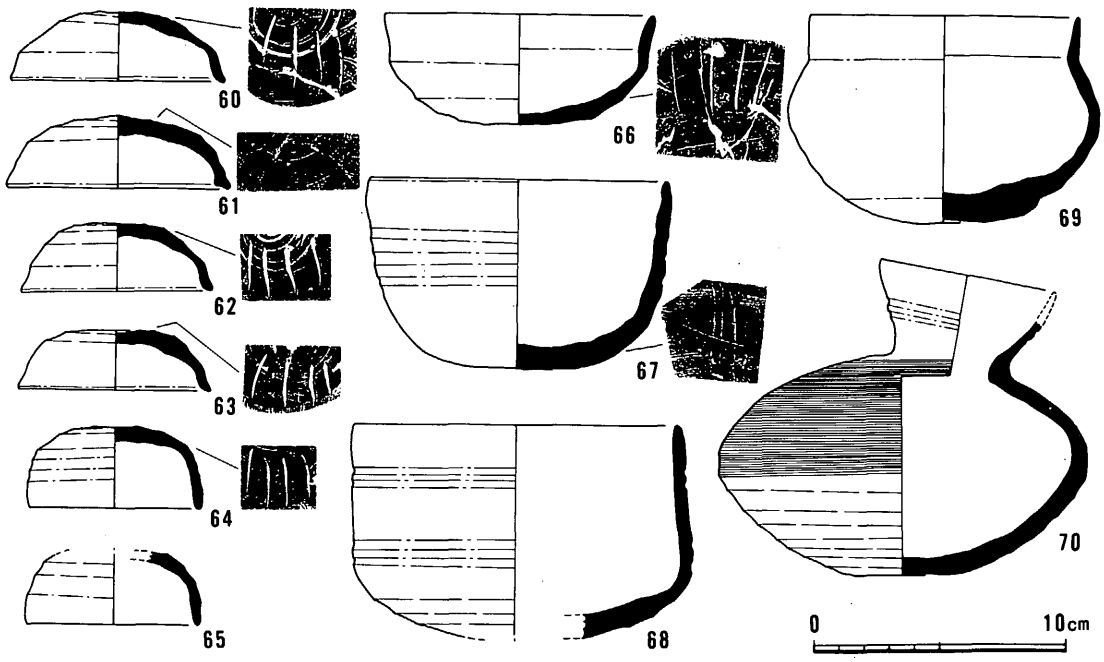
第30図　40—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（1/3）



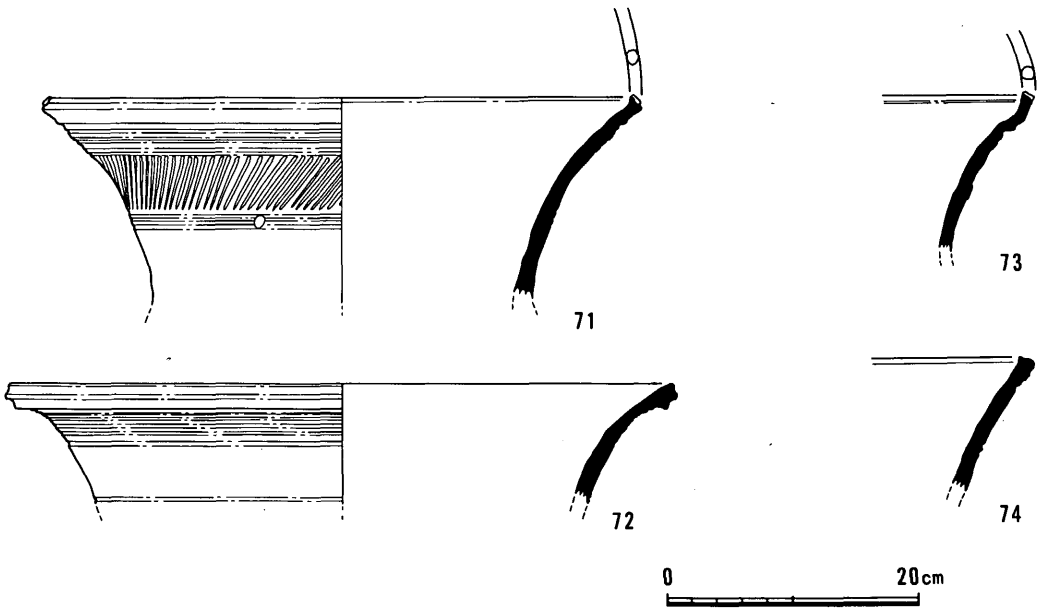
第31図　40—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（1/3）



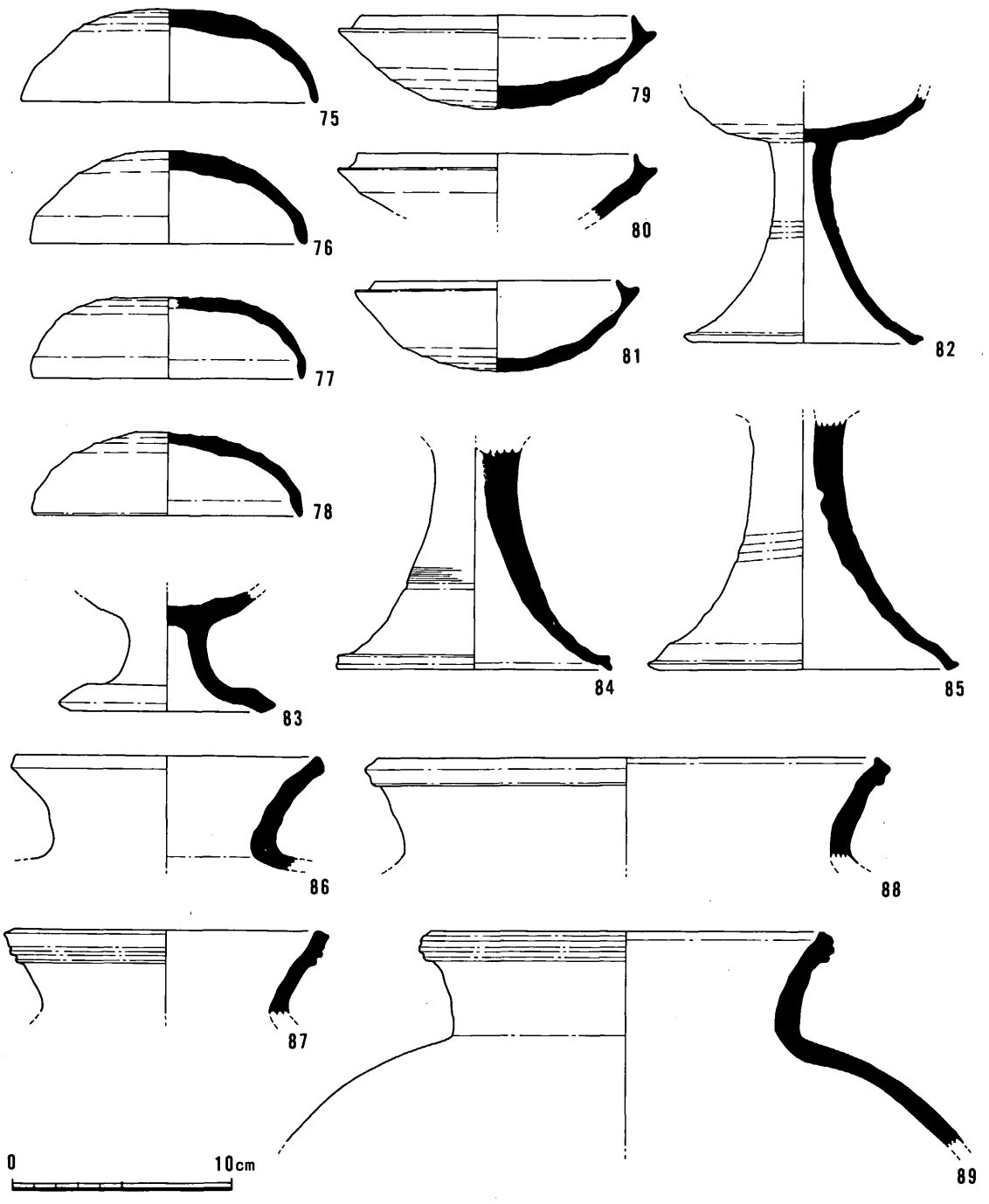
第32図　40—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図③（1/3）



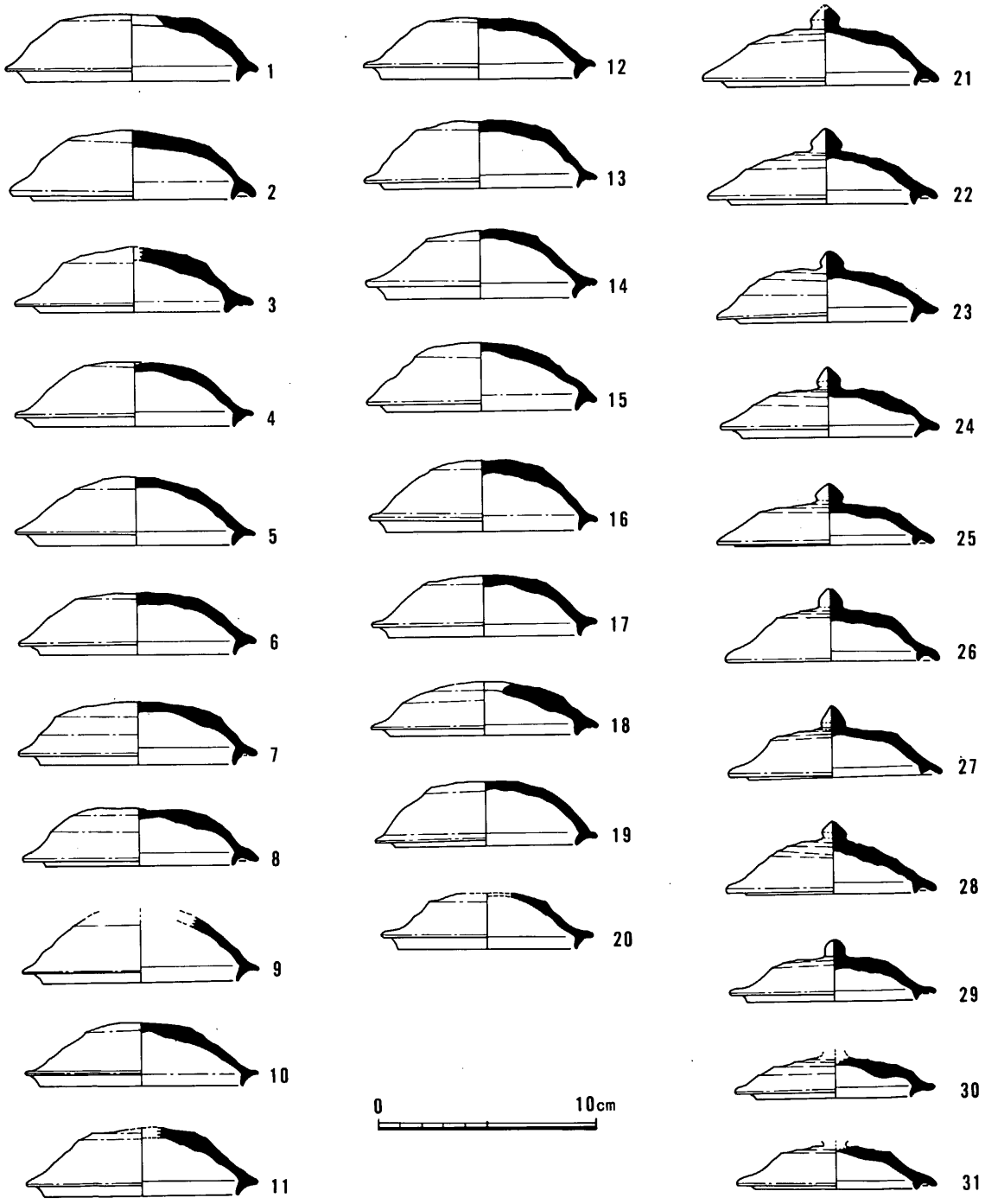
第33図　40—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図④（1/3）



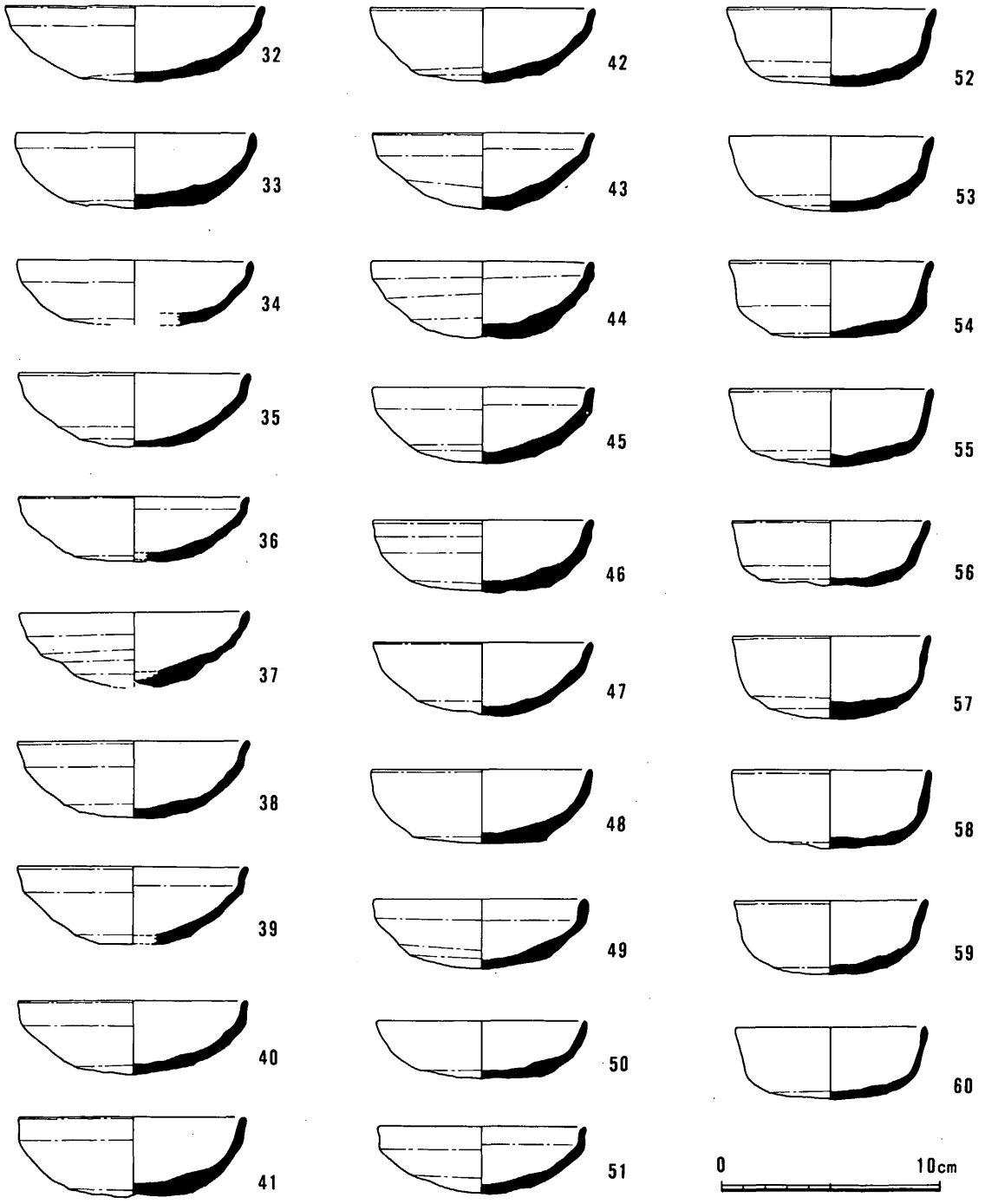
第34図　40—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図⑤（1/6）



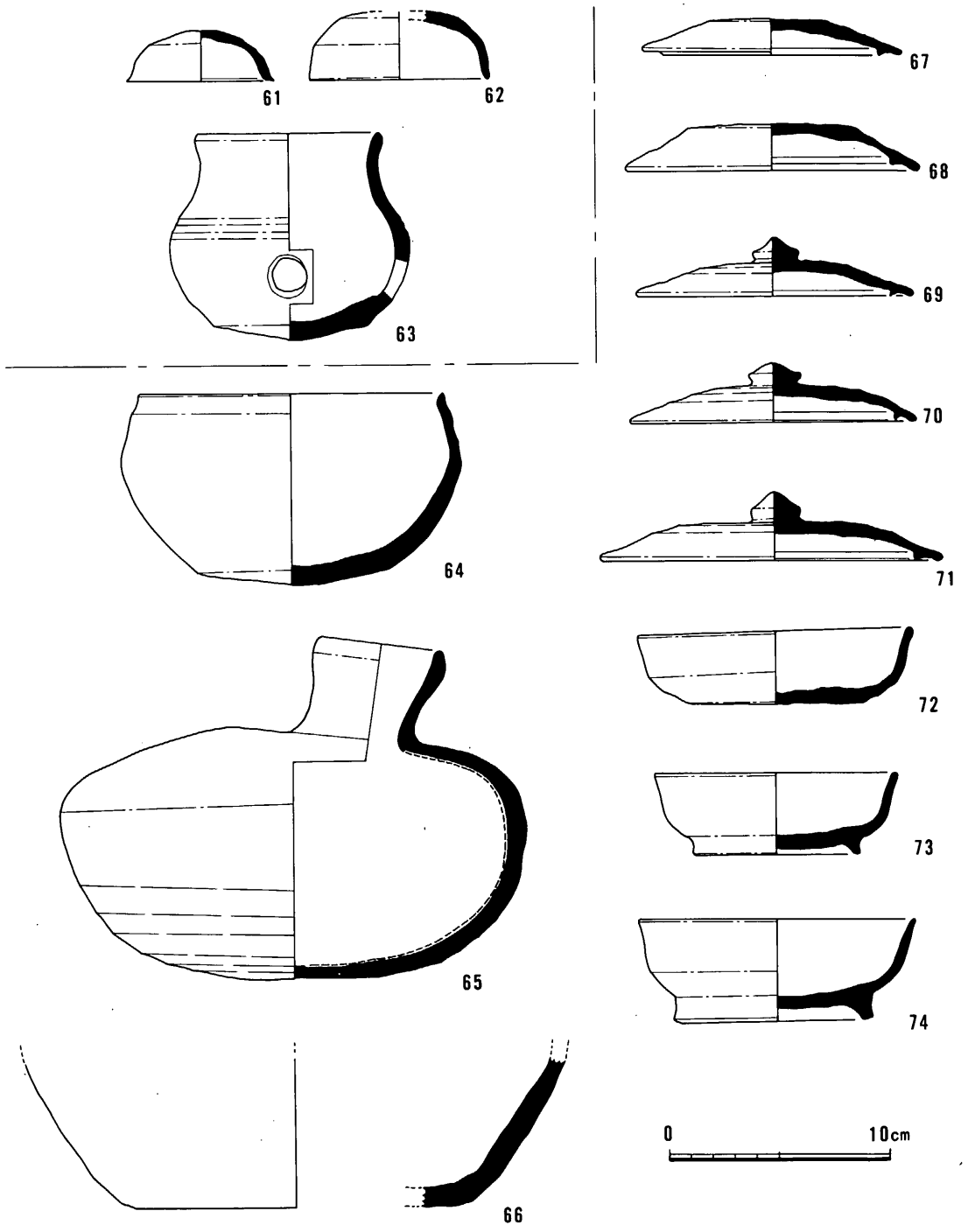
第35図　40—Ⅰ号窯跡灰原出土遺物実測図（1/3）



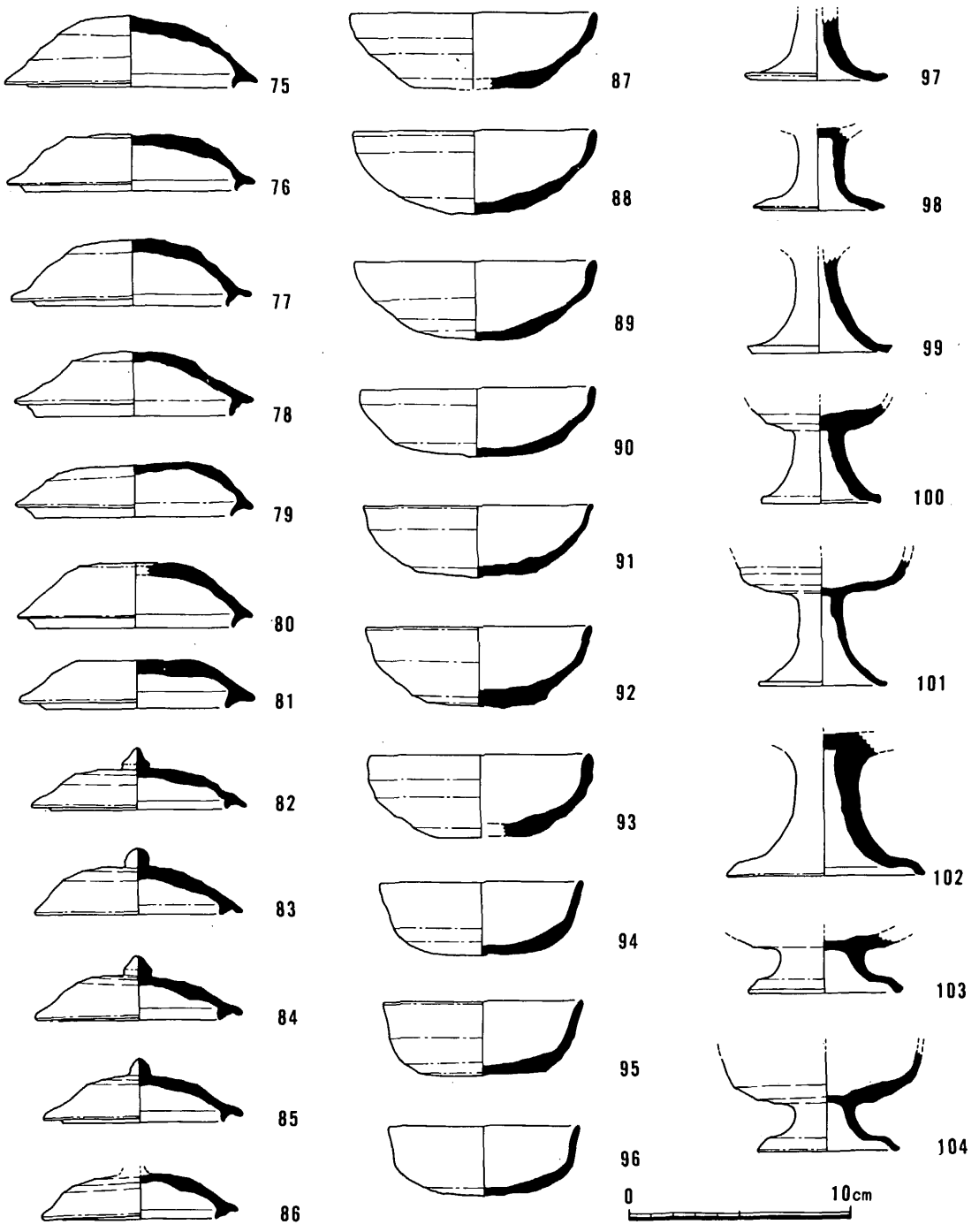
第36図　50—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図①（1/3）



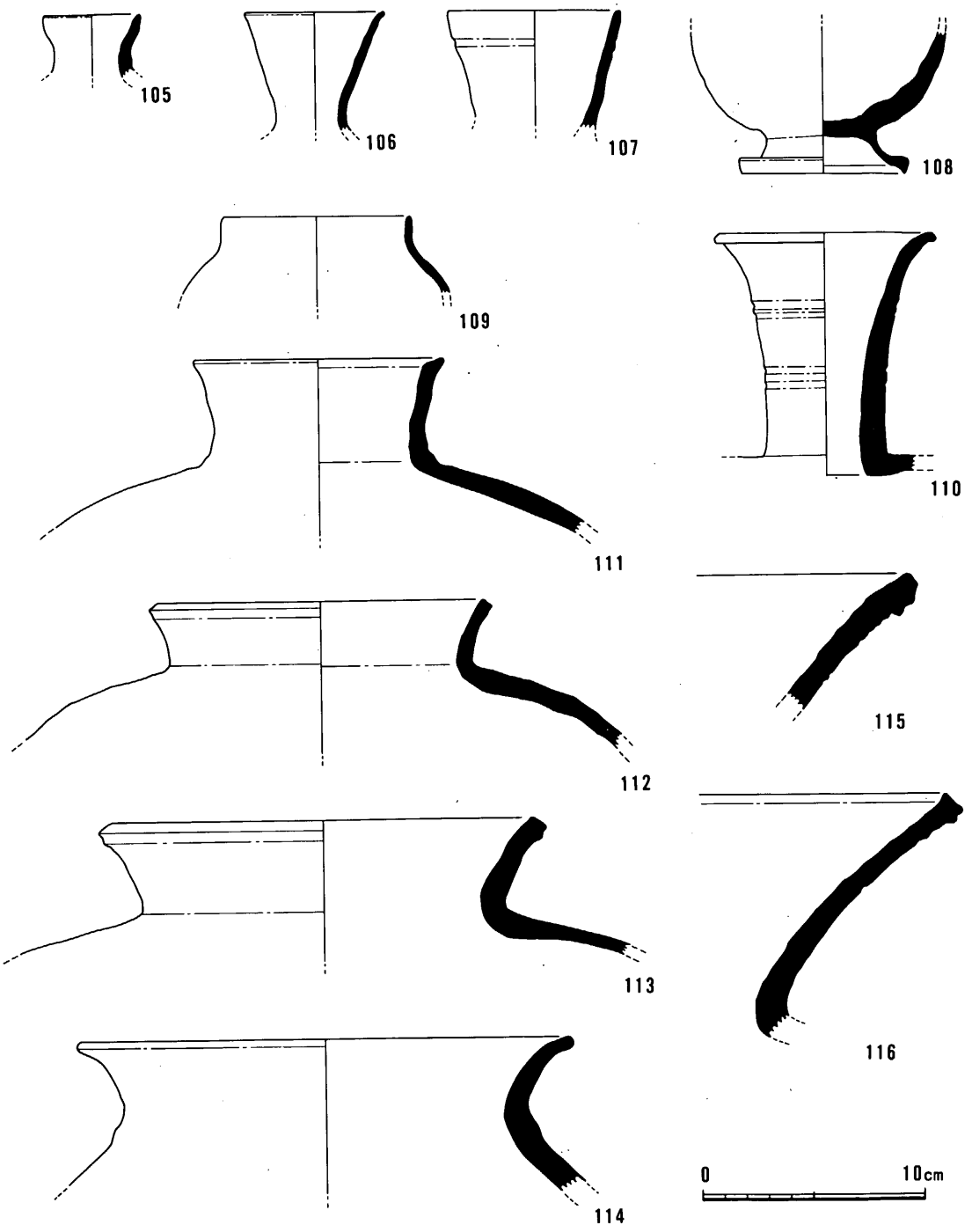
第37図　50—Ⅰ号窯跡出土遺物実測図②（1/3）



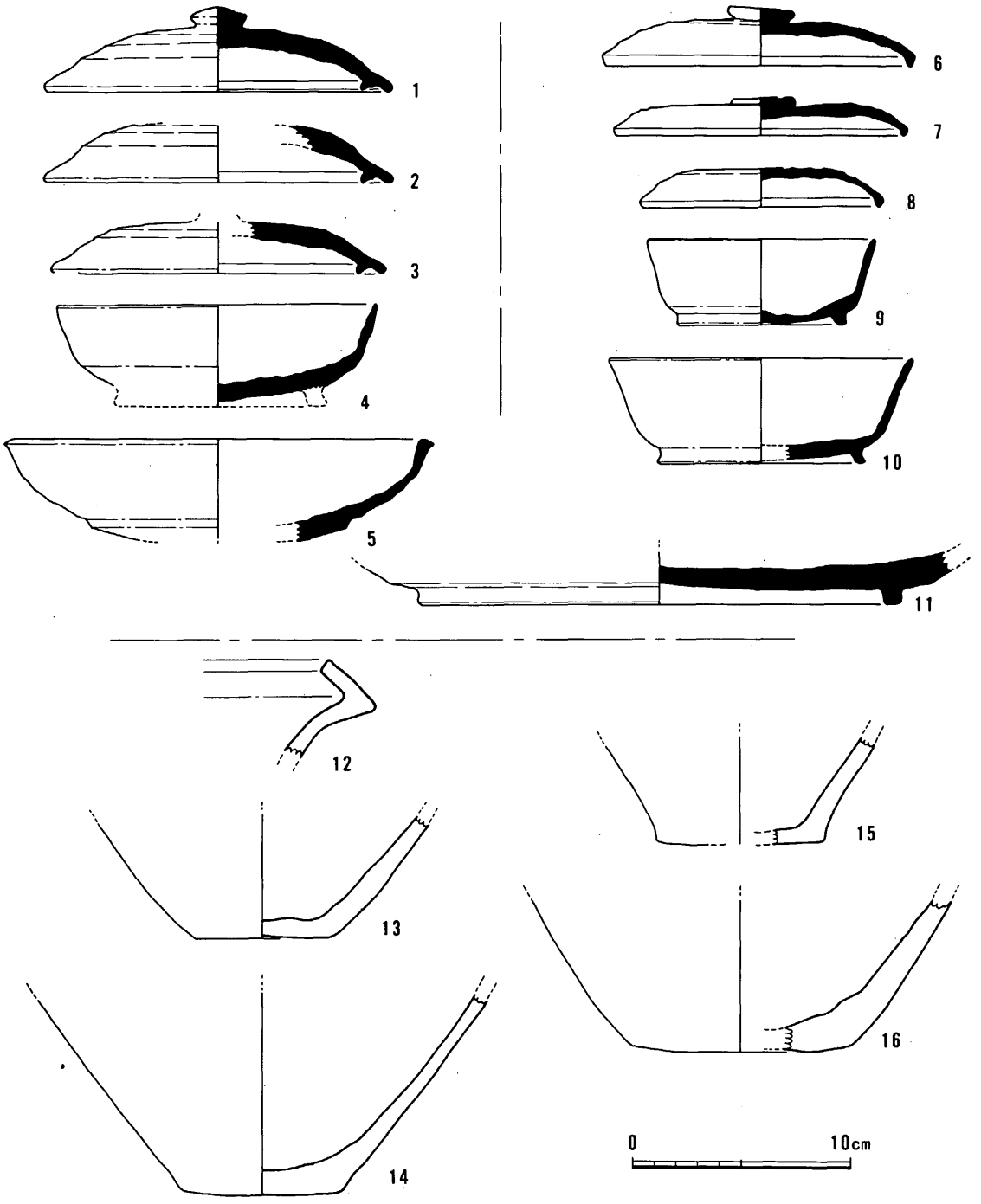
第38図　50—Ⅰ・Ⅱ号窯跡出土遺物実測図（1/3）



第39図　50地点灰原出土遺物実測図①（1/3）



第40図　50地点灰原出土遺物実測図②（1/3）



第41図　34—Ⅰ号窯跡(１～５)、57—Ⅰ号窯跡(６～11)、32地点(12～16)出土遺物実測図(１/３)

遺物観察表

ページ
33地点……69
37地点……71
40地点……74
50地点……78
34地点……83
57地点……83
32地点……83

※（　）は推定値を表わす。

33地点（第20～22図）

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
1	杯蓋	本体埋土	①(15.8) ②4.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 灰色 外面 茶灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや不良 D 1/2
2	杯蓋	焼成部最終床面	①(13.3) ②3.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 2/3
3	杯蓋	焚口灰層	①(13.0) ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3
4	杯蓋	焼成部最終床面	①12.9 ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 3/4
5	杯蓋	本体埋土	①12.7 ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 1/2
6	杯蓋	〃	①12.6 ②3.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶褐色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/3
7	杯蓋	焼成部最終床面	①(12.4) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良好 D 1/2
8	杯蓋	〃	①12.5 ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや良好 D 4/5
9	杯蓋	〃	①12.4 ②3.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 1/3
10	杯蓋	焚口灰層	①(12.4) ②3.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3
11	杯蓋	本体埋土	①12.2 ②3.4	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗茶褐色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 4/5
12	杯蓋	焚口灰層	①12.1 ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 2/3
13	杯身	焼成部最終床面	①11.7 ②3.9 ⑦14.1	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。底部に焼成後の穿孔あり。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰白色 B 砂粒多く含む、やや粗 C 不良 D 完形
14	杯身	〃	①11.4 ②4.3 ⑦13.7	外面灰かぶりの為調整不明。口縁部外面から内面にかけて回転ナデ。	A 内面 暗茶灰色 外面 暗青灰色 B 細粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
15	杯身	焚口灰層	①(11.3) ②3.3 ⑦(13.6)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C やや良好 D 1/2
16	杯身	〃	①11.0 ②3.7 ⑦13.3	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。外面灰かぶり、ヘラ記号あり。	A 内面 青灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
17	椀	焼成部最終床面	①(13.0) ②7.0	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。体部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/4
18	椀	焚口灰層	①(12.6)	内外面灰かぶりの為調理不明。口縁部下に2条、体部に2条の沈線が巡る。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 小片
19	椀	本体埋土	①11.5 ②5.4	底部外面回転ヘラ削り、口縁部から体部にかけてカキ目、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。体部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 4/5
20	高杯	焚口灰層	①(12.4)	体部下端カキ目、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 暗青灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 杯部1/4
21	高杯	本体埋土	脚端径(9.2)	残存部内外面回転ナデ。	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 脚部1/3
22	高杯	本体埋土 焼成部最終床面	脚端径(14.6)	脚部内外面回転ナデ。脚部中位に2条、下位に1条の沈線が巡る。3方向に三角形の透かしあり。	A 内面 暗灰色 外面 褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 脚部1/3
23	提瓶	本体埋土 灰原	残存部最大径(15.2)	残存部内外面回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 青灰色 外面 淡青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 頸部から肩部にかけて1/4
24	甕	焚口灰層	①(8.7)	口縁部外面カキ目、他は回転ナデ。	A 内面 緑灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 口縁部1/3
25	甕	〃	①(19.2)	口縁部内外面回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや不良 D 口縁部小片

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
26	杯蓋	灰原	①(14.4) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 1/2
27	杯蓋	〃	①(13.4) ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3
28	杯蓋	〃	①(12.9) ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 完形
29	杯蓋	〃	①(12.8) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 淡青灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 1/2
30	杯蓋	〃	①(12.8) ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
31	杯蓋	〃	①(12.6) ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 1/2
32	杯蓋	〃	①(12.6) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/3
33	杯蓋	〃	①12.5 ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
34	杯蓋	〃	①(12.2) ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 2/3
35	杯蓋	〃	①(12.1) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗茶灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3
36	杯身	〃	①11.9 ②4.2 ⑦(14.6)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 3/4
37	杯身	〃	①(10.9) ②3.8 ⑦13.3	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/5
38	杯身	〃	①11.0 ⑦13.4	残存部内外面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 3/5
39	杯身	〃	①(10.8) ②3.5 ⑦(13.3)	底部外面回転ヘラ削り、内面一部不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 青灰色 外面 灰色 B 砂粒多く含む、密 C 良好 D 1/3
40	高杯	〃	①(11.8)	口縁部内外面回転ナデ。他は灰かぶりの為調整不明。 頸部に2方向の貫通していない透かしあり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/2
41	高杯	〃	脚端径(11.1)	残存部内外面回転ナデ。外面一部カキ目。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 脚部1/4
42	高杯	〃	脚端径(11.8)	脚部外面中位カキ目、他は灰かぶりの為調整不明、内面回転ナデ。脚部に2方向の透かしあり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 脚部1/3
43	椀	〃	①(11.2)	残存部内外面回転ナデ、口縁部下に1条、体部に2条の沈線が巡る。	A 内面 灰色 外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/4
44	平瓶	〃	①(6.4)	口縁部内外面回転ナデ、胴部外面カキ目、内面回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部3/4
45	甕	〃	①(11.3)	口縁部内外面回転ナデ。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 口縁部1/3
46	甕	〃	①(21.8)	口縁部内外面回転ナデ、外面一部格子目叩き。口頸部外面ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 口縁部小片
47	甕	〃	①(19.9)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面格子目叩きの後平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、密 C やや良好 D 口縁部から肩部にかけて残存
48	甕	〃	①(42.2)	口縁部外面連続斜線文を施し、その下端に2条の沈線が巡る、他は回転ナデ。胴部外面平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 黒色・灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 口縁部から胴部にかけて1/4
49	甕	〃	①(48.2)	口縁部外面連続斜線文を施し、その上に1条の沈線、その下に2条の沈線が巡る、他は回転ナデ。肩部外面平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 口縁部から肩部にかけて1/4
50	甕	〃	①(19.1) ②(42.5) 胴部最大径41.3	口縁部内外面回転ナデ、胴部外面平行叩きの後カキ目、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
51	甕	灰原	①(23.0) 胴部最大径(40.6)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩きの後ナデ、胴部外面格子目叩きの後平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗褐色 外面 灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部から胴部にかけて1/3
52	甕	〃	①(58.0)	口縁部外面カキ目の後2段の連続斜線文を施し、その下にそれぞれ2条の沈線が巡る。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部小片

37地点（第23～29図）

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
1	杯蓋	焼成部最終床面(Ⅷ面)	①(13.8) ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 淡黄灰色 外面 黄灰色 B 細粒多く含む、粗 C やや良好 D 2/3
2	杯蓋	〃	①(13.6) ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。天井部中央に焼成前の穿孔あり。	A 内外面 青灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 2/3
3	杯蓋	〃	①(13.4) ②3.6	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 青灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 2/3
4	杯蓋	〃	①(12.8) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、やや粗 C やや良好 D 1/3
5	杯蓋	〃	①(13.0) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、密 C 良好 D 1/2
6	杯蓋	〃 灰原	①(12.5) ②3.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 青灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
7	杯身	焼成部最終床面	①11.3 ②4.5 ⑦13.6	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D ほぼ完成
8	杯身	〃	①(11.4) ②3.8 ⑦(13.5)	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。底部中央に焼成前の穿孔あり。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C 良好 D 2/3
9	杯身	〃	①(11.0) ②4.1 ⑦(13.2)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
10	蓋	床面Ⅰ	①13.1 ②2.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D ほぼ完成
11	蓋	焼成部最終床面	①10.3 ②2.1	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
12	蓋	床面Ⅰ層	①7.0 ②2.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 完形
13	平瓶？	焼成部最終床面	①(3.0)	残存部外面カキ目、口縁端部から内面回転ナデ。	A 内外面 暗青灰色 B 細粒わずかに含む、密 C 良好 D 口縁部小片
14	高杯	〃	①(13.8) ②15.3 ⑦16.4 脚端径15.4	杯体部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ、3方向に2段の透かし（上段は貫通していない）があり、その間に2条の沈線が巡る。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
15	高杯	〃	①(10.9) ②14.6 脚端径(11.1)	杯体部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。杯部に1条、脚部中位に2条の沈線が巡り、その上下にカキ目が施されている。	A 内面 茶灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
16	高杯	〃	①11.4 ②13.9 脚端径10.9	杯体部外面回転ヘラ削り、内面灰かぶりの為調整不明、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。杯部に1条、脚部に2条の沈線が巡り、その上にカキ目が施されている。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
17	高杯	〃	脚端径13.5	脚部内外面回転ナデ。脚中位に2条の沈線が巡り、その上下にカキ目が施されている。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 脚部のみ残存
18	高杯	〃	①10.8	杯体部外面回転ヘラ削り後回転ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に1条の沈線が巡る。	A 内外面 暗黒灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
19	高杯	〃	①11.2	杯体部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。杯部に1条の沈線が巡り、その上下にカキ目が施されている。	A 内外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 杯部4/5
20	杯蓋	床面Ⅶ～Ⅷ	①13.4 ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁端部に刻み目が施されている。	A 内面 灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 2/3
21	杯蓋	床面Ⅶ	①(13.5) ②4.5	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
22	杯身	床面Ⅶ	①11.2 ②4.5 ⑦13.7	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 茶灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 4/5
23	杯蓋	床面Ⅵ～Ⅶ	①(13.5) ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 2/3
24	杯蓋	〃	①13.0 ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 青灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 2/3
25	杯蓋	〃	①12.4 ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 4/5
26	杯身	〃	①(11.7) ②3.3 ⑦(14.0)	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/4
27	杯身	〃	①(12.5) ⑦(14.7)	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/3
28	平瓶	〃	①6.4	口縁部外面回転ナデ、内面灰かぶりの為調整不明。口縁部下に1条の沈線が巡る。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 細粒わずかに含む、密 C 良好 D 口縁部1/3
29	短頸壺	〃	①(8.5) ②10.0 胴部最大径(14.6)	底部外面回転ヘラ削り、内底面不定方向のナデ、他は回転ナデ。胴部に2条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 3/4
30	短頸壺	床面Ⅴ	①10.0 ②6.5 胴部最大径10.4	底部外面回転ヘラ削り、胴部回転ナデ、肩部カキ目、用面1/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 完形
31	杯身	床面Ⅱ～Ⅲ	①(12.6) ②3.7 ⑦(14.6)	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 1/2
32	甕	〃	①12.0	口縁部内外面回転ナデ。	A 内外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部1/3
33	杯蓋	床面Ⅰ～Ⅱ	①(12.0) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、粗 C やや良好 D 1/5
34	杯蓋	〃	①12.8 ②3.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
35	杯蓋	〃	①(12.0) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 1/4
36	杯蓋	床面Ⅳ～Ⅴ	①13.8 ②4.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、やや粗 C 不良 D 4/5
37	杯蓋	燃焼部	①(13.8) ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 緑灰色 外面 茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや不良 D 1/3
38	杯蓋	〃	①13.0 ②3.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面磨滅の為調整不明、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡灰色 外面 茶灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 不良 D 1/3
39	杯蓋	〃	①(12.8) ②(4.0)	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 1/3
40	杯蓋	〃	①(13.7) ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 青灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/3
41	杯蓋	〃	①13.0 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 2/3
42	杯蓋	焼成部	①13.0 ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
43	杯蓋	燃焼部	①(12.8) ②(4.1)	天井部外面回転ヘラ削り、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 緑灰色 外面 淡茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 2/5
44	杯蓋	〃	①12.7 ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
45	杯蓋	〃	①12.6 ②3.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
46	杯蓋	〃	①(12.1) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 2/5

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
47	杯身	燃焼部	①(13.1) ②4.5 ⑦(15.4)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡灰白色 外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 不良 D 2/3
48	杯身	〃	①11.2 ②4.1 ⑦13.8	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
49	椀	〃	①9.7 ②4.8 ⑧10.3	底部外面ヘラ切り未調整、一部回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡灰色 外面 淡灰白色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D 完形
50	椀	〃	①11.1 ②6.1	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下と体部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 1/2
51	高杯	燃焼部	①(11.3) ②15.2 脚端径12.0	杯底部回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。3方向に2段の透かしあり。杯部と脚部中位、下位に2条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 3/4
52	高杯	〃	①12.0 ②13.7 脚端径12.1	杯部内面灰かぶりの為調整不明、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ、3方向に2段の透かしあり。杯体部と脚部中位に2条、下位に1条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 2/3
53	高杯	西土坑	①(12.8) ②17.5 ⑦(15.4) 脚端径13.2	杯体部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。脚上位と下位に1条、中位に2条の沈線が巡る。2方向に2段の透かしあり。	A 内面 青灰色 外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 2/3
54	甕	焼成部最終床面	①(21.8)	口縁部内外面回転ナデ、胴部外面上位格子目叩きの後カキ目、下位格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 3/5
55	甕	〃	①(38.0)	口縁部外面連続斜線文を施し、その上に2条の沈線が巡る。他は回転ナデ。胴部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 口縁部から胴部にかけて1/2
56	甕	灰原	①(44.2)	口縁部外面連続斜線文を施し、その上位、中位、下位にそれぞれ2条の沈線が巡る、内面回転ナデ。胴部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部から胴部にかけて1/3
57	甕	〃	①(56.4)	口縁部外面2段の連続斜線文を施し、上段の連続斜線文の上に3条、下に4条、下段の連続斜線文の下に2条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 淡灰色 外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部から肩部にかけて1/5
58	杯蓋	〃	①(14.8) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡青灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 1/4
59	杯蓋	〃	①13.4 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。天井部中央に焼成前の穿孔あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 2/3
60	杯蓋	〃	①(13.4) ②(3.9)	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄灰色 B 細粒やや含む、粗 C 不良 D 1/3
61	杯蓋	灰原	①13.4 ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。天井部中央に焼成前の穿孔あり。	A 内面 淡茶灰色 外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
62	杯蓋	〃	①(13.0) ②3.6	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 暗茶灰色 外面 黒色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 1/3
63	杯蓋	〃	①(12.6) ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 1/2
64	杯蓋	〃	①(12.6) ②3.3	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 青灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 1/4
65	杯蓋	〃	①12.5 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 1/2
66	杯身	〃	①(12.6) ②4.1 ⑦(15.0)	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/4
67	杯身	〃	①11.8 ②4.0 ⑦14.0	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 4/5
68	杯身	〃	①11.5 ②4.0 ⑦13.9	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。底部に焼成後の穿孔あり。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 細粒やや含む、やや粗 C 不良 D ほぼ完形
69	杯身	〃	①(11.4) ②4.2 ⑦(13.8)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C 良好 D 1/2
70	杯身	〃	①(11.8) ②3.3 ⑦(13.8)	底部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、密 C 良好 D 2/3
71	杯身	〃	①10.9 ②3.8 ⑦13.3	底部から体部にかけて回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑦受部径 ⑧最大径 (cm)	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
72	杯身	灰原	①10.9 ②3.7 ⑦12.9	底部外面回転ヘラ削り、内面2/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 4/5
73	杯身	〃	①11.0 ②3.1 ⑦13.3	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
74	杯身	〃	①11.0 ②4.1 ⑦13.1	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや良好 D 4/5
75	蓋	〃	①(9.2) ②3.2 ③(2.2) ④0.6 ⑧(10.6)	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。外面灰かぶり。	A 内面 胴灰色 外面 灰色 B 細粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 1/2
76	壺	〃	①(11.2) ②11.4 胴部最大径(14.4)	外面頸部から胴部上位にかけてカキ目、中位から底部にかけて回転ヘラ削り、他は回転ナデ。口縁部から肩部にかけて灰かぶり。	A 内外面 胴灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 1/2
77	甕	〃	①(12.0)	残存部内外面回転ナデ。口縁部下端に2条、頸部に1条の沈線が巡る。	A 内外面 淡茶褐色 B 砂粒多く含む、やや密 C 不良 D 口縁部から頸部にかけて1/2
78	甕	〃	①(19.6)	口縁部内外面回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 口縁部1/5
79	甕	〃	①(18.8)	口縁部内外面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D 口縁部から肩部にかけて1/3
80	手捏土器	〃	①(2.1) ②4.6 最大径3.5	内外面ナデ、口縁部に指おさえの様な痕がある。	A 内外面 淡褐色 B 細粒やや含む C やや良好 D 完形
81	甕	〃	①(42.0)	口縁部外面連続斜線文が施され、その上に1条、中位に2条、下に1条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 口縁部から肩部にかけて小片
82	甕	〃	①(21.0)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面カキ目の後平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 口縁部から肩部にかけて1/4
83	甕	〃	①(23.0)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面カキ目の後平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部小片
84	甕	〃	①(43.7)	口縁部外面連続斜線文が施され、その上に1条、中位に3条、下に2条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 口縁部から頸部にかけて小片
85	甕	〃	①(45.0)	口縁部外面連続斜線文が施され、その上に2条、中位に1条、下に3条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 口縁部から肩部にかけて1/3
86	甕	〃	①(49.8)	口縁部外面2段の連続斜線文が施され、その上に1条、中位に2条、下に2条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 暗黒灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部から肩部にかけて小片
87	甕	〃	①(48.0) 残存高90.0 胴部最大径(80.0)	口縁部外面連続斜線文が施され、その上に1条、中位に3条の沈線が巡る。内面回転ナデ。肩部外面格子目叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 胴灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 2/3

40地点（第30～35図）

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 ⑦受部径 (cm)	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
1	杯蓋	焼成部・燃焼部境	①13.0 ②4.5	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 完形
2	杯身	〃	①11.5 ②4.5 ⑦13.6	底部から体部にかけて外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D ほぼ完形
3	杯蓋	〃	①12.9 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
4	杯身	〃	①10.9 ②4.6 ⑦13.2	底部外面回転ヘラ削り、内面1/7不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや不良 D ほぼ完形
5	杯蓋	〃	①12.9 ②4.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒わずかに含む、やや粗 C やや不良 D 完形
6	杯身	〃	①11.3 ②4.9 ⑦13.6	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
7	杯蓋	〃	①12.7 ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑦受部径 ⑧最大径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
8	杯身	焼成部・燃焼部境	①11.6 ②3.8 ⑦13.7	底部外面ヘラ切り後ナデ、体部回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形
9	杯蓋	〃	①12.8 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや不良 D 完形
10	杯身	〃	①11.5 ②4.4 ⑦13.5	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡黄灰色 外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
11	杯蓋	〃	①12.7 ②3.5	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡黄灰色 外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D 完形
12	杯身	〃	①11.0 ②4.6 ⑦13.3	底部外面中央ヘラ切り、体部回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
13	杯蓋	〃	①13.2 ②4.3	天井部外面手持ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D 完形
14	杯身	〃	①11.6 ②4.6 ⑦13.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 不良 D 完形
15	杯蓋	〃	①12.8 ②4.2	天井部外面ヘラ切り未調整、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形
16	杯身	〃	①11.3 ②4.0 ⑦13.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡黄灰色 外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
17	杯蓋	〃	①12.6 ②4.5	天井部外面ヘラ切り未調整、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 細粒わずかに含む、やや密 C やや不良 D 完形
18	杯身	〃	①11.3 ②4.3 ⑦13.6	底部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形
19	杯蓋	〃	①12.4 ②4.3	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形
20	杯身	〃	①11.3 ②4.1 ⑦13.6	底部外面ヘラ切り未調整、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 完形
21	杯蓋	〃	①12.2 ②4.3	天井部外面ヘラ切り未調整、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 完形
22	杯身	〃	①10.8 ②3.6 ⑦13.2	底部外面ヘラ切り未調整、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D 完形
23	杯蓋	〃	①12.0 ②4.2	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 完形
24	杯身	〃	①10.9 ②4.0 ⑦13.2	底部外面ヘラ切り未調整、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
25	杯蓋	〃	①9.3 ②4.4 ③1.5 ④1.3 ⑧11.2	天井部外面カキ目、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
26	杯身	〃	①10.6 ②4.1	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
27	杯蓋	〃	①9.0 ②4.2 ③1.2 ④1.0 ⑧10.6	天井部外面カキ目、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 完形
28	杯身	〃	①10.4 ②5.0	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 黄褐色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 不良 D ほぼ完形
29	杯蓋	〃	①8.9 ②3.8 ③1.0 ④1.2 ⑧10.4	天井部外面カキ目、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
30	杯身	〃	①10.2 ②4.7	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に3条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
31	杯蓋	〃	①8.5 ②3.6 ③1.1 ④1.1 ⑧10.4	天井部外面カキ目、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
32	杯身	〃	①10.1 ②4.8	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に3条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、やや密 C 良好 D 完形

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑦受部径 ⑧最大径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
33	杯蓋	焼成部・燃焼部境	①8.2 ②3.6 ③0.9 ④1.1 ⑧10.2	天井部外面カキ目、内面1/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D ほぼ完形
34	杯身	〃	①9.3 ②4.7	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D 完形
35	杯蓋	〃	①9.5 ②3.0 ⑧11.2	天井部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 完形
36	杯身	〃	①10.8 ②4.4	底部外面手持ちヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 完形
37	杯蓋	〃	①8.2 ②3.1 ⑧10.4	天井部外面ヘラ切り未調整、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰白色 B 細粒やや含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
38	杯身	〃	①10.5 ②4.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ。口縁部下に3条の沈線が巡る。	A 内外面 灰白色 B 細粒やや含む、やや粗 C 不良 D 完形
39	杯蓋	本体埋土	①(13.3) ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面3/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D 1/2
40	杯蓋	最終床面	①12.8 ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 5/6
41	杯蓋	燃焼部最終床面	①12.8 ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰白色 B 砂粒多く含む、粗 C やや不良 D 5/6
42	杯蓋	〃	①12.4 ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 細粒やや含む、粗 C やや良好 D 2/3
43	杯蓋	本体埋土	①(12.3) ②4.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 3/4
44	杯蓋	焼成部・燃焼部境 最終床面	①11.8 ②4.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D ほぼ完形
45	杯蓋	本体埋土	①11.2 ②3.6	天井部外面回転ヘラ削り、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 完形
46	杯蓋	燃焼部最終床面	①9.5 ②4.2 ③1.1 ④1.2 ⑧11.1	天井部外面カキ目、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D ほぼ完形
47	杯蓋	燃焼部	①8.1 ②3.2 ③0.8 ④0.8 ⑧9.8	天井部外面1/3カキ目、2/3回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 3/4
48	杯身	本体埋土	①12.1 ②3.7 ⑦14.1	底部外面回転ヘラ削り、他は磨滅の為調整不明。底部中央に焼成後の穿孔あり。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 4/5
49	杯身	燃焼部最終床面	①(12.0) ②3.8 ⑦(14.0)	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや不良 D 1/2
50	杯身	〃	①11.3 ②4.3 ⑦13.7	底部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 細粒やや含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
51	杯身	本体埋土	①9.4 ②3.7 ⑦11.8	底部外面回転ヘラ削り、内面4/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 完形
52	杯身	焼成部・燃焼部境	①9.8 ②3.3 ⑦11.6	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D ほぼ完形
53	椀	燃焼部最終床面	①11.6 ②5.5	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 4/5
54	杯	〃	①11.8 ②4.1	底部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 2/3
55	杯	〃	①10.8 ②4.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや不良 D ほぼ完形
56	杯	〃	①10.3 ②4.9	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
57	杯	〃	①9.9 ②4.7	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下に2条の沈線が巡る。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 5/6

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑦受部径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
58	高杯	本体埋土	①(11.2) ②12.7 脚端径(8.6)	杯体部回転ヘラ削り、内面不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ、脚部に2条の沈線が巡る。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D 1/2
59	高杯	本体埋土 燃焼部最終床面	脚端径(10.8)	脚部内外回転ナデ。裾部に1条の沈線が巡る。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや不良 D 脚部1/3
60	蓋	〃	①8.5 ②2.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰白色 B 砂粒わずかに含む、密 C 不良 D 4/5
61	蓋	燃焼部	①8.8 ②2.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C 良好 D 3/4
62	蓋	本体埋土 燃焼部	①7.6 ②2.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面5/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰白色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 完形
63	蓋	焼成部・燃焼成部境	①7.6 ②2.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面5/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
64	蓋	本体埋土	①6.8 ②3.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D ほぼ完形
65	蓋	燃焼部最終床面	①6.8 ②3.0	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 細粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 2/3
66	杯身	焼成部・燃成部境	①10.7 ②4.5	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰白色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
67	椀	本体埋土 最終床面	①11.9 ②7.6	底部外面ヘラ切り後不定方向のナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。体部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
68	椀	本体埋土 燃焼部最終床面	①13.0 ②8.5	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。口縁部下と体部に2条の沈線が巡る。	A 内外面 灰白色 B 細粒やや含む、やや粗 C 不良 D 2/3
69	壺	〃	①10.6 ②8.4 胴部最大径12.4	底部外面ヘラ切り後ヘラ状のものでナデ、内底面不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 5/6
70	平瓶	焼成部・燃成部境	①(7.2) ②12.7 胴部最大径14.7	口縁部内外面回転ナデ、胴部外面上位カキ目、下位回転ヘラ削り。口縁部に2条の沈線が巡る。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D ほぼ完形
71	甕	本体埋土 燃焼部最終床面	①(45.8)	口縁部外面連続斜線文を施しその上に4条、下に3条の沈線が巡る。口縁端部と連続斜線文の下端の沈線に円形の浮文が付いている。他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 口縁部小片
72	甕	本体埋土	①(52.4)	口縁部内外面回転ナデ、外面に6条の沈線が巡る。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや良好 D 口縁部小片
73	甕	燃焼部最終床面		口縁部外面2段の連続斜線文を施し、その上に1条、下にそれぞれ2条の沈線が巡る。内面回転ナデ。口縁端部と連続斜線文の間の沈線に円形の浮文が付いている。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 口縁部小片
74	甕	本体埋土		口縁部外面連続斜線文を施しその上に1条、下に2条の沈線が巡る。他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 口縁部小片
75	杯蓋	灰原	①13.5 ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、密 C 不良 D 4/5
76	杯蓋	〃	①(12.6) ②4.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、1/3不定方向のナデ、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 淡明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 2/3
77	杯蓋	〃	①(12.3) ②3.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/3
78	杯蓋	〃	①(12.1) ②3.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 良好 D 2/3
89	杯身	〃	①12.5 ②4.3 ⑦14.5	底部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰白色 B 砂粒わずかに含む、密 C 不良 D ほぼ完形
80	杯身	〃	①12.8 ⑦14.6	口縁部内面回転ナデ、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 淡黄褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 1/3
81	杯身	〃	①11.0 ②4.2 ⑦13.0	底部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 不良 D 2/3
82	高杯	〃	脚端径(10.9)	杯体部下端回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D 2/5

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
83	高杯	灰原	脚端径(9.9)	残存部内外面磨滅の為調整不明。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、密 C 不良 D 脚部のみ残存
84	高杯	〃	脚端径(12.6)	脚部外面磨滅の為調整不明、内面回転ナデ。脚部中位に1条の沈線が巡る。	A 内外面 淡黄色 B 細粒わずかに含む、密 C 不良 D 脚部2/3
85	高杯	〃	脚端径(14.2)	脚部内外面磨滅の為調整不明。脚部中位に1条の沈線が巡る。	A 内外面 淡明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 脚部3/4
86	甕	〃	①13.8	口縁部内外面回転ナデ、頸部内面同心円文叩き。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 口縁部から頸部にかけて1/2
87	甕	〃	①(13.8)	口縁部内外面回転ナデ、口縁部に2条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 口縁部小片
88	甕	〃	①(22.8)	口縁部内外面回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D 口縁部1/4
89	甕	〃	①(17.9)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面平行叩きの後カキ目、内面同心円文叩き。頸部にヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 口縁部から肩部にかけて小片
90					

50地点（第36～40図）

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 (cm) ⑧最大径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
1	杯蓋	焼成部最終床面	①9.8 ②3.1 ⑧11.7	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。天井部中央に焼成後の穿孔あり。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D ほぼ完形
2	杯蓋	燃焼部埋土	①9.2 ②3.2 ⑧10.4	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 3/4
3	杯蓋	焼成部最終床面	①(8.6) ②3.1 ⑧(11.0)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 3/1
4	杯蓋	焼成部最終床面 燃焼部埋土	①9.2 ②3.0 ⑧11.0	天井部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 淡褐色 外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 1/2
5	杯蓋	焼成部最終床面	①8.9 ②3.2 ⑧11.1	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄灰色 外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
6	杯蓋	〃	①9.0 ②3.0 ⑧11.0	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
7	杯蓋	最初の床面	①(9.0) ②2.9 ⑧(11.0)	天井部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 1/3
8	杯蓋	焼成部最終床面	①8.6 ②2.7 ⑧10.8	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
9	杯蓋	焼成部	①(8.9) ⑧(10.9)	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 茶灰色 外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D 1/4
10	杯蓋	燃焼部最上層	①(9.3) ②3.0 ⑧(10.8)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面磨滅の為調整不明、他は回転ナデ。	A 内面 淡灰色 外面 淡茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 1/4
11	杯蓋	燃焼部最上層 燃焼部埋土	①8.8 ②(3.2) ⑧10.7	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D ほぼ完形
12	杯蓋	焼成部最終床面	①8.9 ②2.9 ⑧10.7	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D ほぼ完形
13	杯蓋	焼成部最終床面 燃焼部埋土	①8.9 ②3.2 ⑧10.8	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D ほぼ完形
14	杯蓋	焼成部最終床面	①(8.7) ②3.3 ⑧(10.7)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄灰色 外面 黄褐色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C やや良好 D 1/2
15	杯蓋	燃焼部埋土	①8.8 ②3.2 ⑧10.6	天井部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗茶灰色 外面 茶褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑧最大径	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
16	杯蓋	床面間	①8.9 ②3.4 ⑧10.5	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 茶灰色 外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
17	杯蓋	燃焼部	①(8.9) ②2.9 ⑧(10.4)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 1/2
18	杯蓋	燃焼部埋土	①8.6 ②2.5 ⑧10.5	天井部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。天井部中央穿孔あり。ヘラ記号あり。	A 内外面 明橙色 B 細粒わずかに含む、やや密 C 不良 D 4/5
19	杯蓋	燃焼部	①8.4 ②3.0 ⑧10.2	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D ほぼ完形
20	杯蓋	燃焼部埋土	①(8.2) ②2.7 ⑧(9.8)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 1/2
21	杯蓋	床面間	①8.7 ②3.8 ③1.4 ④1.1 ⑧10.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 4/5
22	杯蓋	焼成部最終床面	①8.4 ②3.5 ③1.4 ④1.0 ⑧10.6	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D 完形
23	杯蓋	焼成部床面間	①7.9 ②3.3 ③1.1 ④0.9 ⑧10.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 細粒わずかに含む、やや密 C やや良好 D 完形
24	杯蓋	燃焼部埋土	①7.9 ②3.3 ③1.1 ④1.0 ⑧10.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面4/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄褐色 外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D 5/6
25	杯蓋	燃焼部最上層	①8.3 ②2.9 ③1.3 ④0.9 ⑧10.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面とつまみ部は磨滅の為調整不明、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 5/6
26	杯蓋	燃焼部 燃焼部埋土	①7.9 ②3.4 ③1.1 ④0.9 ⑧9.9	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
27	杯蓋	焼成部最終床面	①7.9 ②3.4 ③1.2 ④1.0 ⑧9.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
28	杯蓋	〃	①7.8 ②3.4 ③1.1 ④0.8 ⑧9.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 淡茶灰色 外面 淡褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 完形
29	杯蓋	燃焼部最上層	①7.8 ②2.9 ③1.0 ④0.8 ⑧9.5	天井部外面回転ヘラ削り、内面不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 灰色 外面 灰褐色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 完形
30	杯蓋	〃	①7.2 ⑧9.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 茶褐色 外面 暗茶褐色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D ほぼ完形
31	杯蓋	燃焼部最上層	①7.5 ②2.1 ⑧9.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明茶褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 2/3
32	杯身	燃焼部最上層 燃焼部埋土	①11.8 ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 2/3
33	杯身	焼成部最終床面	①10.8 ②3.6 ⑧11.1	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C やや不良 D ほぼ完形
34	杯身	〃	①(10.7)	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 1/4
35	杯身	燃焼部埋土	①(10.6) ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄褐色 外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D 1/2
36	杯身	焼成部	①(10.5) ②3.0	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 1/4
37	杯身	〃	①10.4 ②3.6	底部外面ヘラ切り末調整、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 2/3
38	杯身	燃焼部埋土	①(10.5) ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 明褐色 外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 1/2
39	杯身	〃	①(10.5) ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 1/3
40	杯身	焼成部最終床面	①10.4 ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 黄褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
41	杯身	焼成部最終床面	①10.4 ②3.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄灰色 外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C やや不良 D 2/3
42	杯身	燃焼部埋土	①10.3 ②3.5	底部外面ヘラ切り未調整、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 3/4
43	杯身	焼成部最終床面	①10.0 ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 3/4
44	杯身	燃焼部 燃焼部最上層	①10.1 ②3.6	底部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 灰褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 2/3
45	杯身	焼成部最終床面	①10.1 ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。外面黒斑あり。	A 内外面 明褐色 B 細粒わずかに含む、やや密 C やや良好 D ほぼ完形
46	杯身	焼成部	①(10.0) ②3.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 2/3
47	杯身	燃焼部埋土	①(10.0) ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 灰色 外面 黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 1/2
48	杯身	焼成部	①10.0 ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄灰色 外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
49	杯身	焼成部床面	①9.6 ②3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 暗褐色 外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 完形
50	杯身	燃焼部最上層	①9.5 ②2.7	底部外面ヘラ切り未調整、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 5/6
51	杯身	〃	①(9.4) ②3.1	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 1/3
52	杯身	焼成部最終床面	①9.5 ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 完形
53	杯身	焼成部床面間	①9.4 ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 細粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
54	杯身	焼成部最終床面	①9.3 ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黄灰色 外面 茶灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D ほぼ完形
55	杯身	燃焼部最上層 燃焼部埋土	①9.3 ②3.6	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 2/3
56	杯身	燃焼部最上層	①9.0 ②3.1	底部外面ヘラ切り未調整、内面3/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 褐色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 完形
57	杯身	床面間	①9.0 ②3.9	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや不良 D ほぼ完形
58	杯身	〃	①9.0 ②3.7	底部外面ヘラ切り未調整、内面3/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 完形
59	杯身	焼成部最終床面	①8.8 ②3.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 2/3
60	杯身	燃焼部最上層	①8.7 ②3.3	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 黄褐色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 不良 D ほぼ完形
61	蓋	焼成部最終床面	①6.7 ②2.3	天井部外面ヘラ切り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D ほぼ完形
62	蓋	燃焼部最初の床面	①(8.0) ②3.1	天井部外面ヘラ切り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 1/3
63	壺	焼成部最終床面	①(8.6) ②9.5 胴部最大径(11.0)	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。胴部上位に浅い沈線が3条巡り、下位に焼成後の穿孔あり。	A 内外面 明褐色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D 1/3
64	鉢	燃焼部最上層 燃焼部埋土	①13.8 ②8.8 最大径15.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明橙色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 1/2
65	平瓶	燃焼部最上層	①5.5 ②15.7 胴部最大径21.2	底部外面ナデ、胴部下位回転ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D ほぼ完形

遺物番号	器種	出土地点	法量 ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高 ⑧最大径 (cm)	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
66	鉢	焼成部最終床面	底径(16.0)	底部外面ヘラ削り、他は回転ナデ。	A 内外面 暗黒灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 底部1/4
67	杯蓋	燃焼部埋土	①9.7 ②1.7 ⑧11.8	天井部外面ヘラ切り後ナデ、他は磨滅の為調整不明。	A 内外面 黄褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 4/5
68	杯蓋	〃	①(10.7) ②2.2 ⑧(13.3)	天井部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡褐色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 1/2
69	杯蓋	燃焼部	①(10.5) ②2.7 ③2.1 ④1.0 ⑧(12.5)	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや良好 D 1/4
70	杯蓋	〃	①10.9 ②2.8 ③2.4 ④1.0 ⑧13.1	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 3/4
71	杯蓋	燃焼部埋土	①(13.1) ②3.2 ③2.3 ④1.3 ⑧(15.6)	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、つまみ部磨滅の為調整不明、他は回転ナデ。	A 内面 黄灰色 外面 淡灰白色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 不良 D 1/2
72	杯身	燃焼部	①12.3 ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C やや不良 D 3/4
73	杯身	〃	①(11.0) ②3.8 ⑤7.5 ⑥0.9	底部外面ヘラ切り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 黄褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D 1/4
74	杯身	燃焼部直下	①(12.6) ②4.6 ⑤(9.1) ⑥1.2	底部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 2/3
75	杯蓋	灰原	①9.3 ②3.4 ⑧11.4	天井部外面ヘラ切り未調整、他は灰かぶりの為調整不明。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 3/4
76	杯蓋	〃	①(9.5) ②2.6 ⑧(11.2)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 紫灰色 外面 暗灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良好 D 1/2
77	杯蓋	〃	①8.6 ②3.1 ⑧10.8	天井部外面ヘラ切り未調整、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 暗灰色 外面 淡灰色 B 砂粒多く含む、密 C 良好 D 3/4
78	杯蓋	〃	①(8.8) ②2.9 ⑧(10.8)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。外面灰かぶり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/2
79	杯蓋	〃	①8.8 ②2.5 ⑧10.7	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 黒色 外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 完形
80	杯蓋	〃	①(8.9) ②3.0 ⑧(10.6)	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 灰色 外面 暗灰色 B 砂粒多く含む、粗 C 良好 D 1/4
81	杯蓋	〃	①(8.8) ②1.5 ③1.3 ④1.0 ⑧(10.4)	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 黒色 外面 灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 1/5
82	杯蓋	〃	①7.9 ②2.9 ③1.3 ④1.0 ⑧9.7	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は灰かぶりの為調整不明。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 4/5
83	杯蓋	〃	①7.4 ②3.1 ③1.1 ④0.9 ⑧9.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 3/4
84	杯蓋	〃	①7.2 ②2.9 ③1.3 ④1.0 ⑧9.3	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 明褐色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
85	杯蓋	〃	①(7.2) ②2.9 ③1.0 ④0.8 ⑧(9.0)	天井部外面回転ヘラ削り、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C 良好 D 1/2
86	杯蓋	〃	①6.8 ②2.0 ⑧8.8	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D ほぼ完形（つまみ部欠損）
87	杯身	〃	①(11.0) ②3.5	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 緑灰色 外面 茶灰色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや不良 D 1/3
88	杯身	〃	①11.0 ②3.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 緑灰色 外面 褐色 B 砂粒多く含む、粗 C やや良好 D 完形
89	杯身	〃	①10.9 ②3.6	底部外面ヘラ切り未調整、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 茶灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C 不良 D 3/4
90	杯身	〃	①10.5 ②3.2	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗灰色 外面 褐色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
91	杯身	灰原	①(10.3) ②3.3	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 暗茶灰色 外面 茶灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 3/4
92	杯身	〃	①10.1 ②3.8	底部外面ヘラ切り未調整、内面3/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、粗 C やや良好 D 2/3
93	杯身	〃	①(9.8) ②3.8	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 暗灰色 外面 暗茶褐色 B 砂粒多く含む、やや粗 C やや良好 D 1/2
94	杯身	〃	①9.1 ②3.3	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 青灰色 外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
95	杯身	〃	①(8.9) ②3.4	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 灰褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや良好 D 2/3
96	杯身	〃	①(8.5) ②3.2	底部外面ヘラ切り後粗いナデ、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡茶灰色 B 砂粒やや含む、やや粗 C やや不良 D 1/2
97	高杯	〃	脚端径6.5	残存部内外面回転ナデ。	A 内外面 紫褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
98	高杯	〃	脚端径(6.0)	残存部内外面回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、やや密 C 良好 D 2/3
99	高杯	〃	脚端径6.6	残存部内外面回転ナデ。内外面に絞り痕あり。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒わずかに含む、密 C 良好 D 脚部のみ残存
100	高杯	〃	脚端径(5.4)	杯残存部外面回転ヘラ削り、内面1/6不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡茶灰色 B 細粒やや含む、やや密 C 不良 D 1/2
101	高杯	〃	脚端径(5.8) 残存高5.8	杯残存部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内面 明褐色 外面 淡褐色 B 砂粒やや含む、密 C やや良好 D 1/4
102	高杯	〃	脚端径8.9	残存部内外面回転ナデ。	A 内面 暗茶褐色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 脚部1/2
103	高杯	〃	脚端径(7.0)	杯残存部外面回転ヘラ削り、内面不定方向のナデ、脚部内外面回転ナデ。	A 内面 黒色 外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 1/3
104	高杯	〃	脚端径(6.4)	杯体部回転ヘラ削り、脚部外面回転ナデ、他は灰かぶりの為調整不明。	A 内外面 黒色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/3
105	平瓶	〃	①4.3	口縁部内外面回転ナデ。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部小片
106	?	〃	①(6.4)	口縁部内外面灰かぶりの為調整不明。	A 内面 灰色 外面 黒色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 口縁部2/3
107	?	〃	①7.7	残存部内外面回転ナデ。口縁部に1条の沈線が巡る。	A 内外面 暗青灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部2/3
108	?	〃	脚端径7.4 残存高6.5	杯内外面灰かぶりの為調整不明、内面1/4不定方向のナデ、他は回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。	A 内面 茶灰色 外面 暗茶灰色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 良好 D 1/3
109	短頸壺	〃	①8.5	残存部内外面回転ナデ。	A 内面 暗青灰色 外面 灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部小片
110	長頸壺	〃	①(10.0)	残存部内外面回転ナデ。口縁部上位と中位に3条の沈線が巡る。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 口縁部から頸部にかけて残存
111	甕	〃	①(11.4)	口縁部内外面回転ナデ、肩部内外面磨滅の為調整不明。	A 内外面 淡褐色 B 砂粒わずかに含む、やや密 C 不良 D 口縁部から肩部にかけて1/3
112	甕	〃	①(14.7)	残存部内外面回転ナデ。	A 内外面 淡灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C やや不良 D 口縁部から肩部にかけて1/4
113	甕	〃	①(19.1)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内面 紫灰色 外面 黒色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良好 D 口縁部から肩部にかけて小片
114	甕	〃	①(22.5)	口縁部内外面回転ナデ、肩部外面平行叩き、内面同心円文叩き。	A 内外面 明褐色 B 砂粒わずかに含む、密 C やや不良 D 口縁部から肩部にかけて小片
115	甕	〃		口縁部外面波状文を施し、その上下に2状の沈線が巡る。内面回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、密 C 良好 D 口縁部小片

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
116	甕	灰原		口縁部外面連続斜線文が施され、その上下に1条の沈線が巡る。内面回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒多く含む、粗 C やや不良 D 口縁部小片

34地点（第41図）

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
1	杯蓋	燃焼部	①13.0 ②4.0 ③2.6 ④1.0 ⑧16.0	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D ほぼ完形
2	杯蓋	灰原	①(13.2) ⑧(15.4)	天井部外面回転ヘラ削り、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 1/4
3	杯蓋	〃	①(12.8) ②15.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面1/2不定方向のナデ、一部磨滅の為調整不明、他は回転ナデ。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 不良 D 1/5
4	杯身	〃	①14.6 ②(4.7)	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。ヘラ記号あり。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 不良 D 3/4
5	?	〃	①(18.9)	体部外面ナデ、内面1/7不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C 良好 D 1/5

57地点（第41図）

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
6	杯蓋	灰原	①14.0 ②2.8 ③3.1 ④0.7 ⑧14.4	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 緑灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 2/3
7	杯蓋	〃	①(13.2) ②1.8 ③3.0 ④0.5	天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面4/5不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 灰色 B 砂粒やや多く含む、やや粗 C やや良好 D 1/2
8	杯蓋	〃	①10.8 ②1.8 ⑧11.2	天井部外面回転ヘラ削り、内面2/3不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 青灰色 外面 黒色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良好 D 5/6
9	杯身	〃	①(12.3) ②4.0 ⑤(7.8) ⑥0.6	底部外面灰かぶりの為調整不明、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 暗灰色 B 砂粒やや含む、やや密 C 良好 D 1/2
10	杯身	〃	①(13.9) ②4.9 ⑤(9.6) ⑥0.7	底部外面磨滅の為調整不明、内面1/2不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内外面 淡灰白色 外面 淡褐色 B 砂粒やや含む、やや密 C 不良 D 1/2
11	盤	〃	⑤(22.2) ⑥0.7	底部外面、体部下端回転ヘラ削り、内面不定方向のナデ、他は回転ナデ。	A 内面 灰色 黄褐色 B 砂粒やや多く含む、やや密 C 良好 D 底部のみ1/4

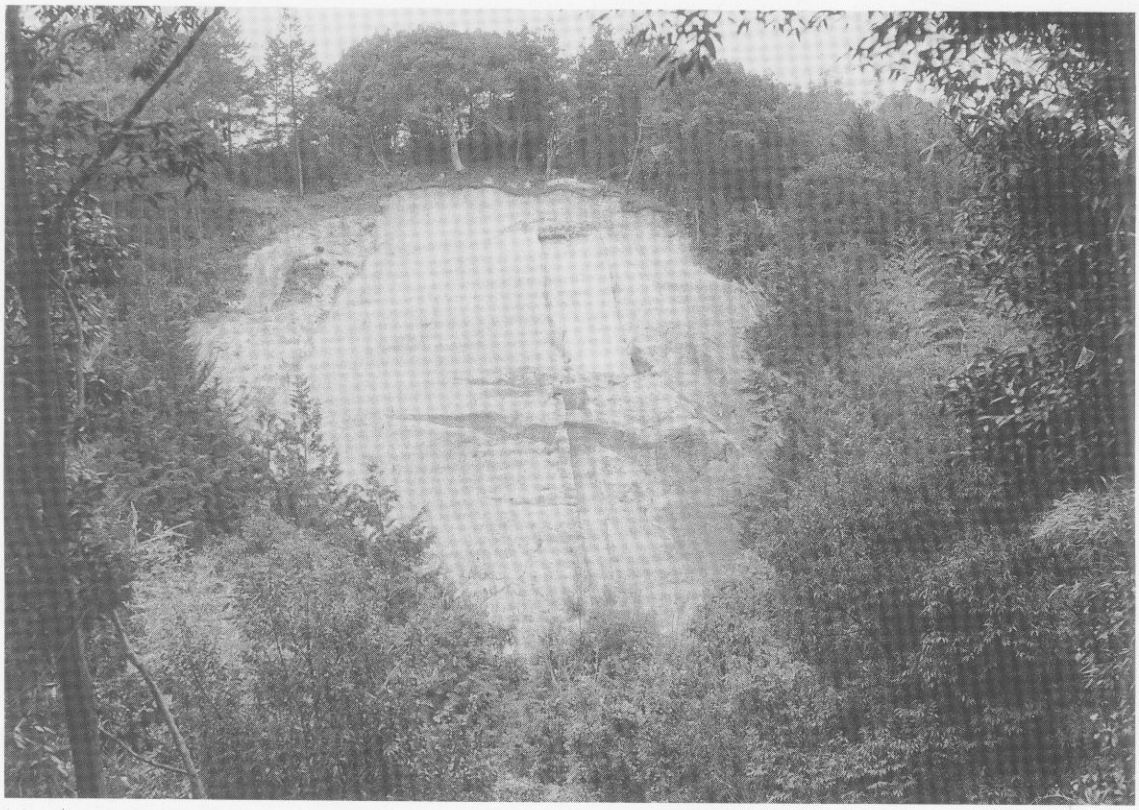
32地点（第41図）

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm) ①口径 ②器高	手法の特徴	備考 A色調 B胎土 C焼成 D残存
12	壺			口縁部内外面ヨコナデ。	A 内外面 淡黄灰色 B 砂粒やや含む C 良好 D 口縁部小片
13	?（弥生式土器）		底径6.0	残存部外面ハケ目、内面ナデ。	A 内外面 淡褐色 B 砂粒やや含む C 良好 D 底部1/4
14	?（弥生式土器）		底径7.4	残存部外面ハケ目、内面ナデ。	A 内面 淡黄褐色 外面 明褐色 B 砂粒やや含む C やや良好 D 底部から胴部にかけて1/4
15	?（弥生式土器）		底径(7.8)	残存部内外面磨滅の為調整不明、外面一部にハケ目が残る。	A 内面 淡黄褐色 外面 淡褐色 B 砂粒やや含む C 良好 D 底部小片
16	?（弥生式土器）		底径(10.0)	残存部内外面磨滅の為調整不明。	A 内面 灰色 外面 黄褐色 B 砂粒やや多く含む C やや良好 D 底部1/4

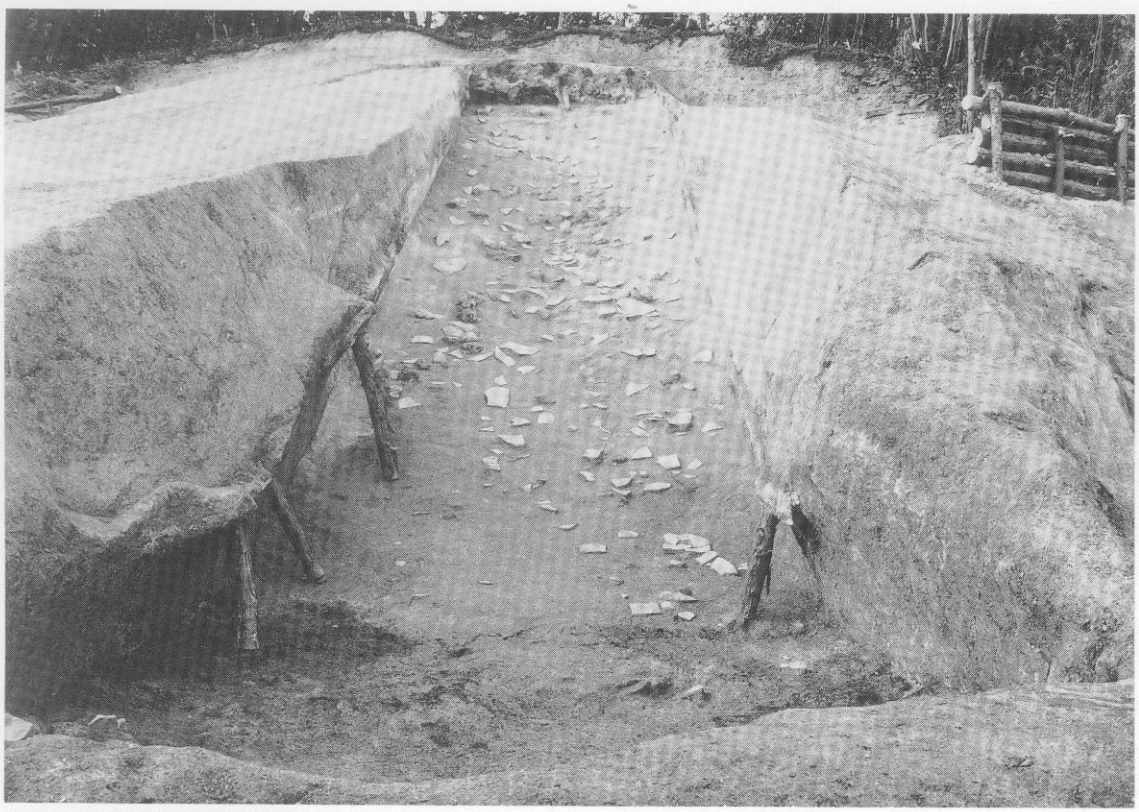
図　　版



(1)　33— I 号窯跡



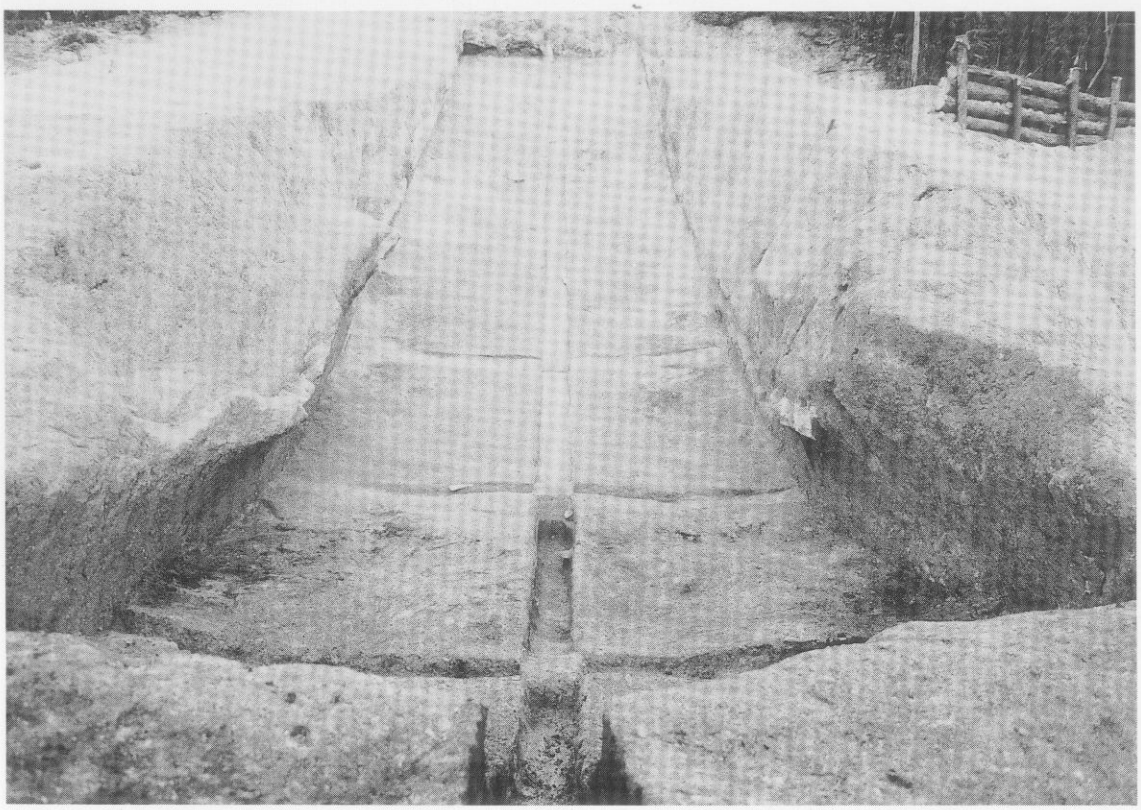
(2)　33— I 号窯跡遠景



(1)　33— I 号窯跡最終床面



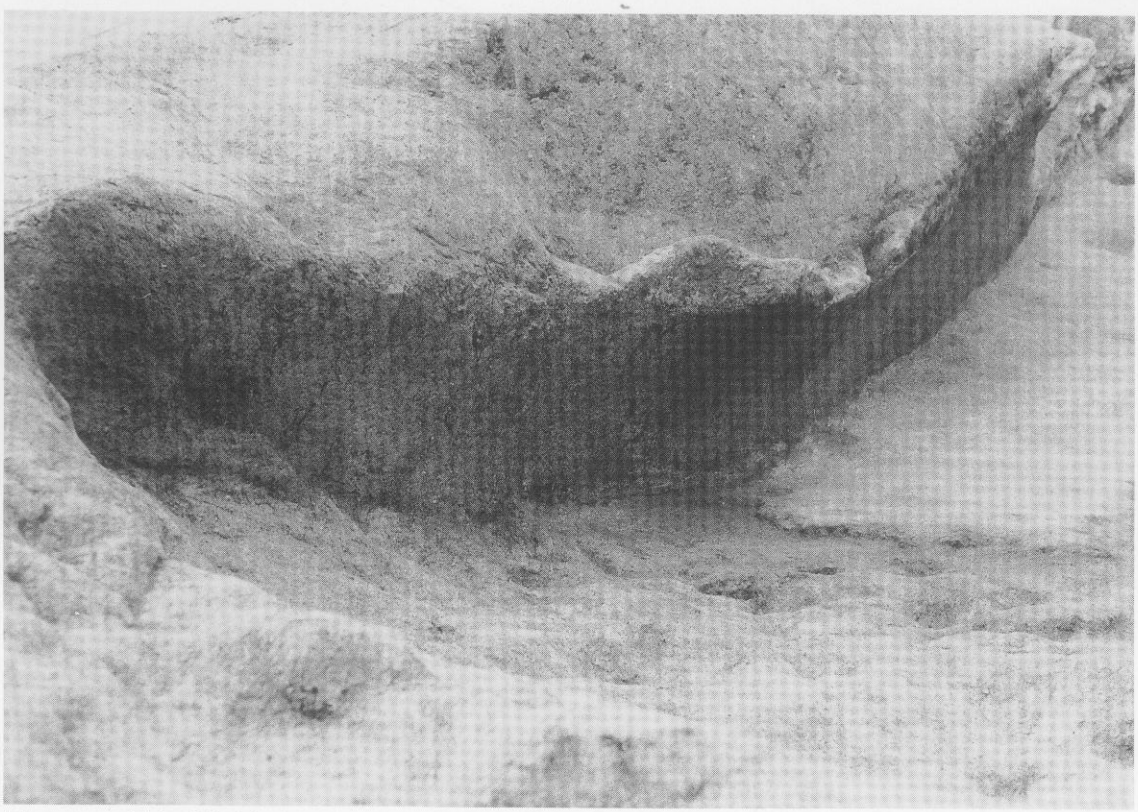
(2)　同上（煙道付近）



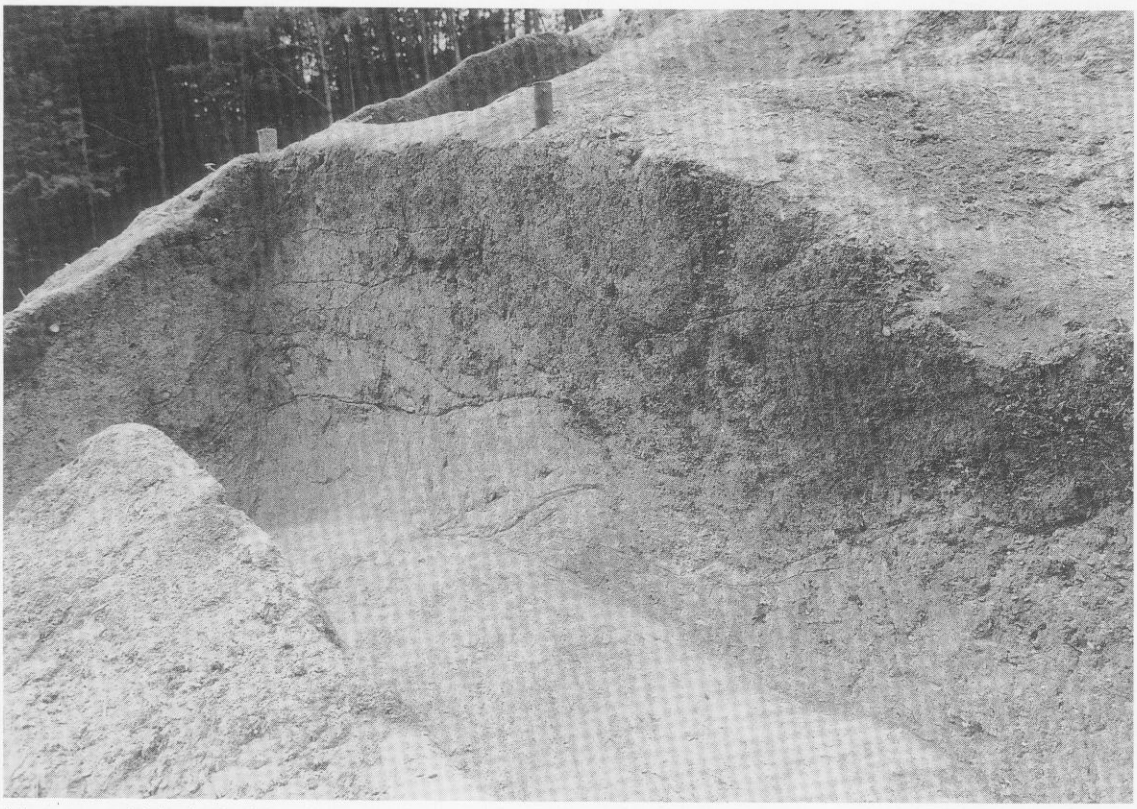
(1)　33— I 号窯跡たち割り状況



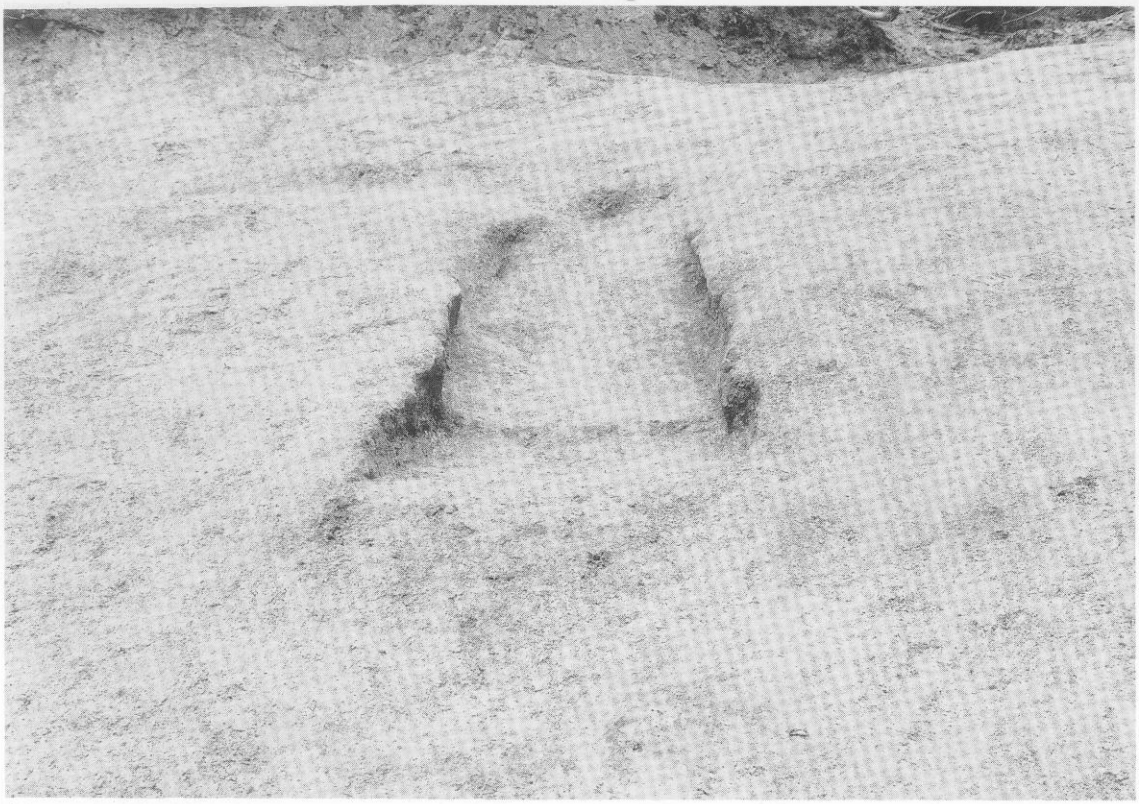
(2)　33— I 号窯跡煙道付近



(1)　33— I 号窯跡燃焼部左側壁



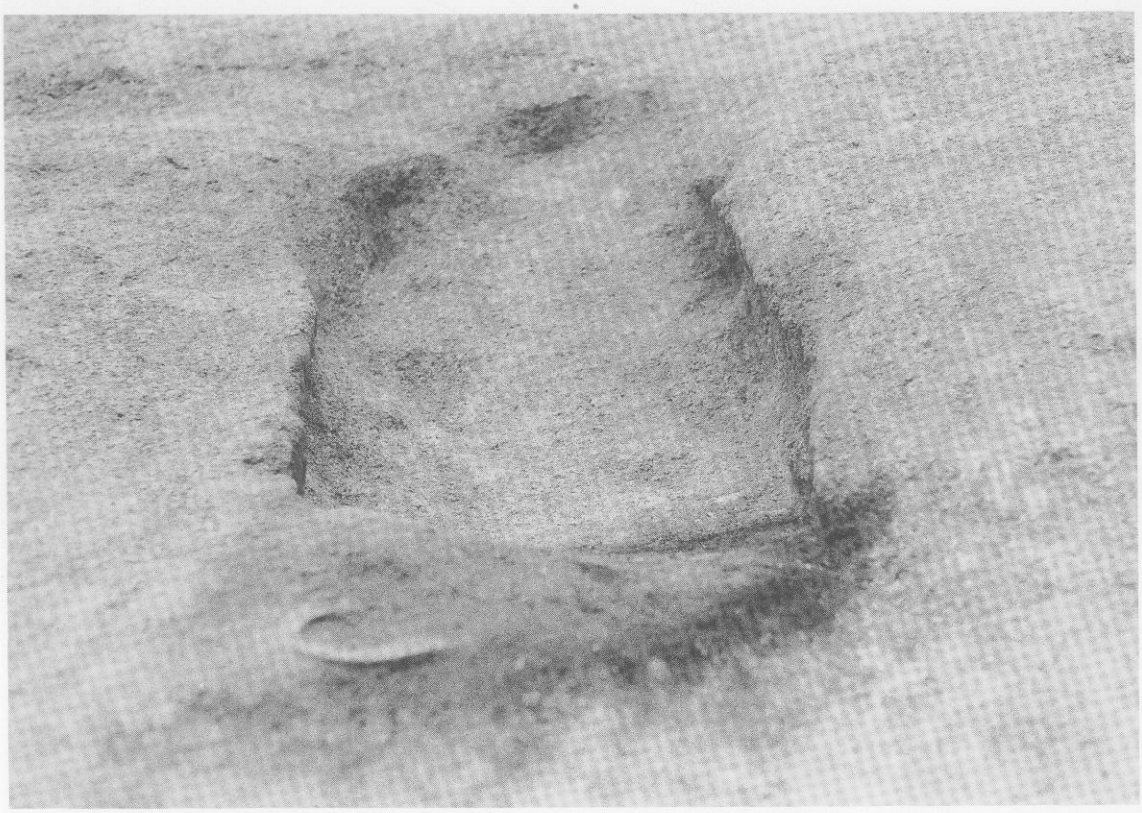
(2)　33— I 号窯跡灰原断面



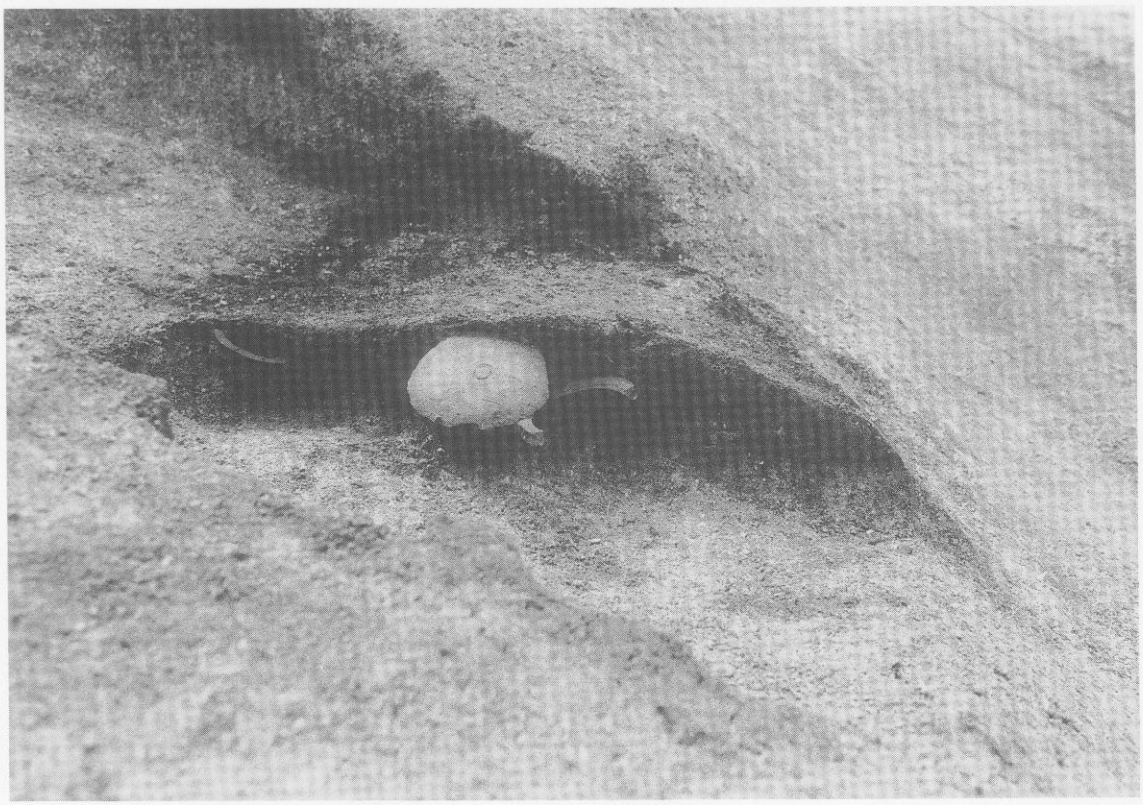
(1)　34— I 号窯跡



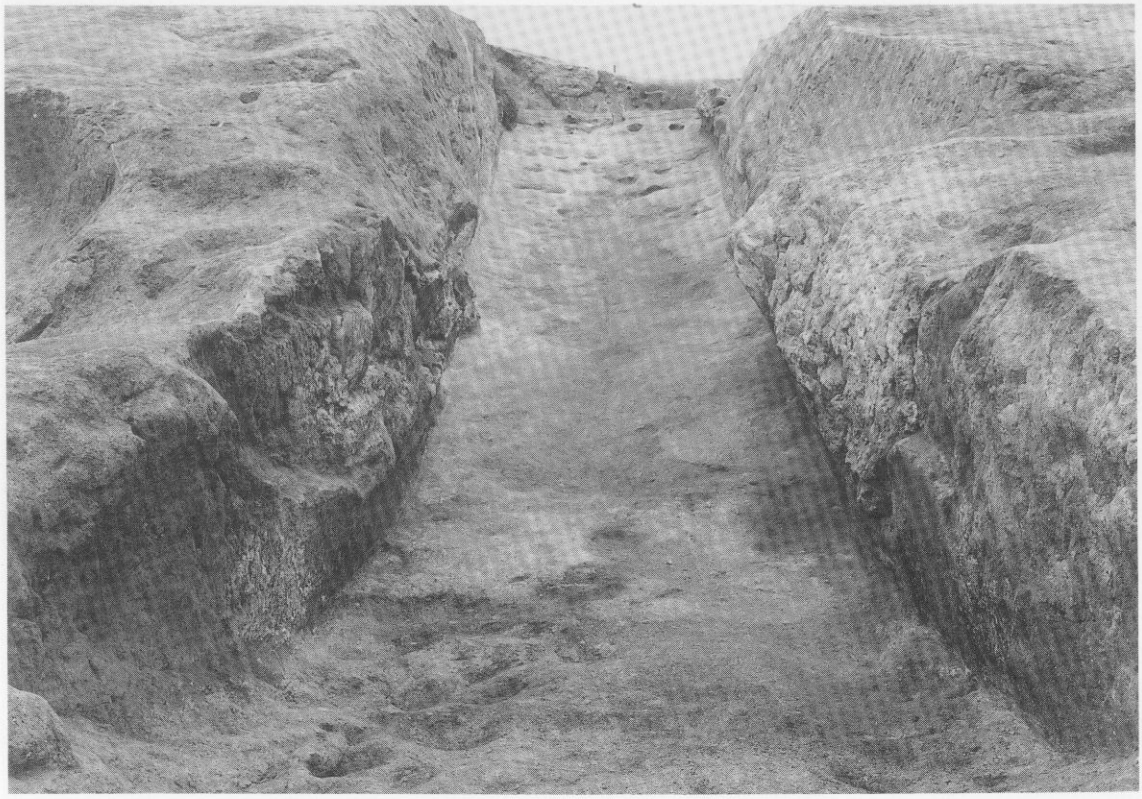
(2)　34— I 号窯跡遠景



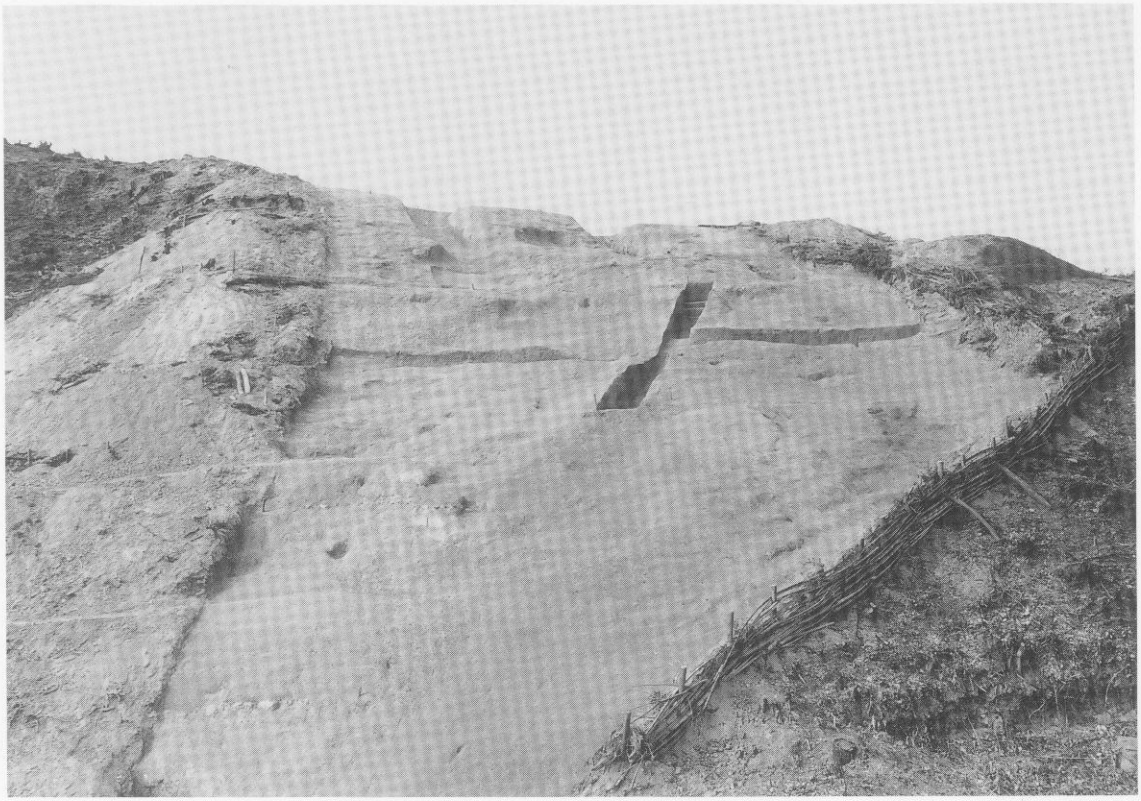
(1)　34— I 号窯跡最終床面



(2)　34— I 号窯跡燃焼部



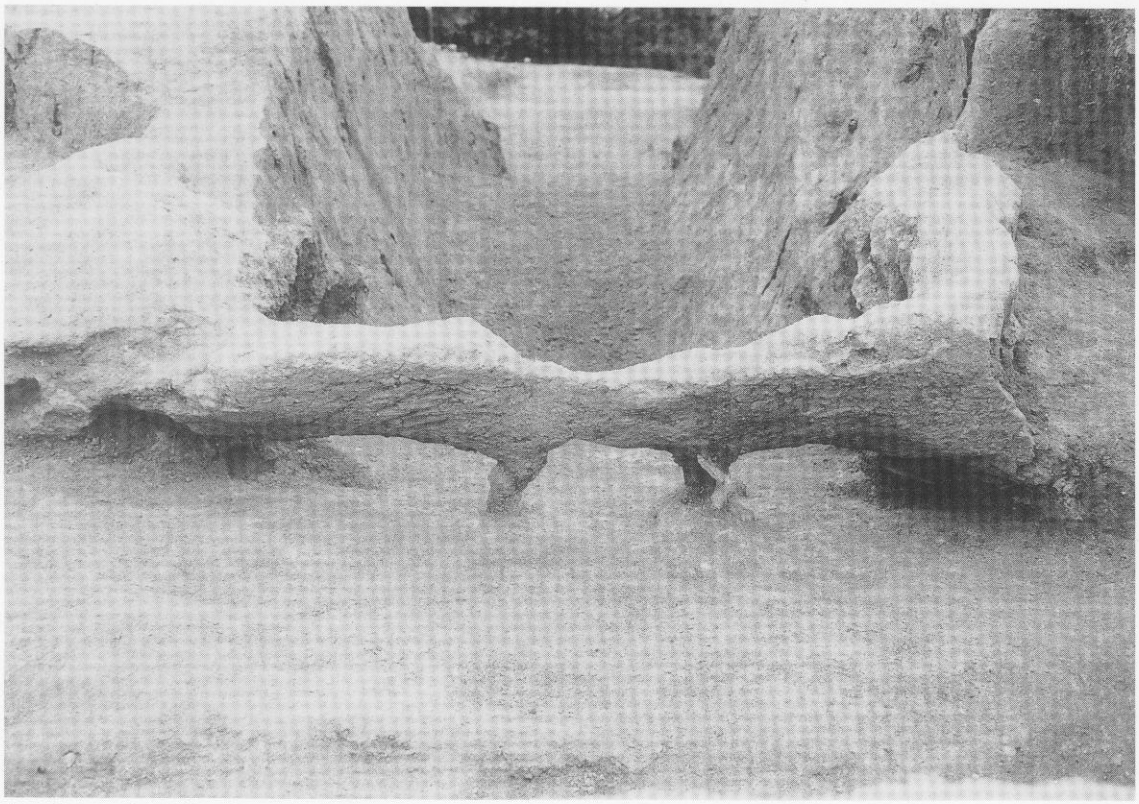
(1)　37— I 号窯跡



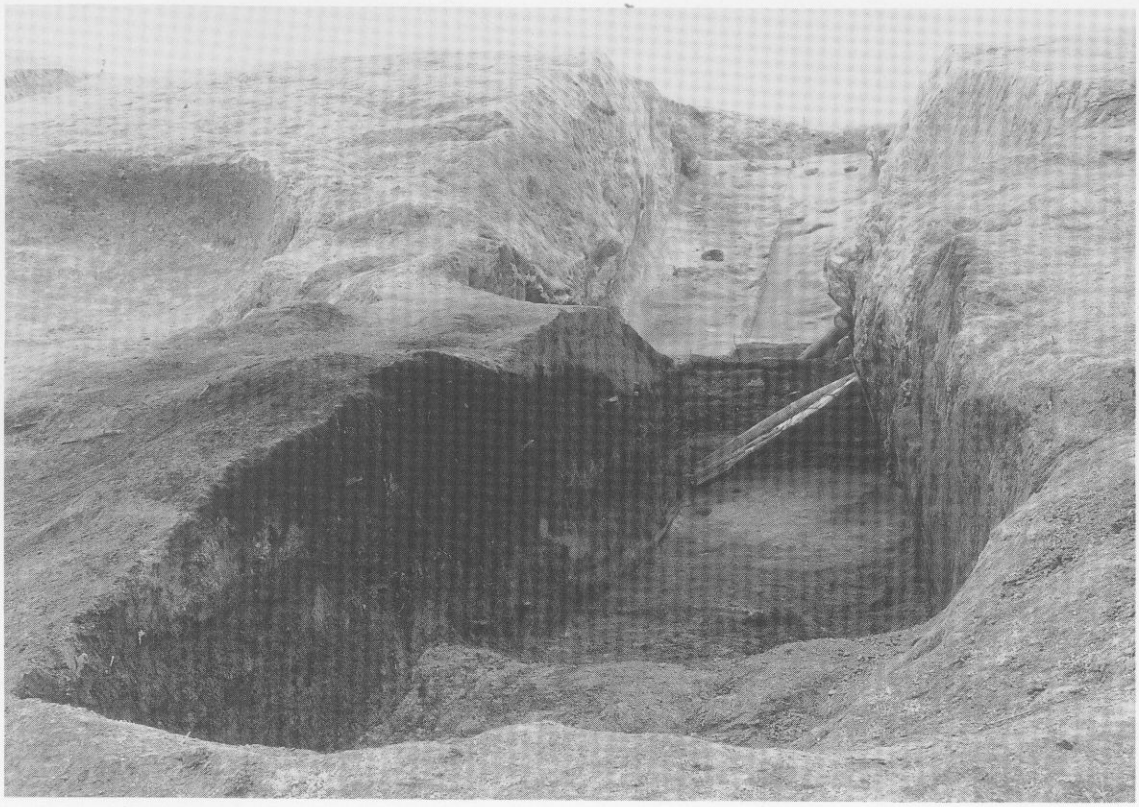
(2)　37地点全景



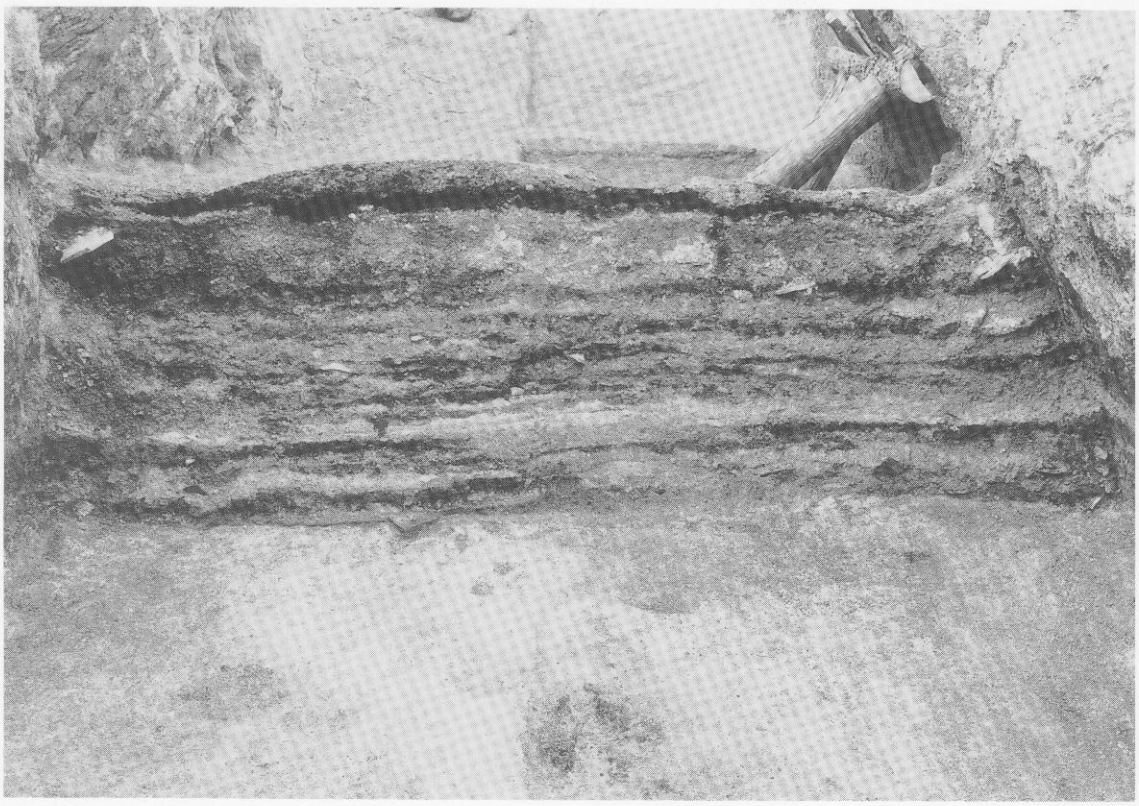
(1)　37— I 号窯跡最終床面



(2)　37— I 号窯跡煙道



(1)　37— I 号窯跡床断面



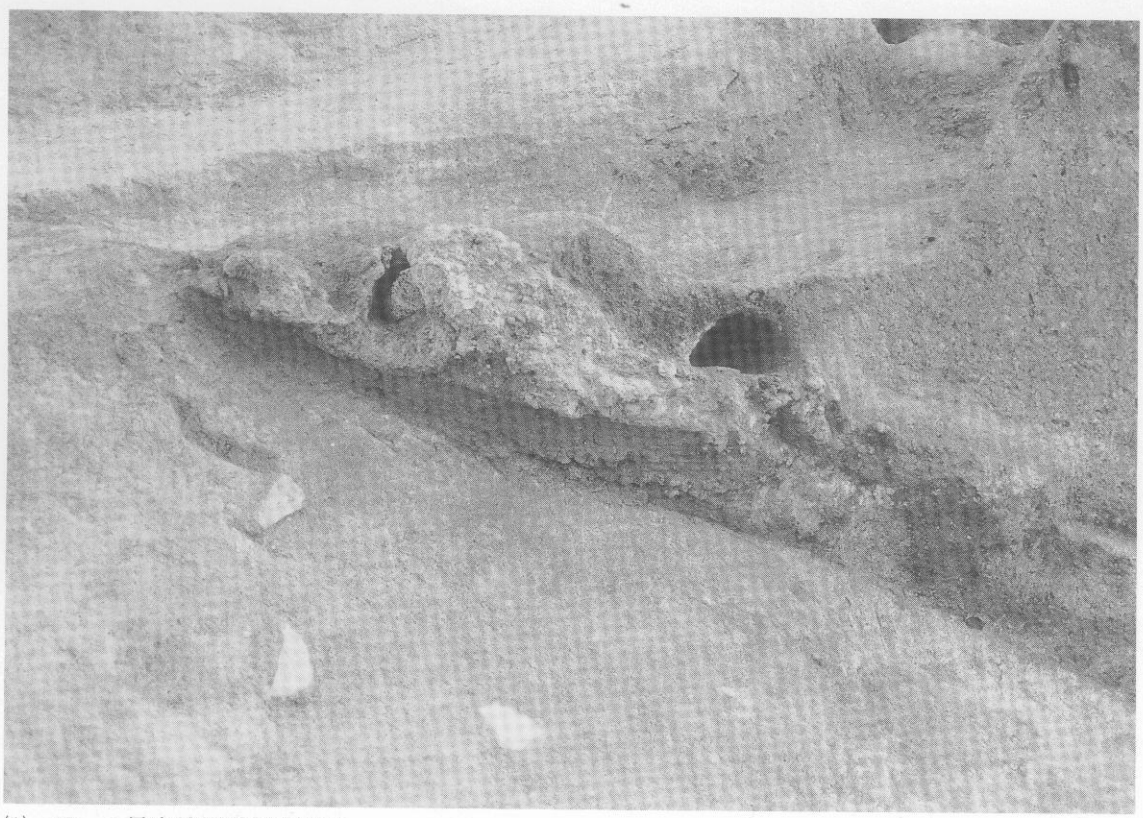
(2)　同上



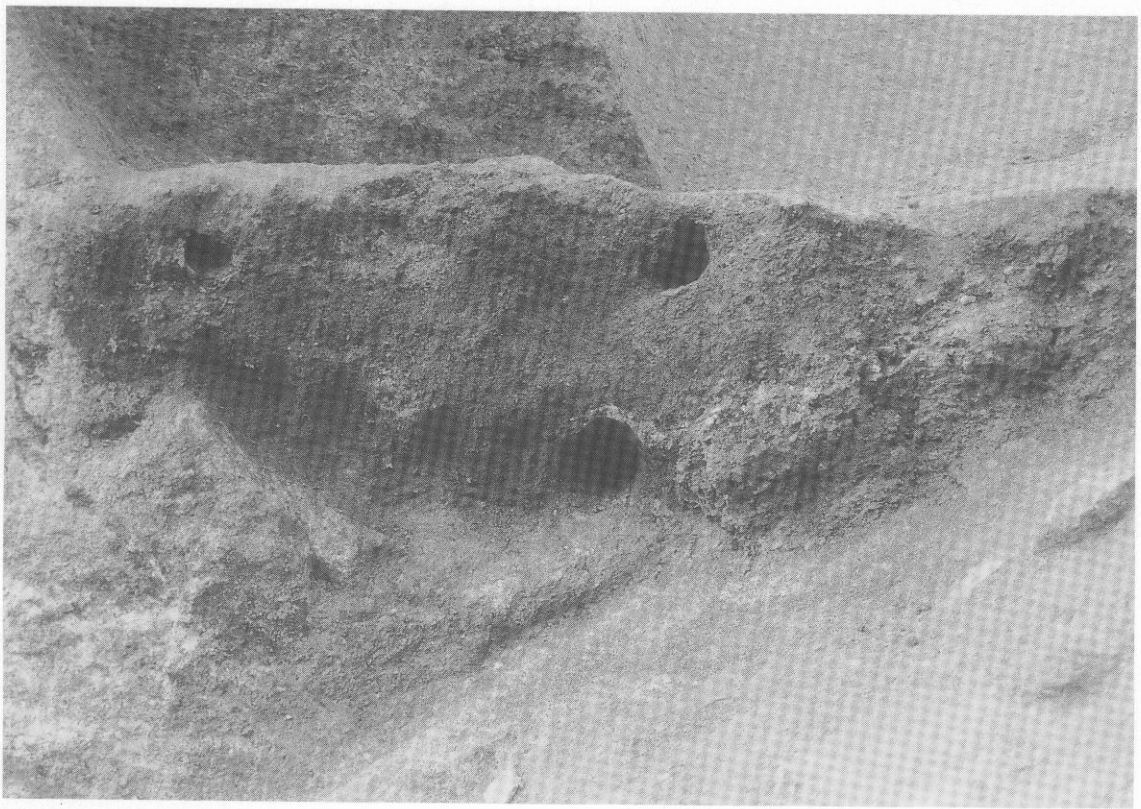
(1)　37—Ⅰ号窯跡煙出し・排水溝



(2)　37—Ⅰ号窯跡燃焼部周辺



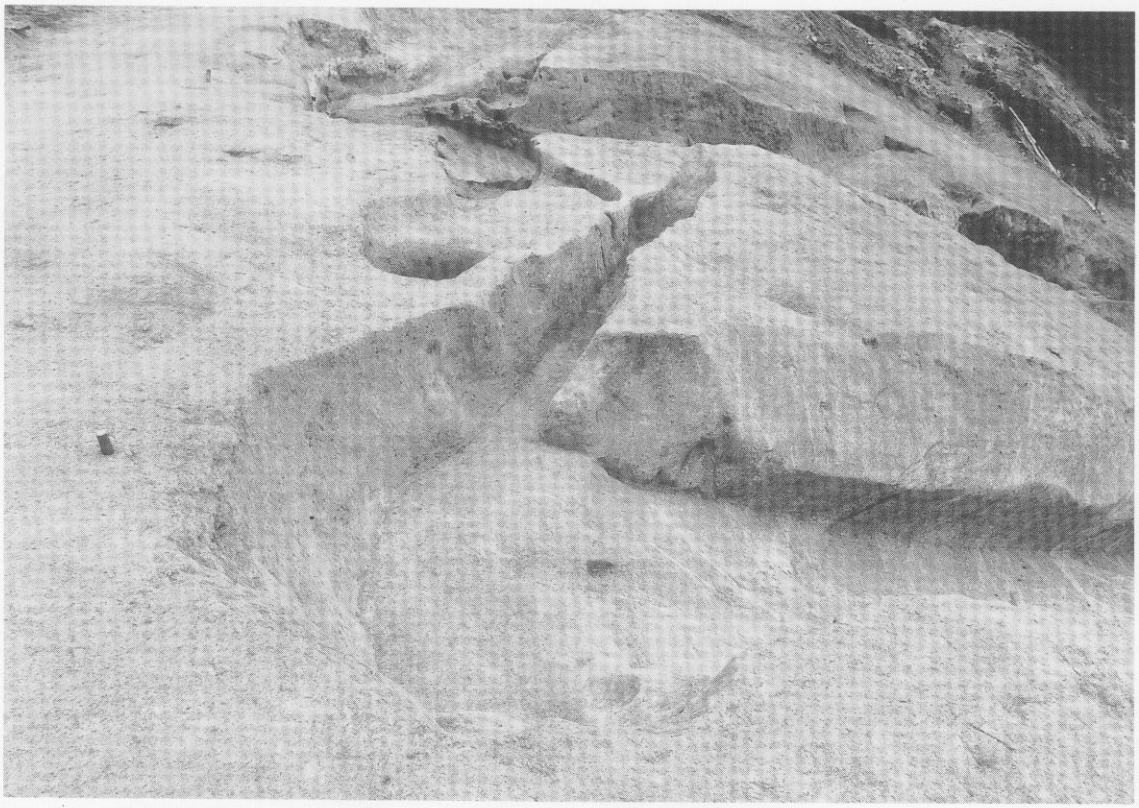
(1)　37— I 号窯跡煙道部右側壁



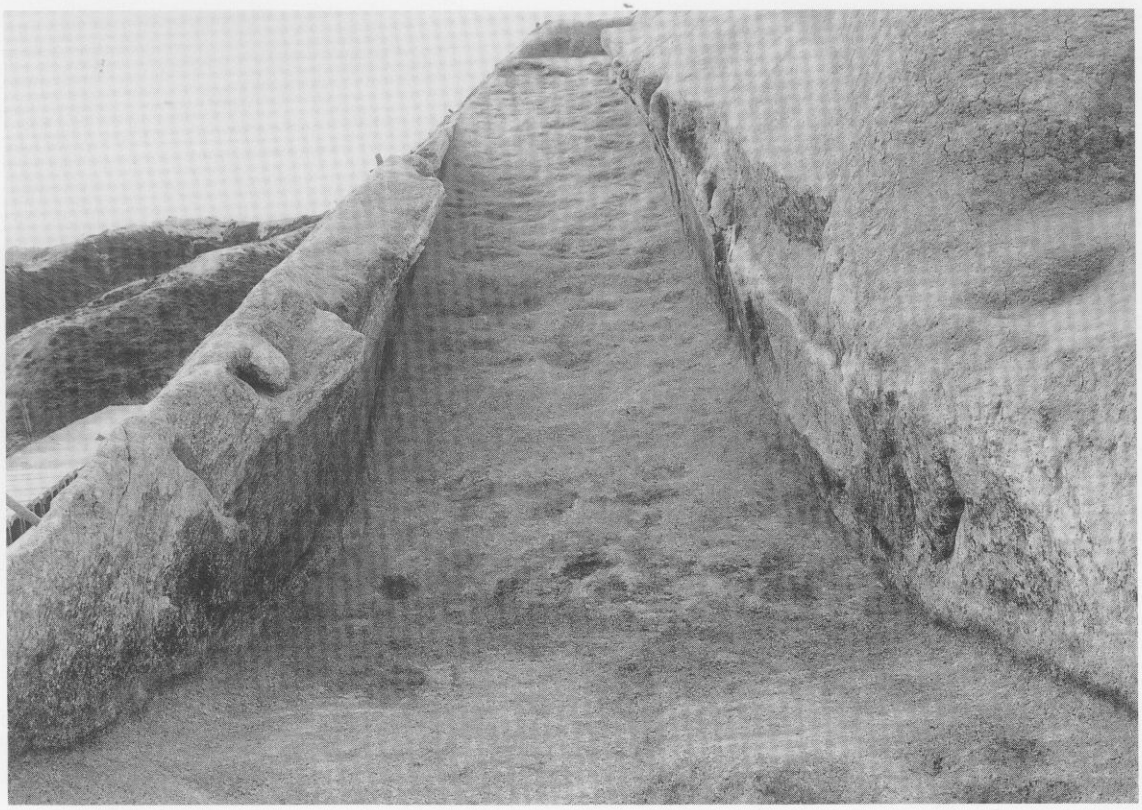
(2)　37— I 号窯跡煙道部左側壁



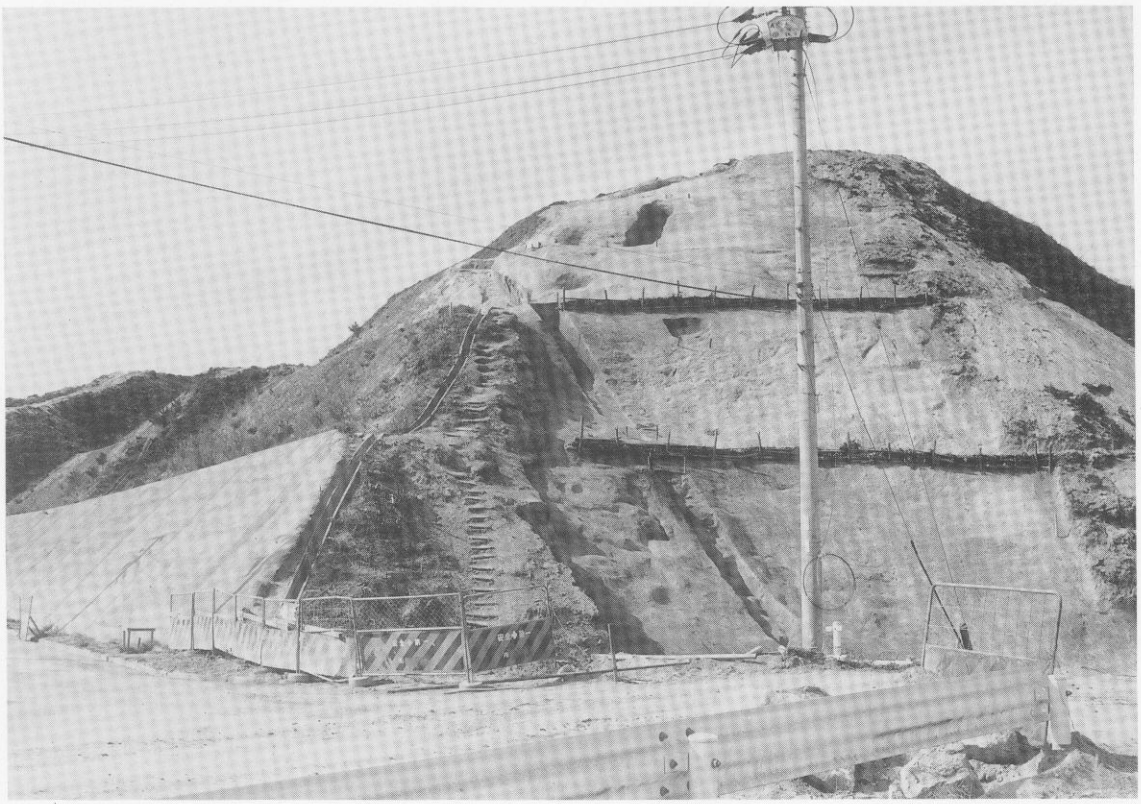
(1)　37—II号窯跡



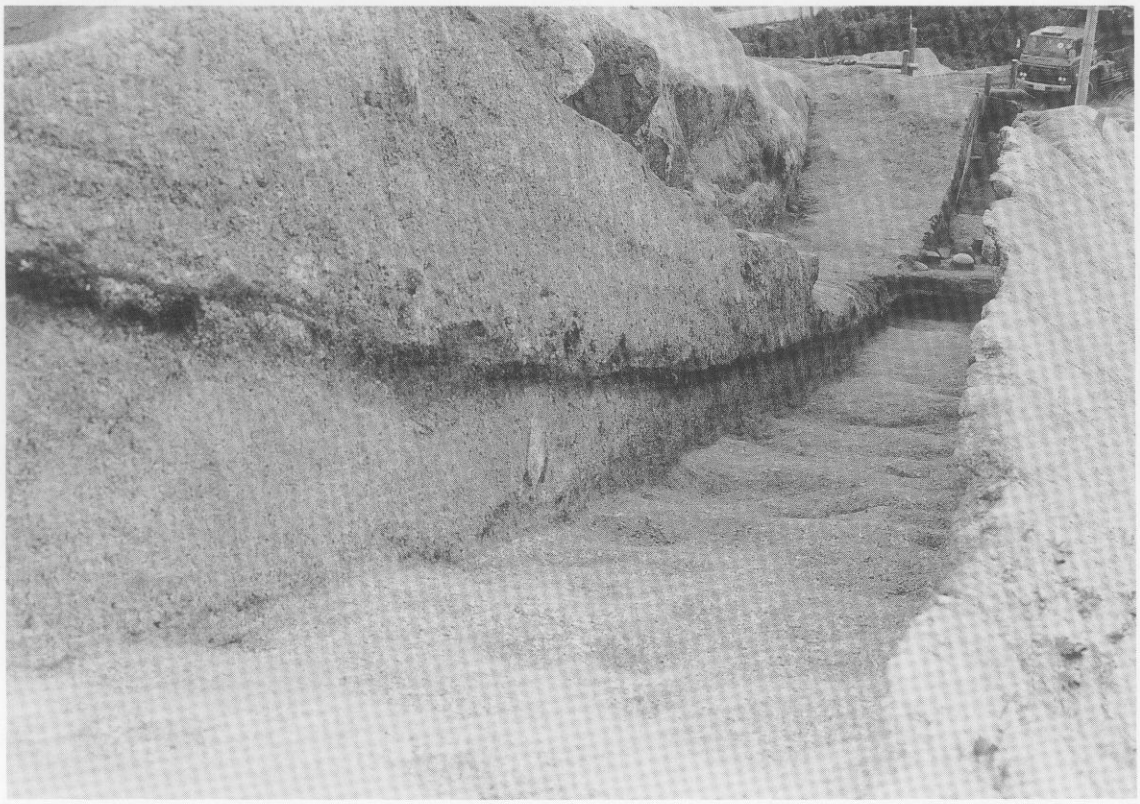
(2)　37—II号窯跡煙出し・排水溝



(1)　40—Ⅰ号窯跡



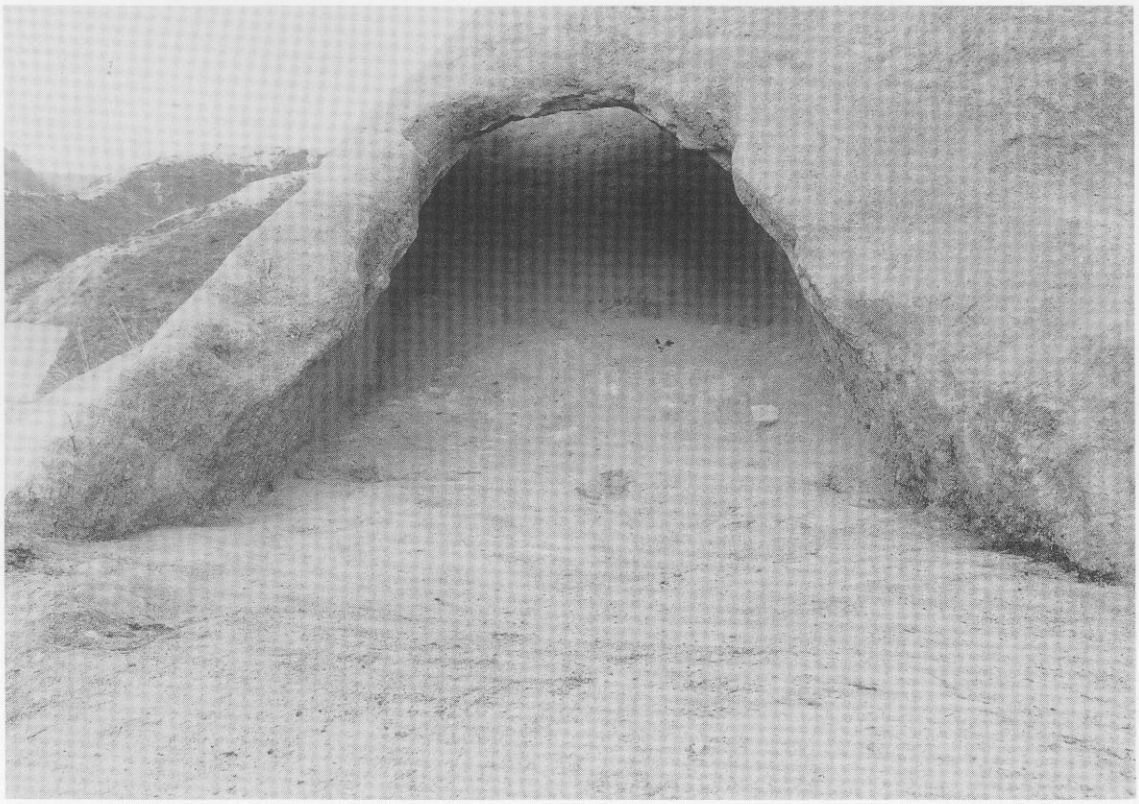
(2)　40—Ⅰ号窯跡遠景



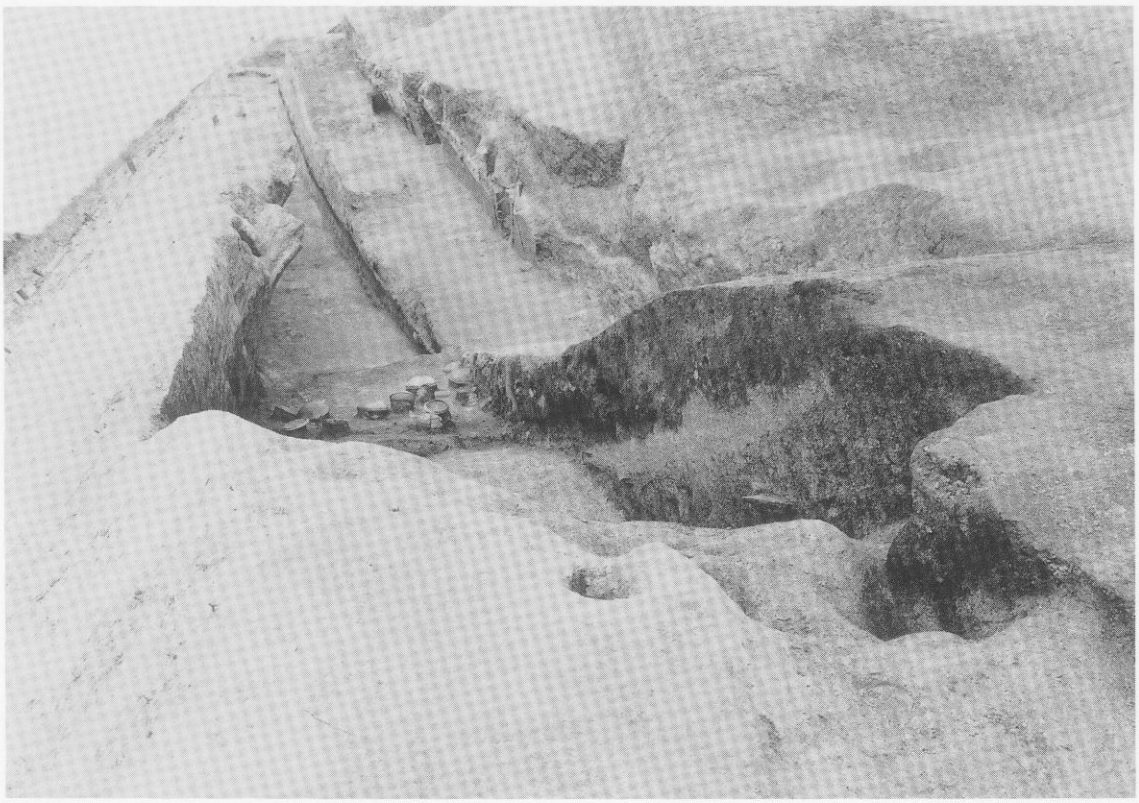
(1)　40—Ⅰ号窯跡床断面



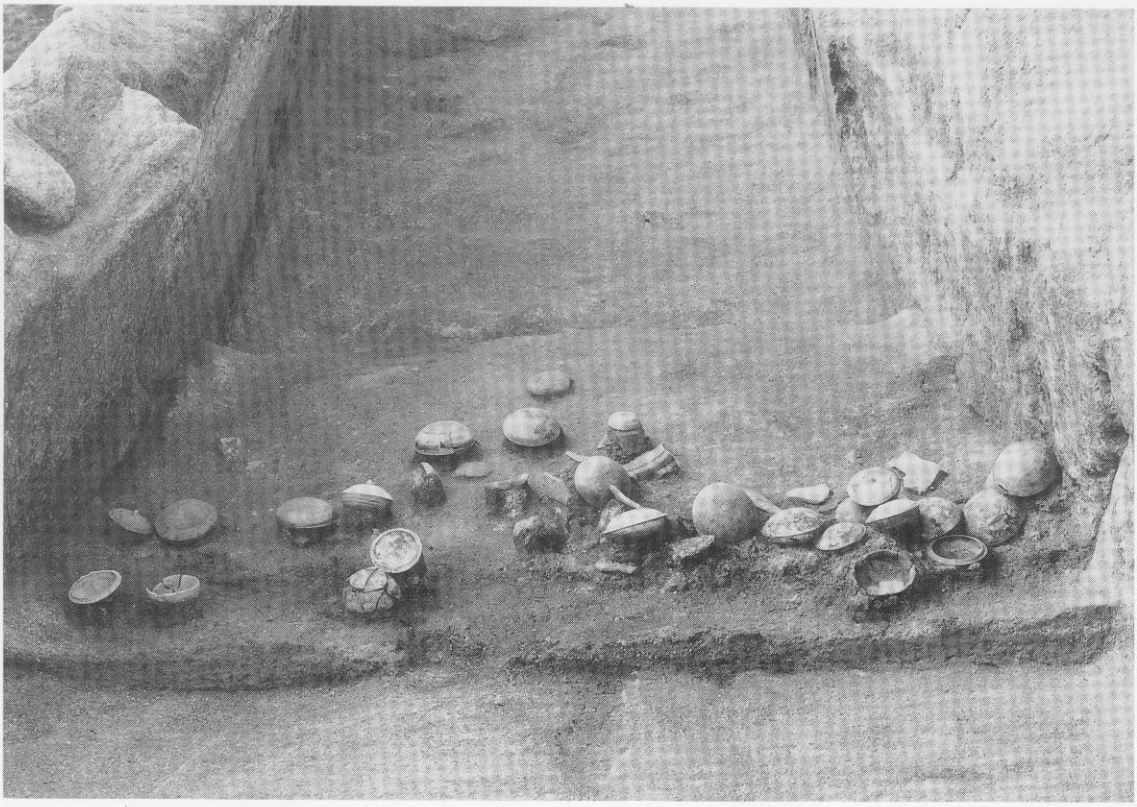
(2)　同上



(1)　40—Ⅰ号窯跡天井残存状況



(2)　40—Ⅰ号窯跡床断面と遺物出土状態



(1)　40— Ⅰ号窯跡遺物出土状態



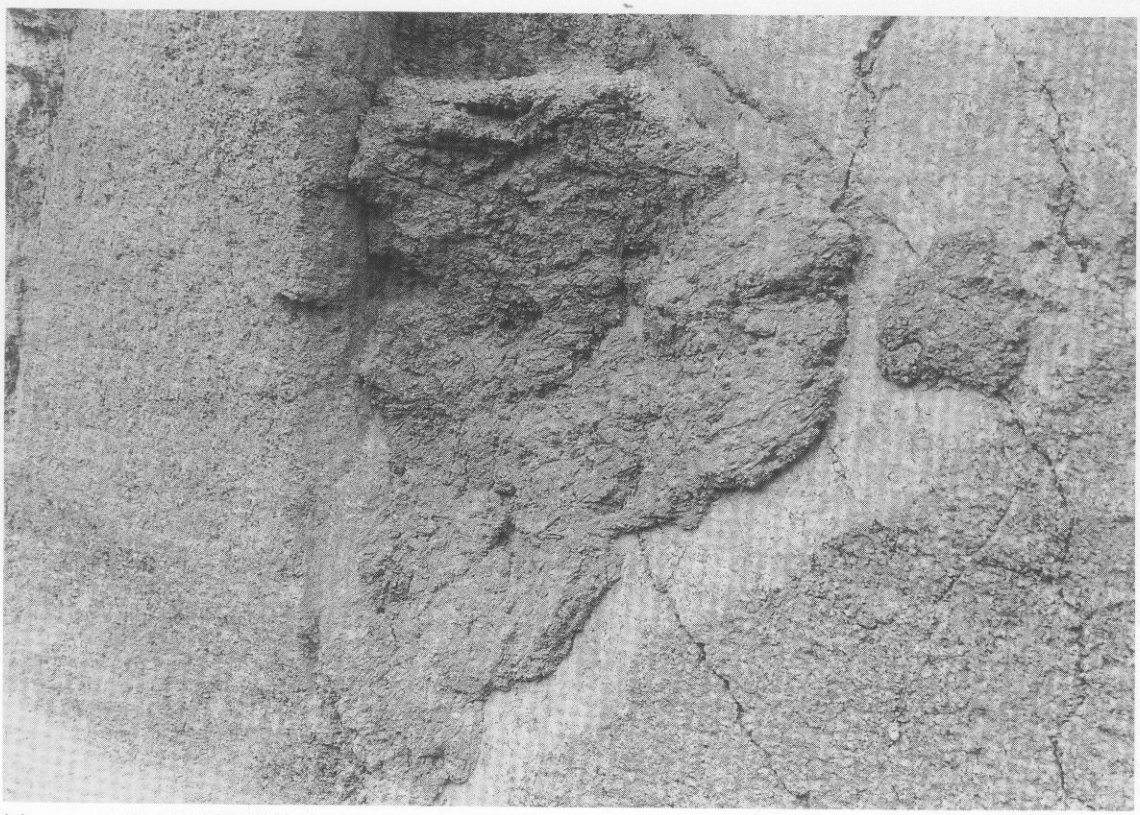
(2)　同上



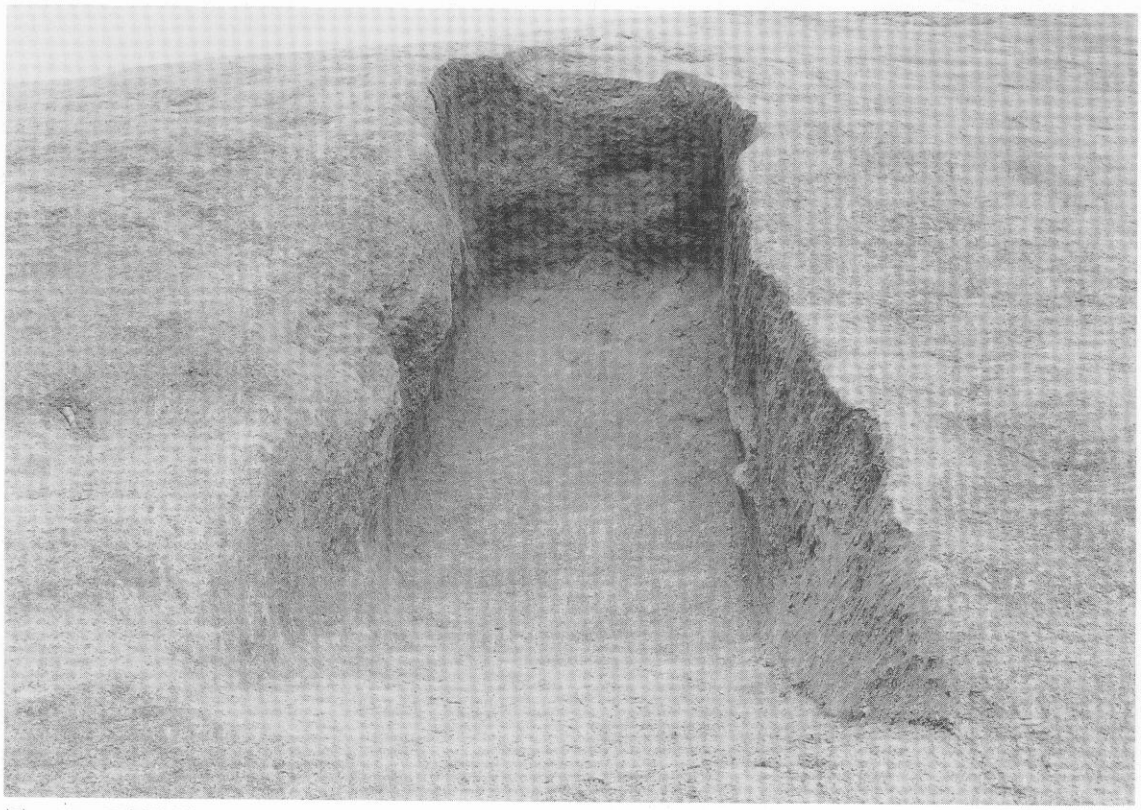
(1)　40—1号窯跡遺物出土状態



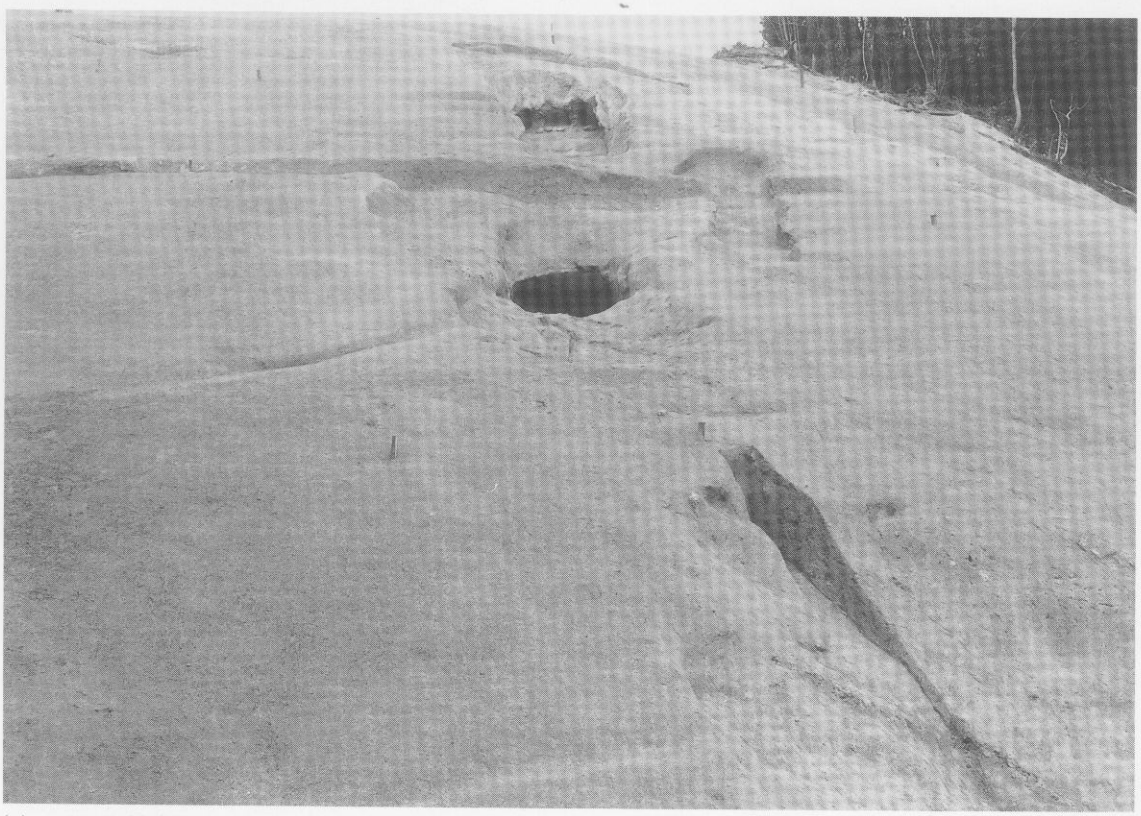
(2)　同上



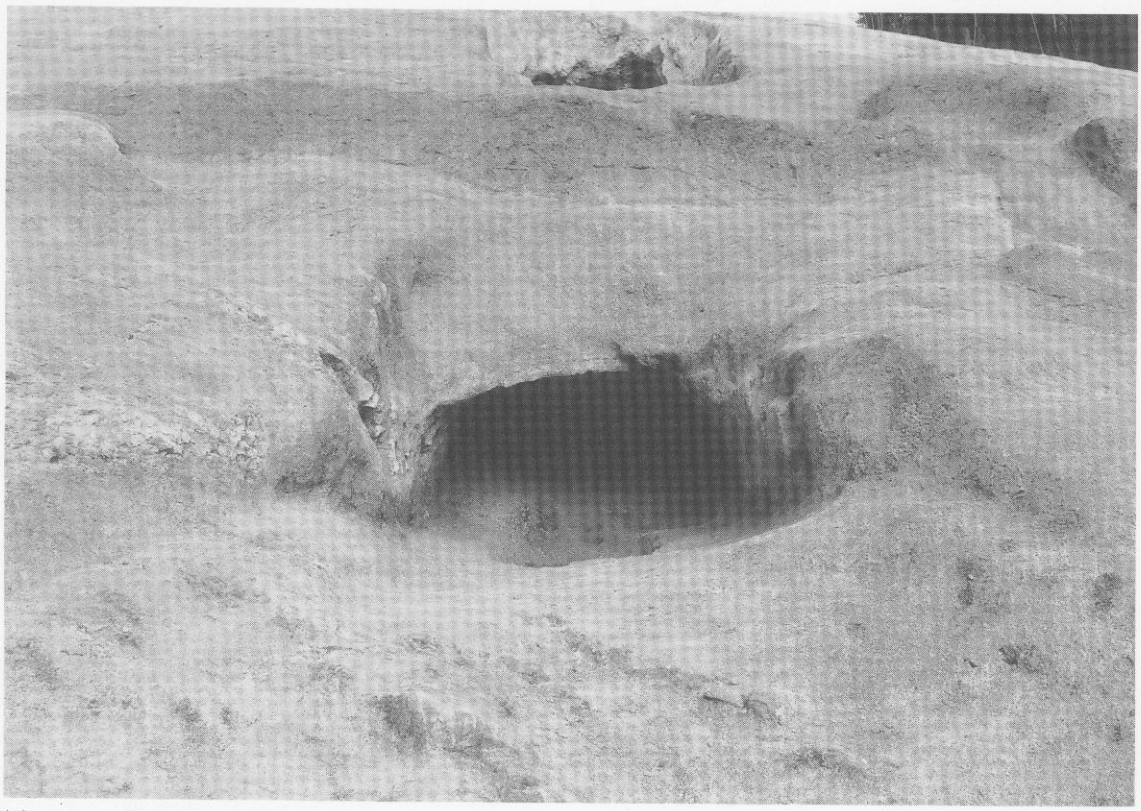
(1)　40—Ⅰ号窯跡補修状態



(2)　40—Ⅱ号窯跡



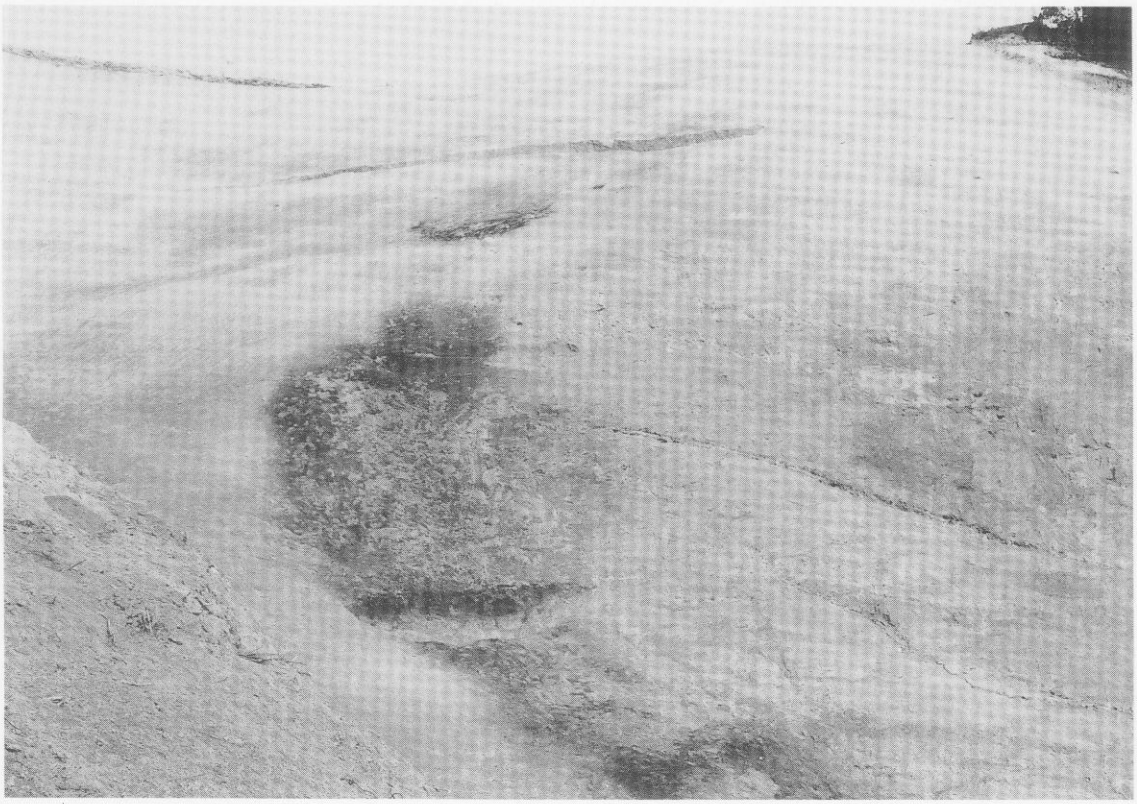
(1)　50—Ⅰ号窯跡



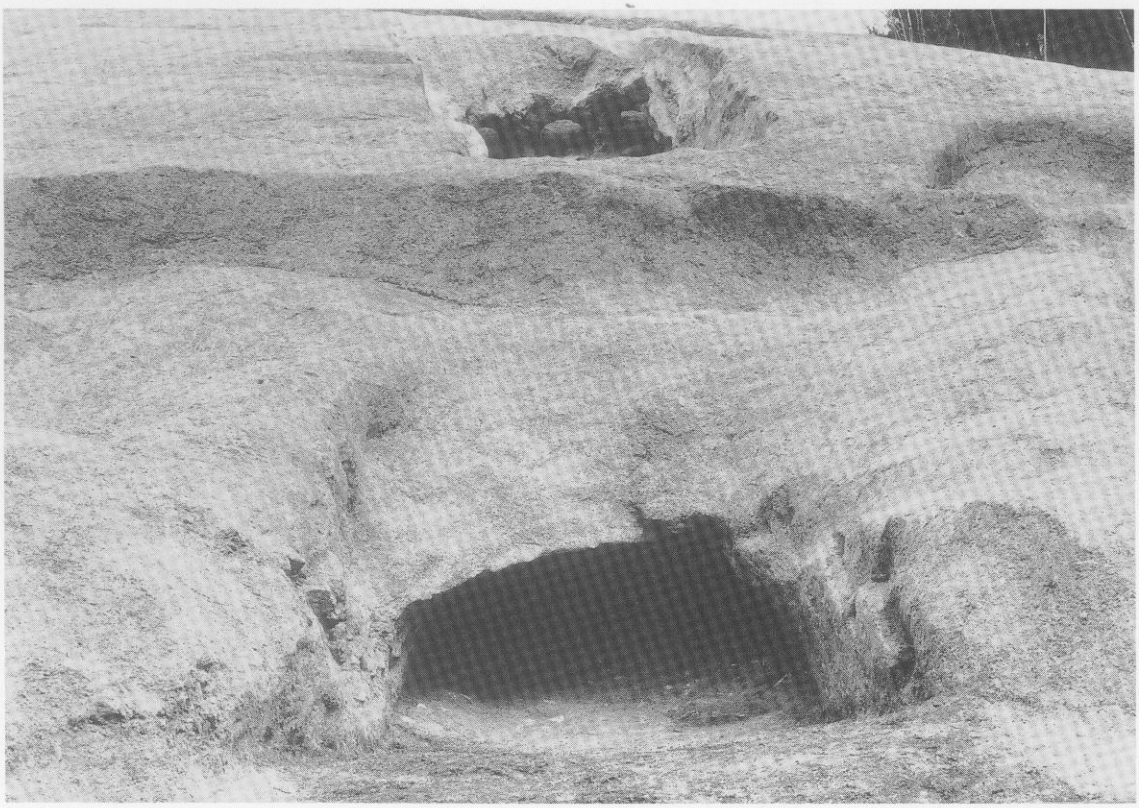
(2)　50—Ⅰ号窯跡天井残存状況



(1)　50地点遠景



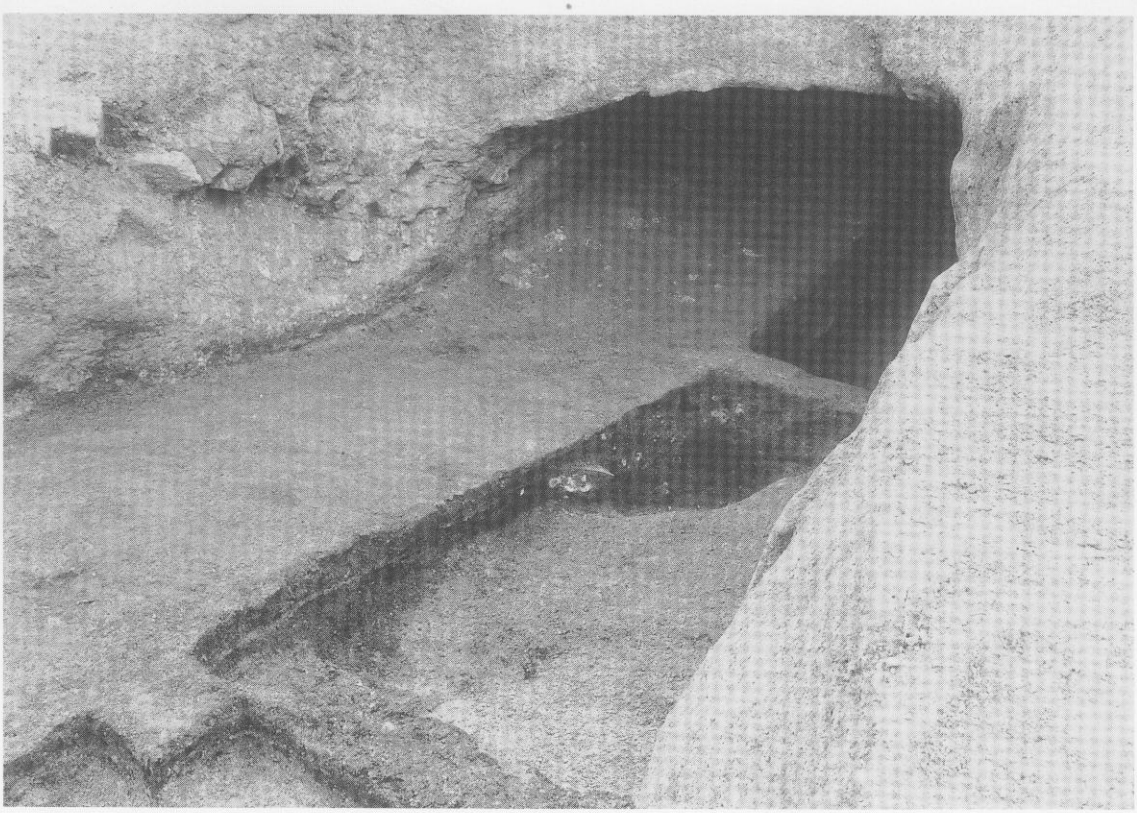
(2)　50地点窯跡検出状態



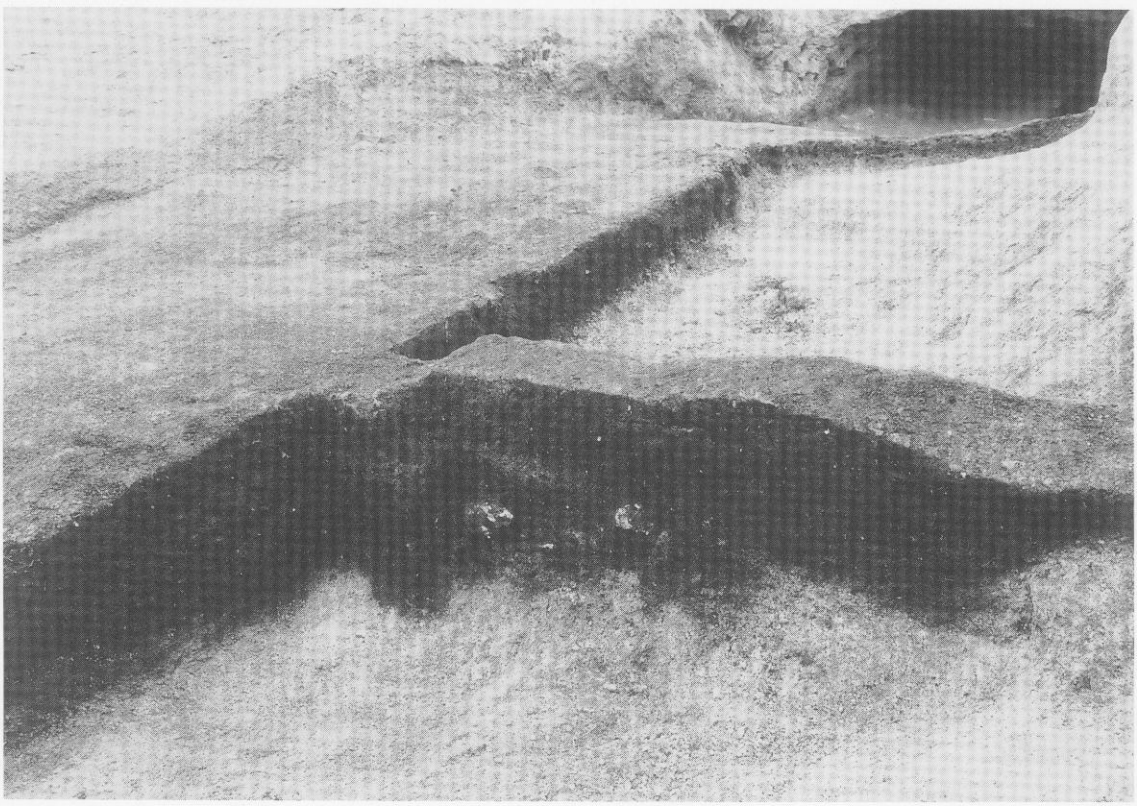
(1)　50—1号窯跡最終床面



(2)　同上



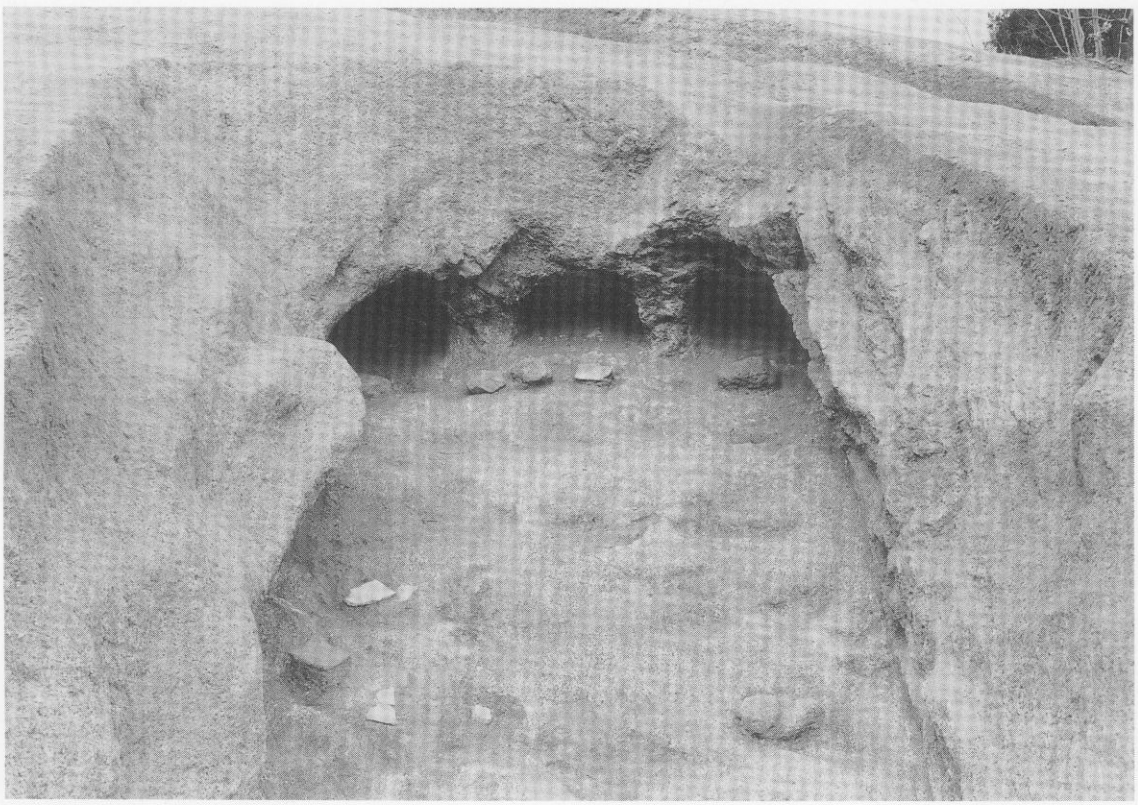
(1)　50—Ⅰ号窯跡床断面



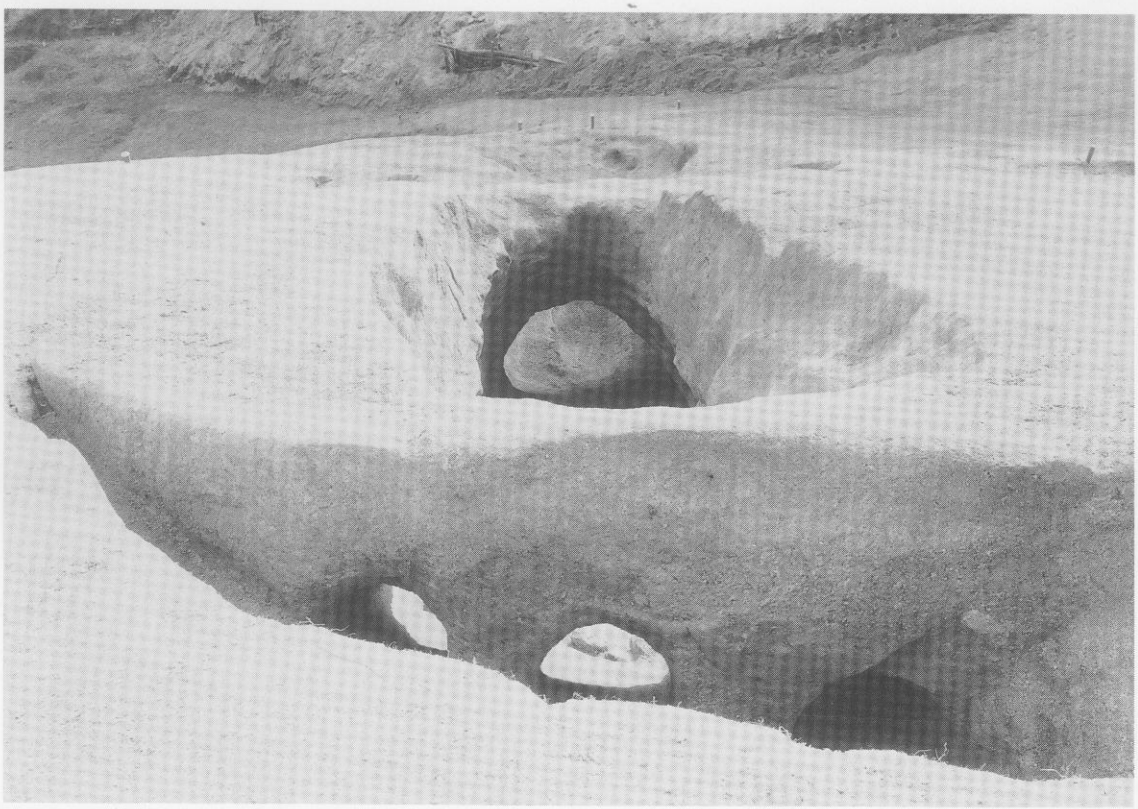
(2)　50—Ⅰ号窯跡灰原断面



(1)　50—Ⅰ号窯跡床断面



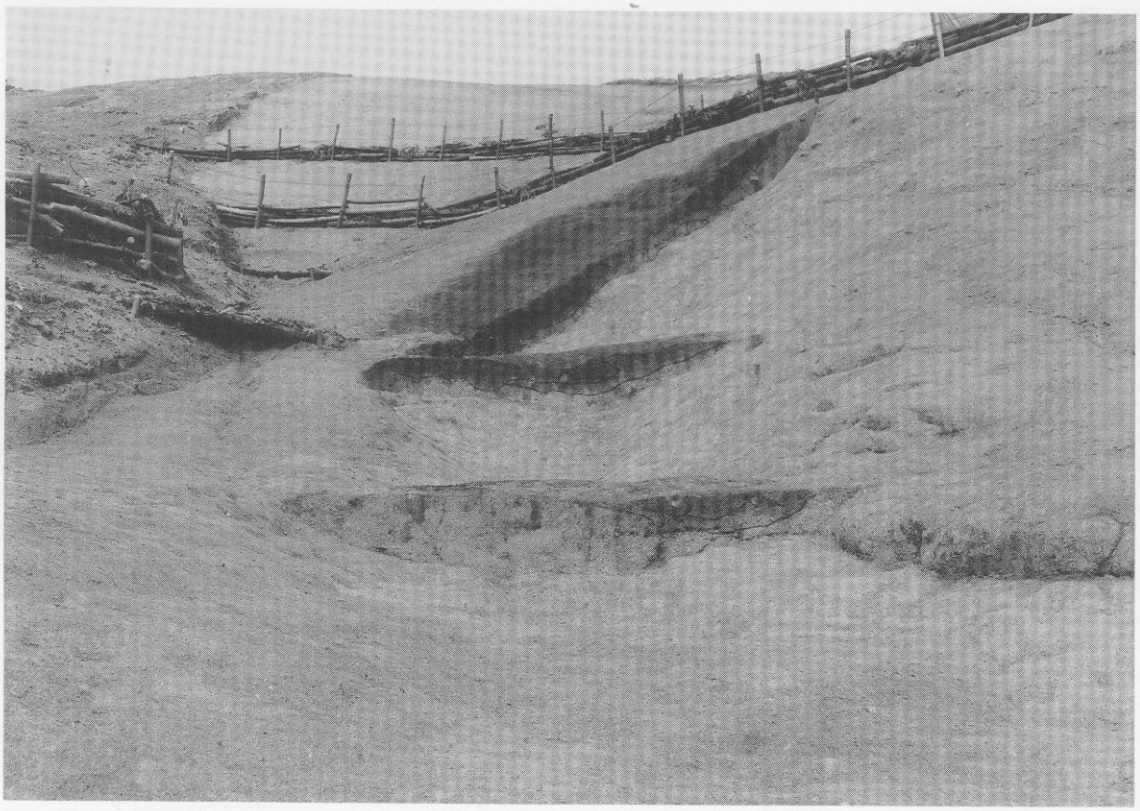
(2)　50—Ⅰ号窯跡煙道部周辺



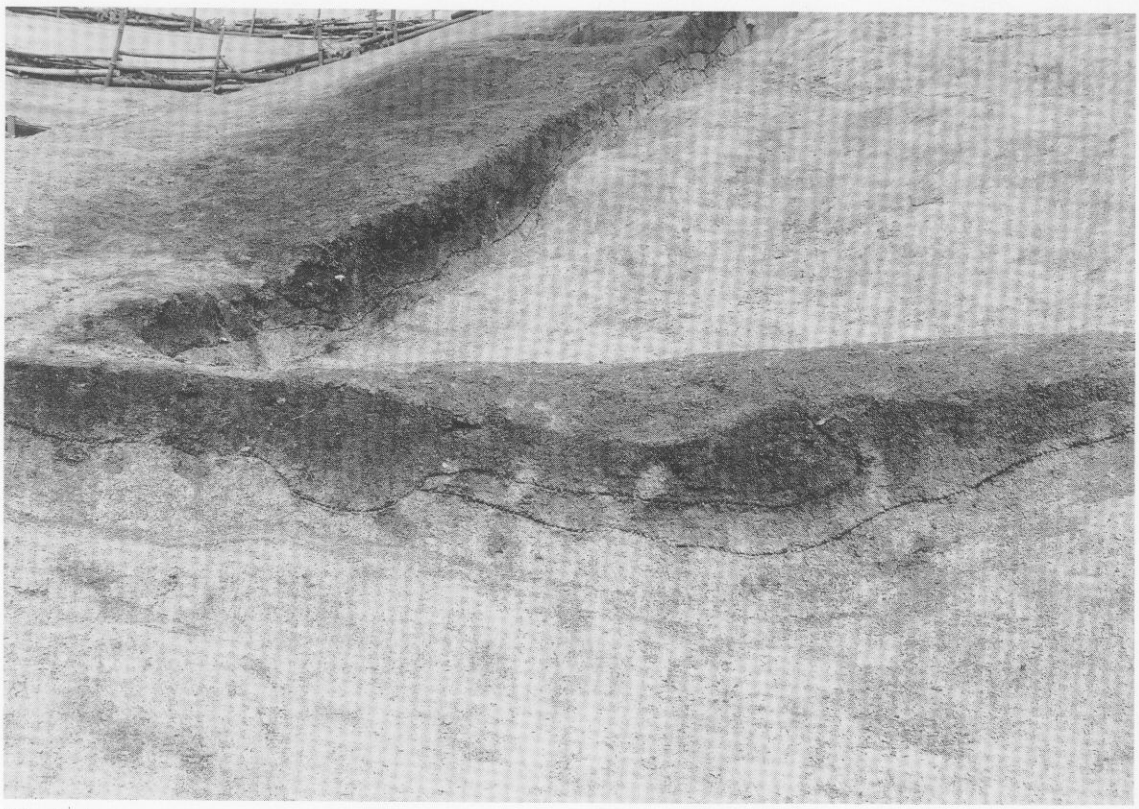
(1)　50—Ⅰ号窯跡煙出し・排水溝



(2)　50—Ⅰ号窯跡煙出し部甕片出土状態



(1)　50地点灰原断面



(2)　同上



(1)　50—II号窯跡



(2)　50—II号窯跡埋土断面



(1)　57— I 号窯跡



(2)　57地点遠景


1


2

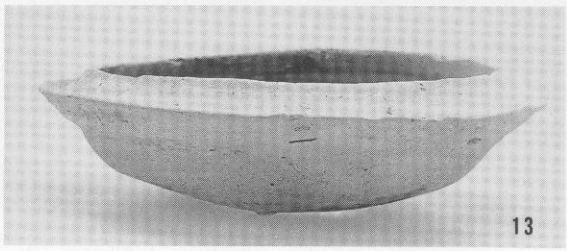

4


7

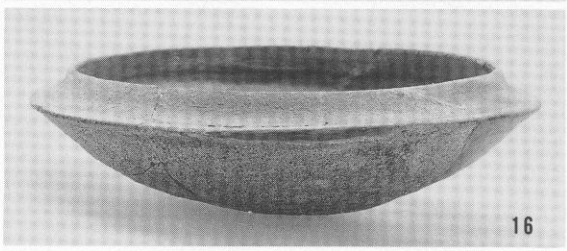

8


9


11


13


14


16

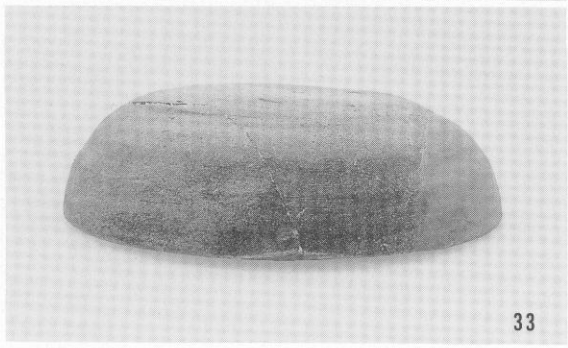

19

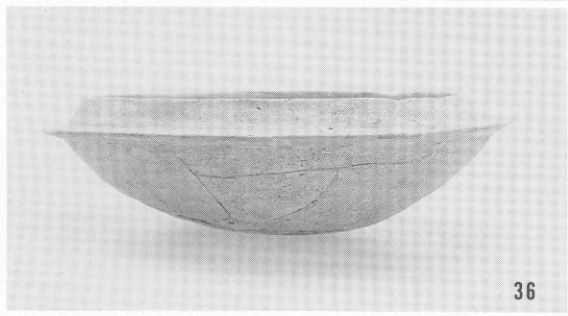

28

出土遺物（33地点）

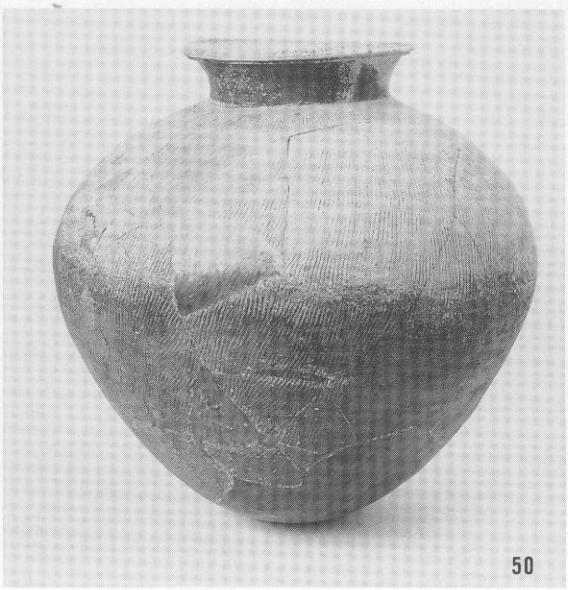

30

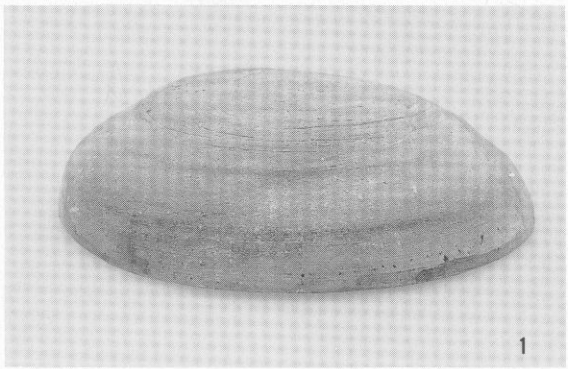

31


33

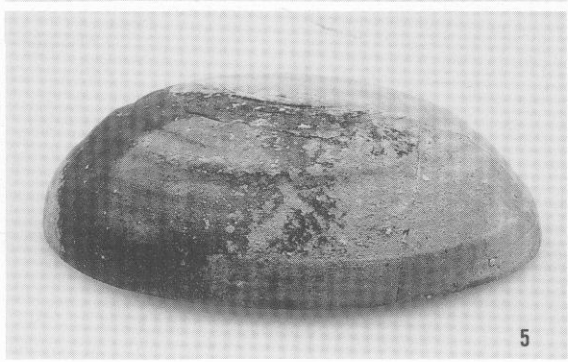

36


37


50


1


3


5

出土遺物（33・37地点）


7


9


10


11


12


14


15

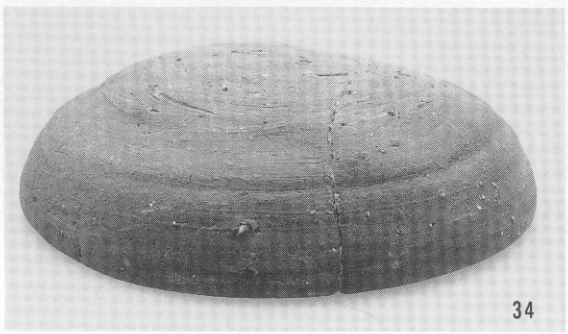

16


22

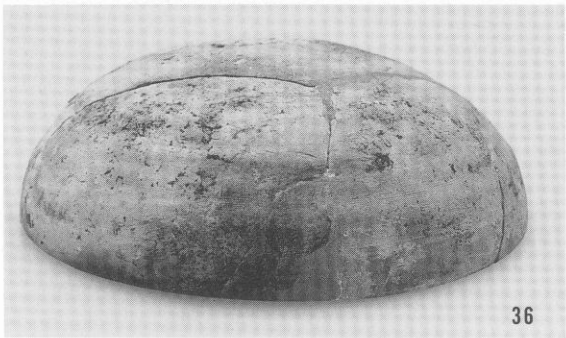
出土遺物（37地点）

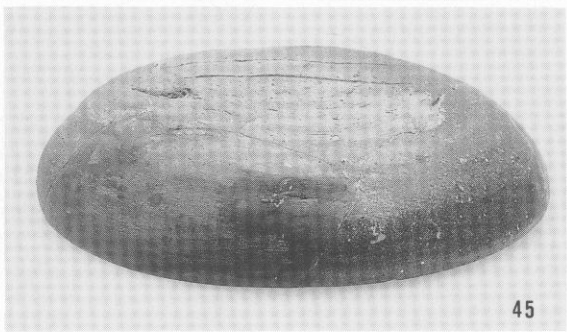

30


42


34


44

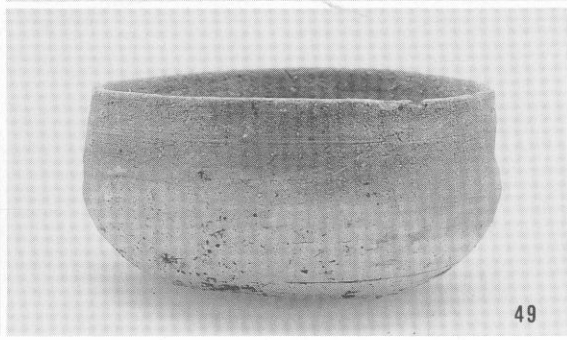

36


45


37


48


41


49

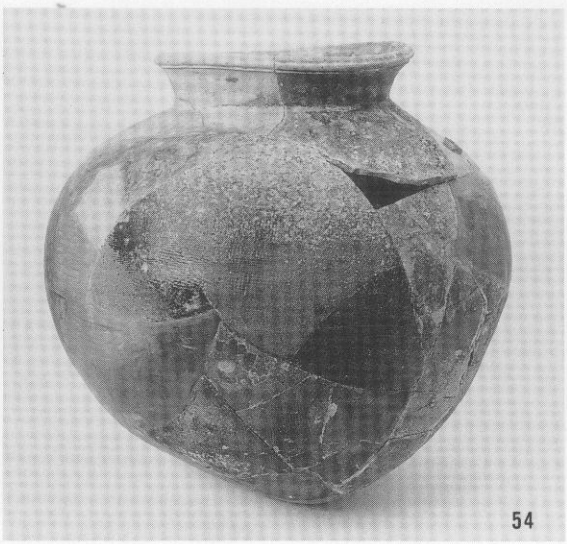
出土遺物（37地点）


50


51

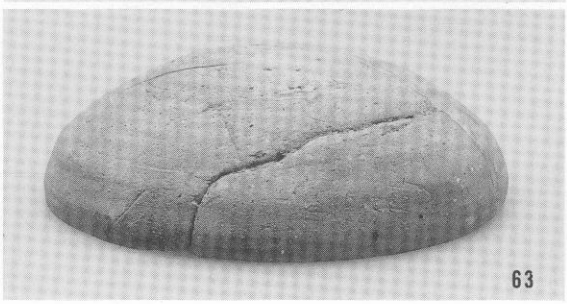

52


53


54


59


61


63

出土遺物（37地点）


67


68


69


70


71


72


73

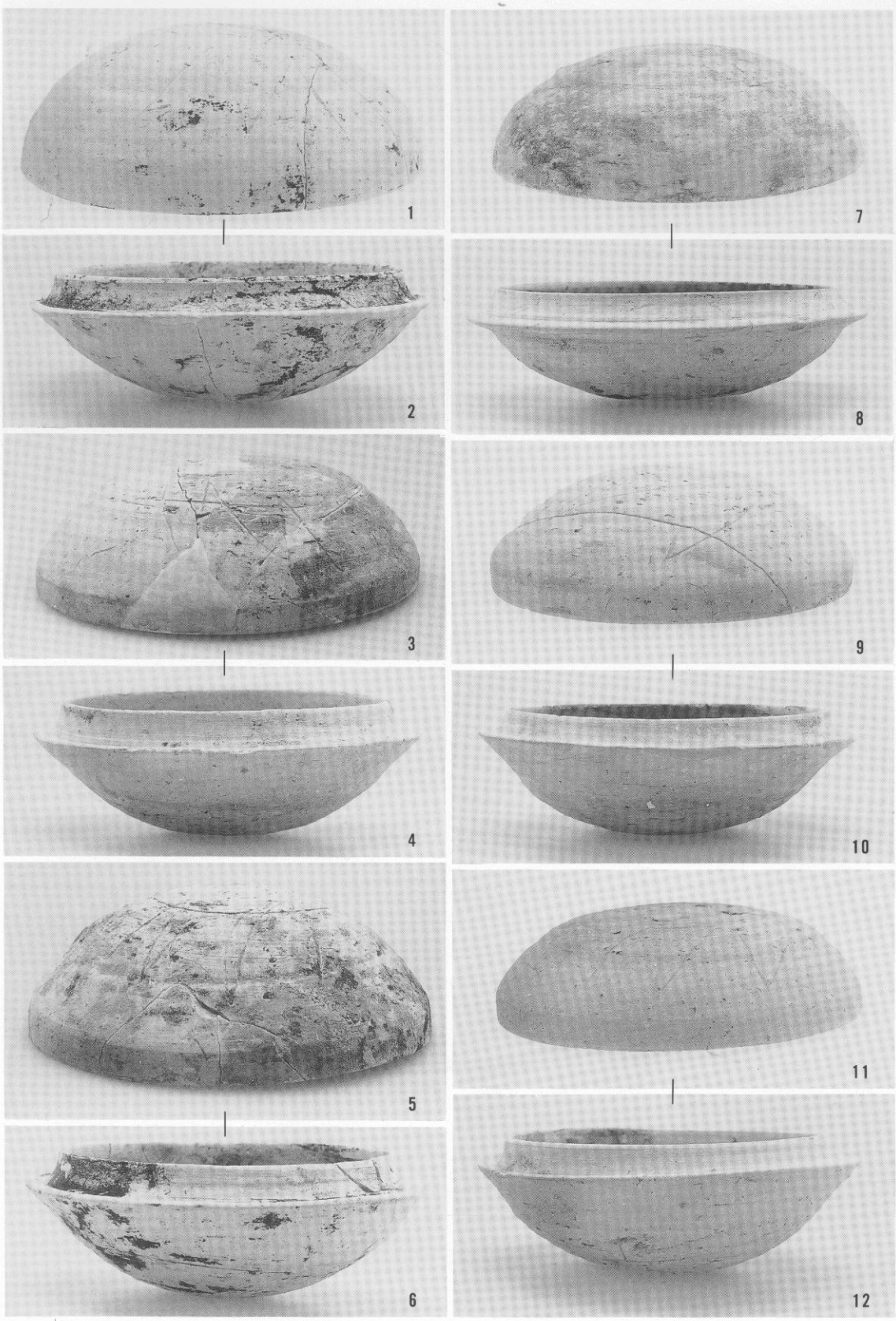

74


75

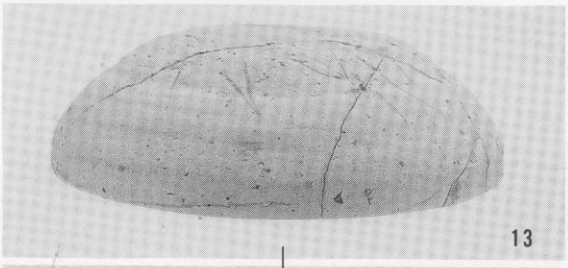

76

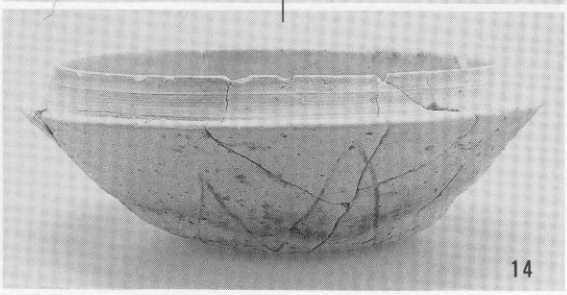

80

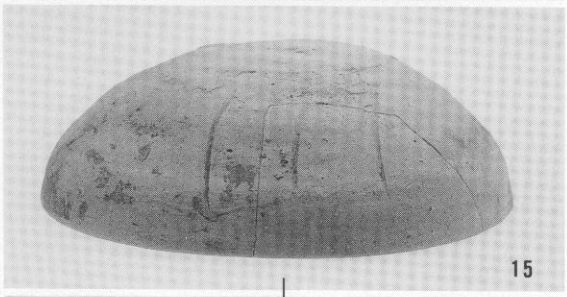
出土遺物（37地点）



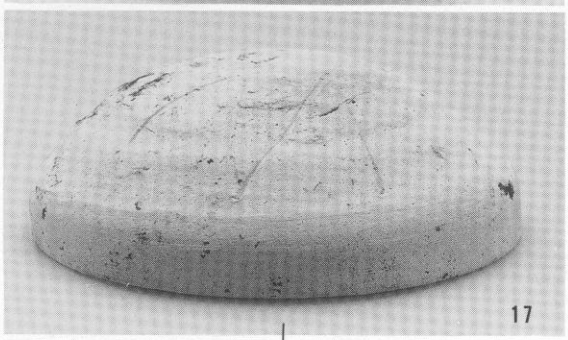
出土遺物（40地点）


13


14

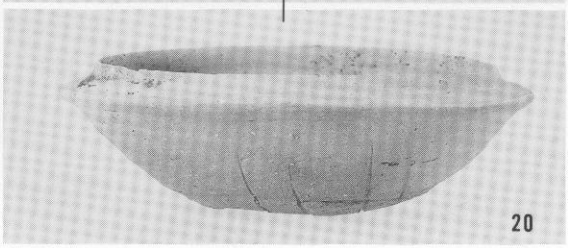

15

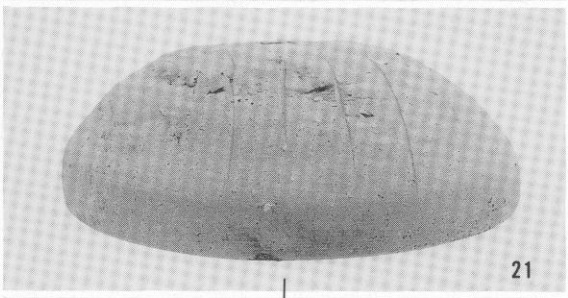

16


17

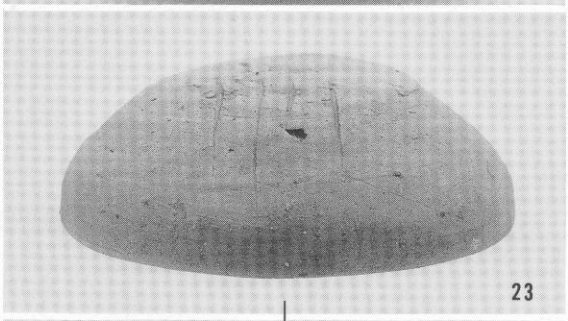

18

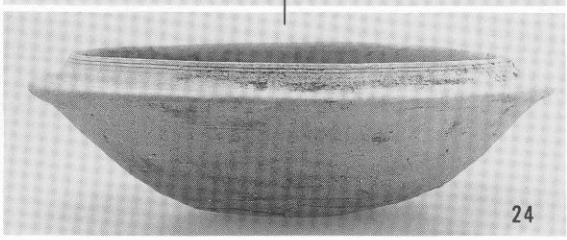

19


20

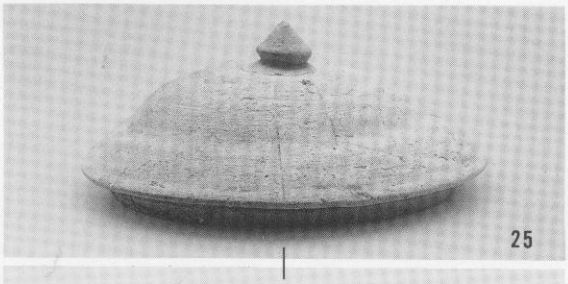

21


22


23


24

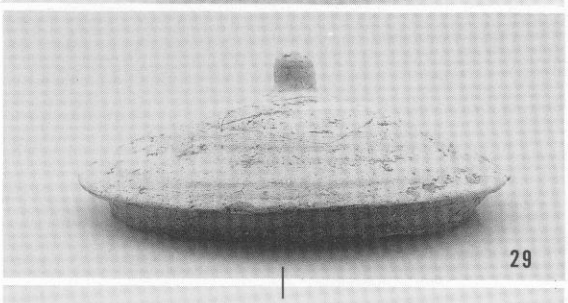
出土遺物（40地点）


25

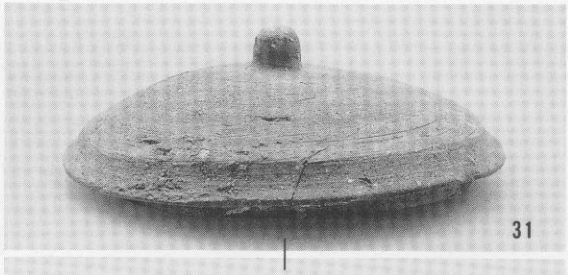

26

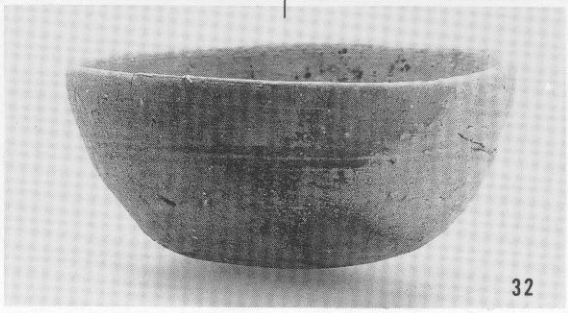

27

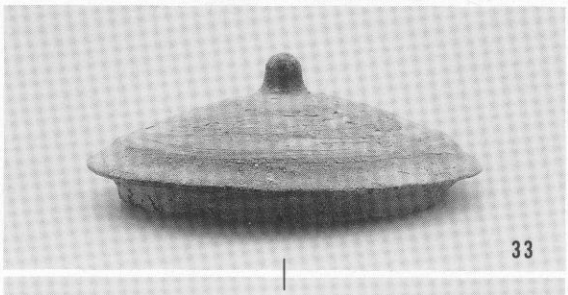

28


29


30


31


32


33


34


35


36

出土遺物（40地点）


37

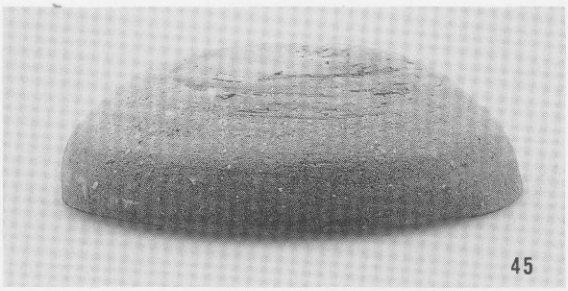

38

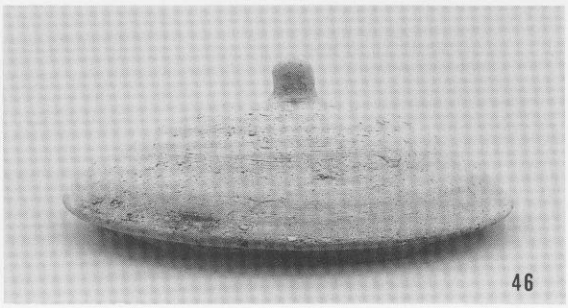

40

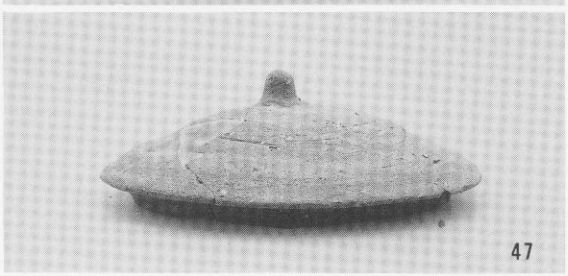

41


42


44


45


46

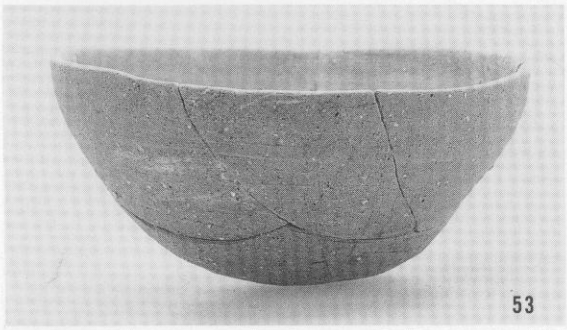

47

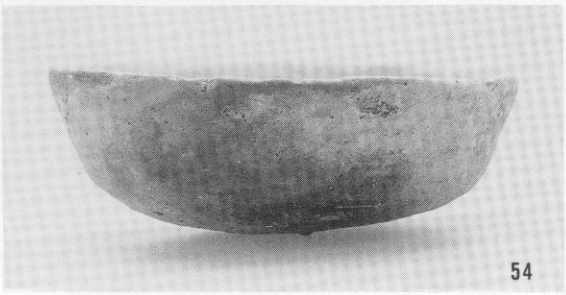

50

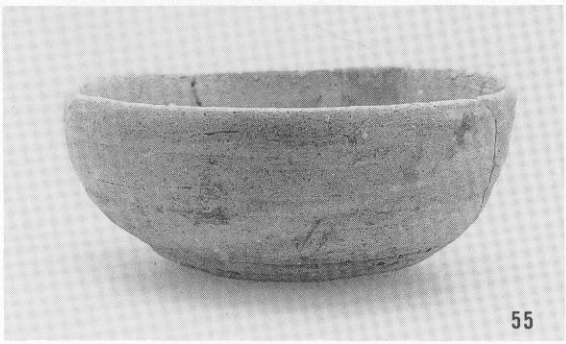

51


52

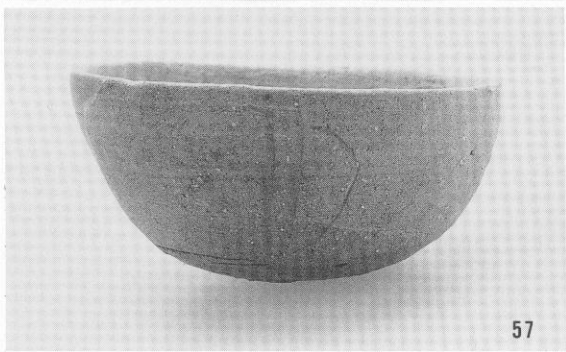
出土遺物（40地点）


53


54

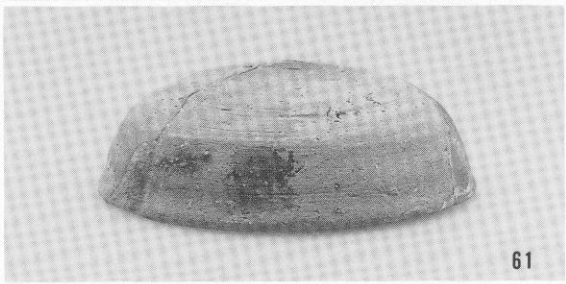

55

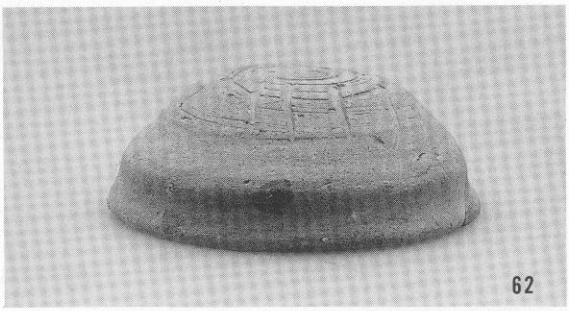

56

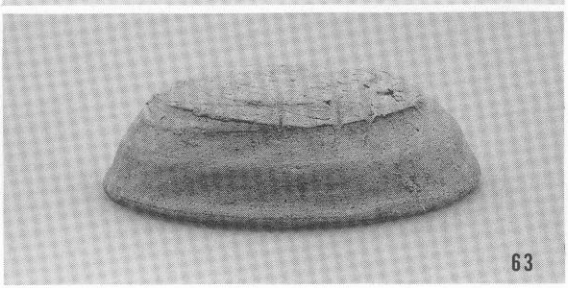

57


58

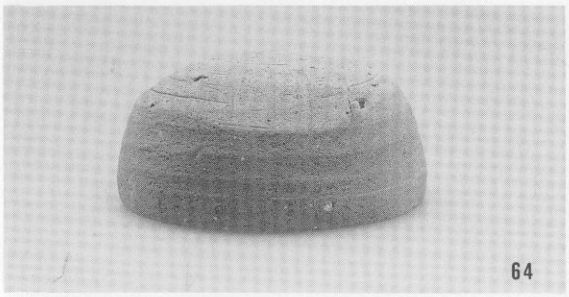

60


61


62

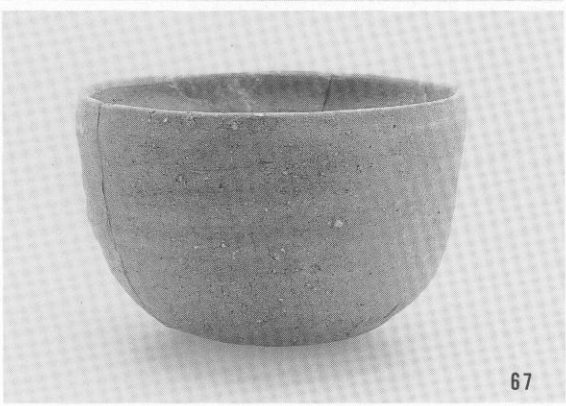

63

出土遺物（40地点）


64

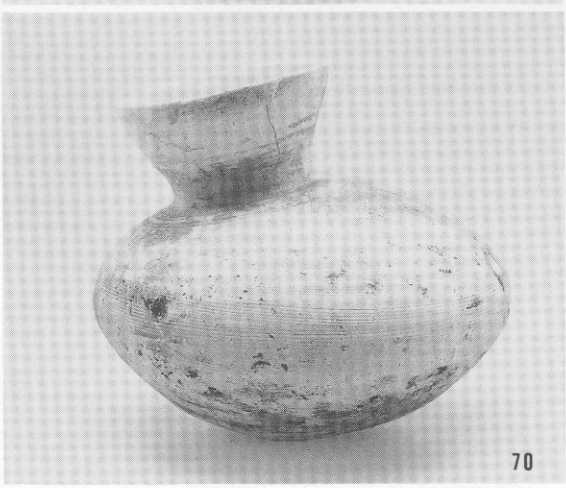

65


66


67

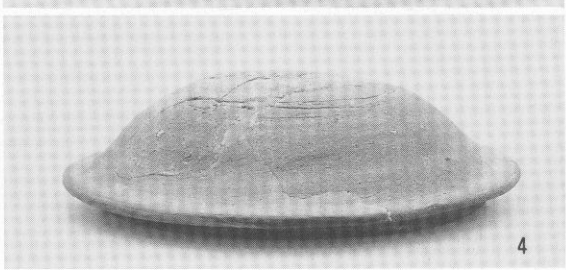

68


69


70


81


1


4

出土遺物（40・50地点）


5


6


8

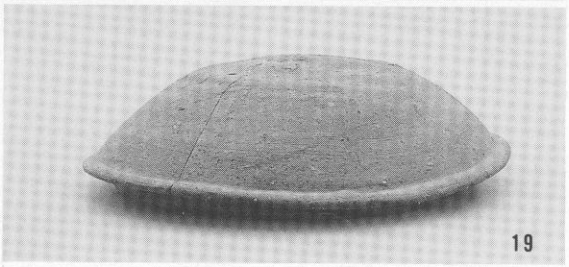

12


13

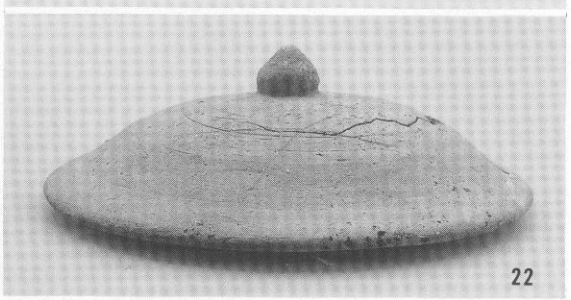

14

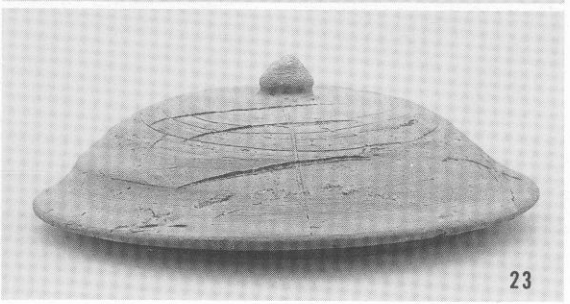

16


17

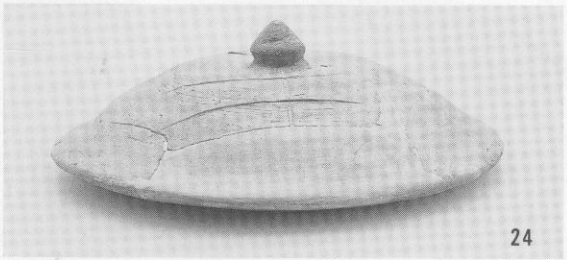

19

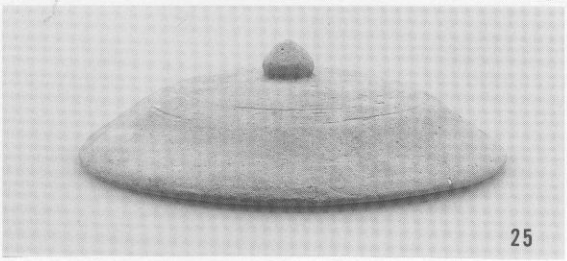

21

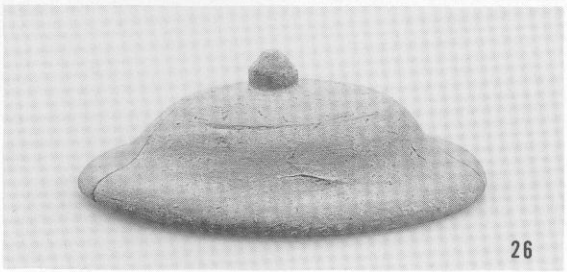

22

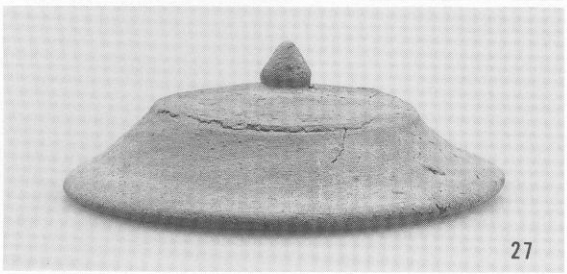

23

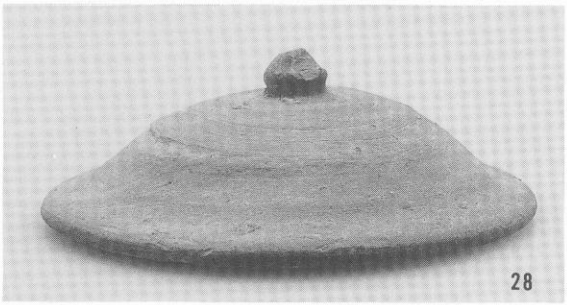
出土遺物（50地点）

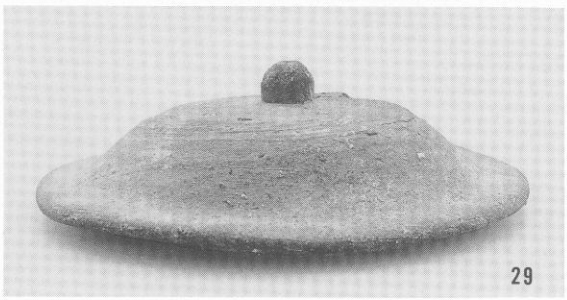

24

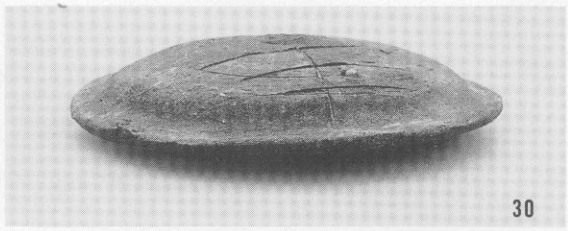

25

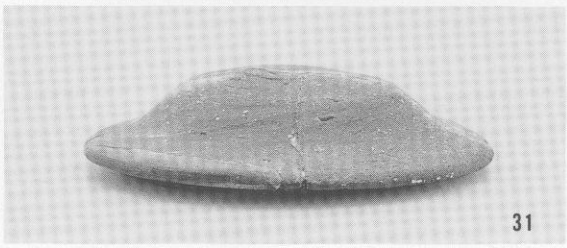

26

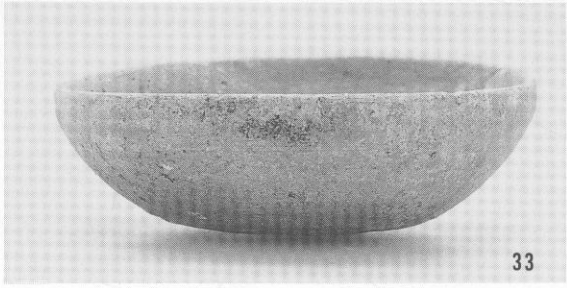

27


28

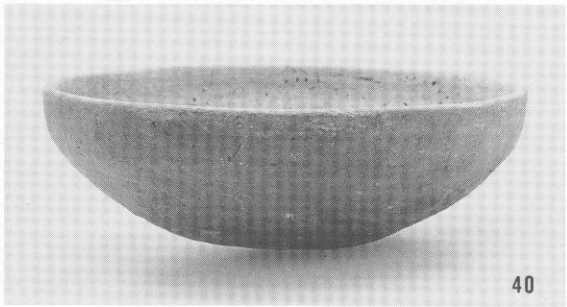

29


30


31


33


37


40


41

出土遺物（50地点）


42


43


44


45


46


47


48


49


50


51


52


53

出土遺物（50地点）


54


55


56

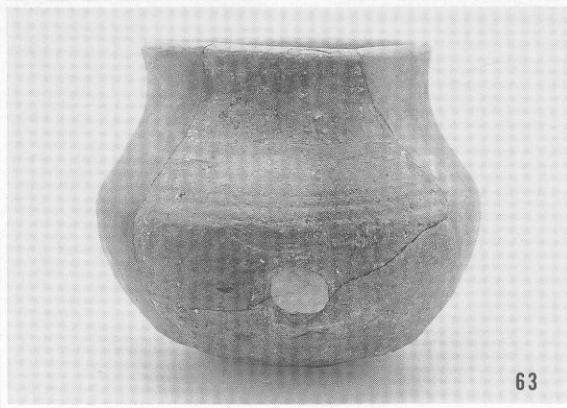

57


58

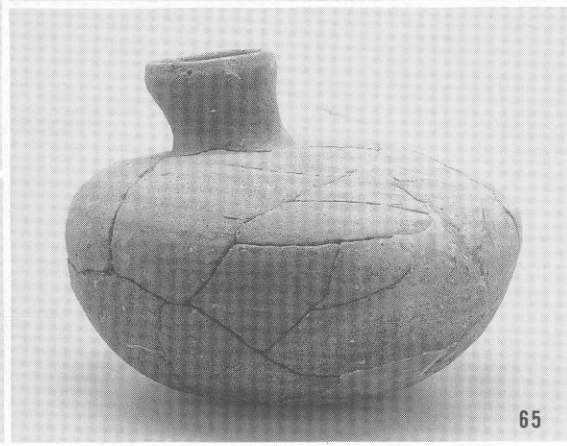

59


60


61


63

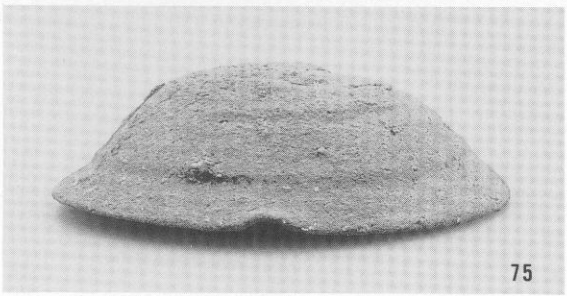

64


65

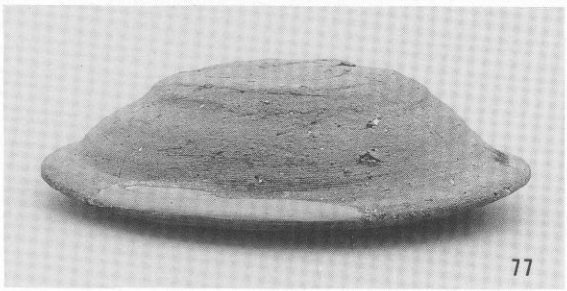
出土遺物（50地点）

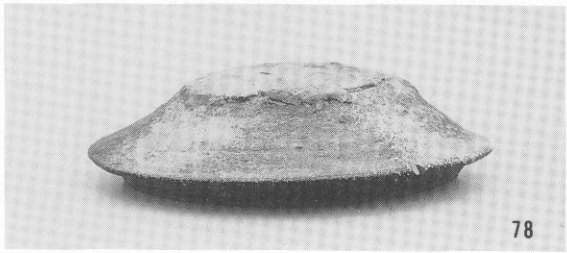

67

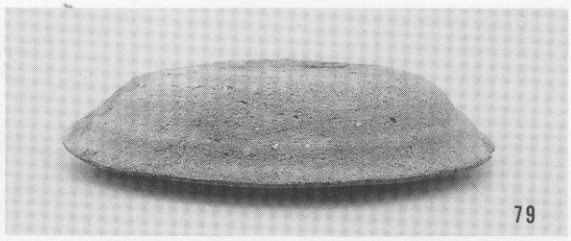

72

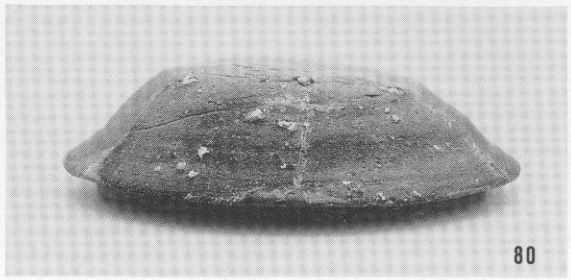

75

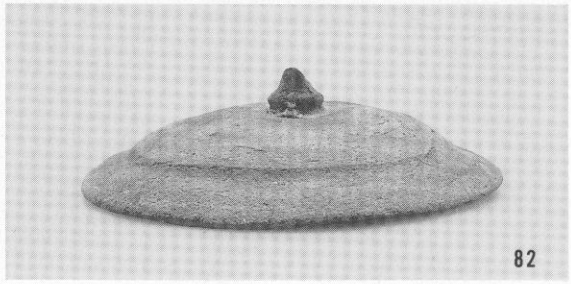

76

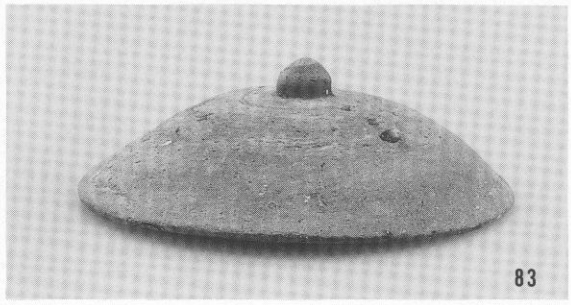

77

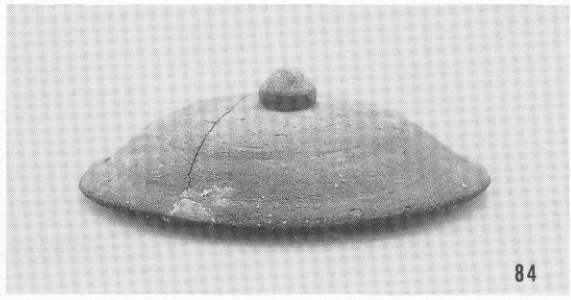

78

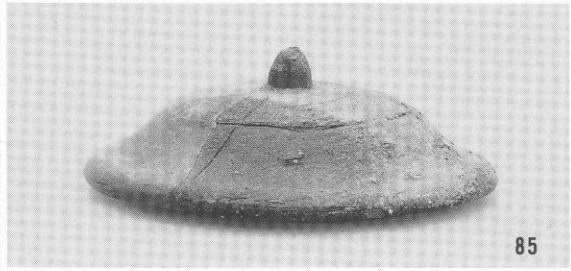

79


80


82

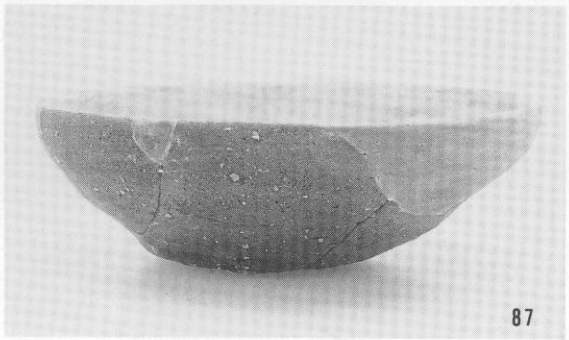

83

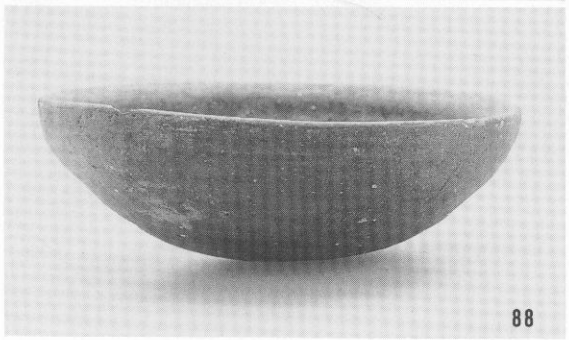

84

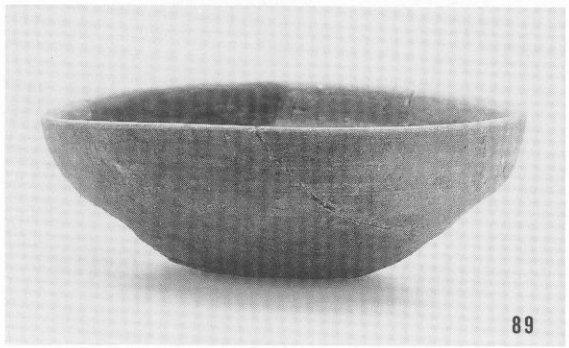

85

出土遺物（50地点）


86


87

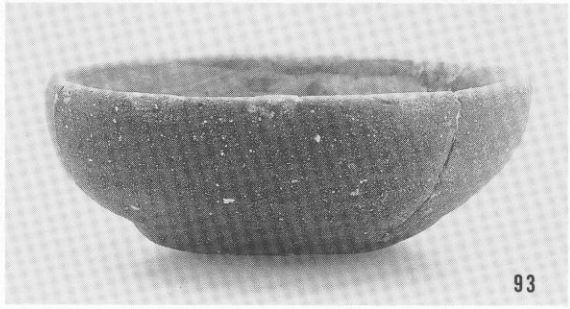

88


89


90


91


92


93


94


95


96

出土遺物（50地点）

大野城市文化財調査報告書

第 35 集

平成 4 年 3 月31日

発　行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 - 1

印　刷　昭　和　堂　印　刷
福岡市博多区榎田 2 丁目 2 -52